

# 西宮西北遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第58集

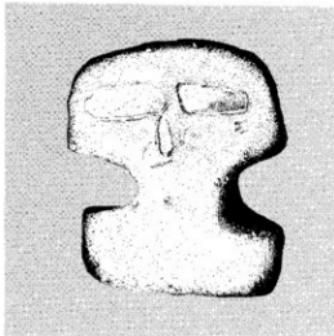
1997

津山市教育委員会



# 西宮西北遺跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第58集



1997

津山市教育委員会



## 序

西吉田北遺跡は、民間の宅地造成工事に伴い調査された遺跡です。建設予定地内には周知の遺跡は存在しませんでしたが、同一丘陵上の南側に接して大規模な集落址である西吉田遺跡が存在し、遺跡の存在が予想されました。このため確認調査を実施した結果、弥生時代の集落址、古墳などが遺存していることが明らかになりました。発掘調査の結果、古墳からは鍛冶具、鉄鏹など、集落址からも多数の遺構、遺物とともに分離形土製品など貴重な資料が出しました。特に古墳出土の遺物は、古墳時代の鉄器、鉄製品の生産や流通、そしてそれらを担った集団を考えるうえで重要な資料であると考えております。

ここにささやかではございますが、情報をいちはやく公表したいという立場から、発掘調査報告書を刊行することにいたしました。各位のご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書作成に至るまで多大な御協力をいただいた関係各位に対し、厚く御礼を申し上げます。

平成9年3月31日

津山市教育委員会  
教育長 松尾 康義

# 例　　言

1. 本書は民間宅地造成工事に伴う西吉田北遺跡の発掘調査報告書である。
1. 発掘調査及び報告書作成に要した経費はすべて原団者負担によるものである。
1. 確認調査及び発掘調査は津山市教育委員会主査行田裕美、同主事坂本心平が担当した。
1. 本書に用いたレベル高は海拔である。また方位は平面直角座標系第V系の北である。
1. 本書第2図は建設省国土地理院発行2万5千分の1（津山東部）を複製したものである。
1. 本書には挿図などに構造の略称を用いている。略称名は次のとおりである。  
SH：住居址、SB：建物址、ST：段状遺構、SD：溝、SA：柱穴列、SK：土壤  
1. 本書の執筆は、行田、坂本、及び津山市教育委員会主事平岡正弘が担当し、編集はV-2を平岡が、他は坂本が担当した。  
執筆分担は次のとおりである。  
I、II、IV 4、6・・・・・・・行田  
III、IV 2、3、5・・・・・・・坂本  
IV 1・・・・・・・・・平岡  
1. 自然科学的分析については、赤色顔料を白石 純氏に、鉄器を大澤正己氏に依頼し、報告を頂いた。  
1. 発掘調査、遺物整理および報告書作成には、津山市シルバー人材センター、文化財センター中山俊紀、安川豊史、青木聰子、小郷利幸、野上恭子、岩本えり子、家元弘子、河本雅子各諸氏の協力を得た。  
1. 1号出土鉄器のX線写真撮影については、岡山県古代吉備文化財センターに依頼した。  
1. 出土遺物・図面類は、津山弥生の里文化財センターに保管している。  
1. 表紙題字：弥生の里文化財センター 岩本えり子、扉カット：同 家元弘子



## 本文目次

I 遺跡の立地と周辺の遺跡	1
1 遺跡の位置と立地	1
2 周辺の主要遺跡	2
II 調査の経過	4
1 調査に至る経過	4
2 調査の経過	4
3 調査体制	5
III 調査の記録	6
1 A地区の調査	6
(1) 縄文時代	6
(2) 弥生時代以降	8
2 B地区の調査	12
(1) 住居址	12
(2) 建物跡	41
(3) 段状造構	46
(4) 溝状造構	53
(5) 柱穴列	54
(6) 土壙	55
①袋状土壙	56
②方形土壙	69
③その他の土壙	79
(7) 出土石器	79
(8) その他の遺構と遺物	83
3 C地区の調査	84
(1) 1号墳	84
(2) その他の遺構と遺物	90
IV まとめ	91
1 縄文土器の時期について	91
2 弥生土器の時期について	91
3 各遺構の時期と集落の変遷について	96
4 1号墳の築造時期について	99
5 鋳冶具について	99
6 鉄鋸について	101
V 自然科学的分析	109
1 西吉田北遺跡住居址ピット内出土赤色顔料について	109
2 西吉田北1号墳とその周辺遺跡出土鉄製品の金属学的調査	110

## 挿 図 目 次

第1図 西古田北遺跡調査区位置図	1
第2図 周辺主要遺跡分布図	2
第3図 A地区楓倒木位置図	6
第4図 A地区出土繩文土器	7
第5図 A地区遺構配置図	8
第6図 建物址1平・断面図	9
第7図 土塙1、2平・断面図	9
第8図 B地区遺構配置図	10
第9図 住居址1平・断面図	12
第10図 住居址1出土土器	12
第11図 住居址2平・断面図	13
第12図 住居址2出土土器	14
第13図 住居址3平・断面図	15
第14図 住居址3出土土器	15
第15図 住居址4平・断面図	16
第16図 住居址4出土土器	16
第17図 住居址5平・断面図	16
第18図 住居址5出土土器	17
第19図 住居址6平・断面図	18
第20図 住居址6出土土器	18
第21図 住居址7、8平・断面図	19
第22図 住居址7出土土器	20
第23図 住居址8出土土器	21
第24図 住居址9平・断面図	22
第25図 住居址9出土土器	22
第26図 住居址10、段状遺構12平・断面図	23
第27図 住居址10出土土器	23
第28図 住居址11平・断面図	24
第29図 住居址11出土土器	25
第30図 住居址12平・断面図	25
第31図 住居址12出土土器	26
第32図 住居址13平・断面図	27
第33図 住居址14平・断面図	27
第34図 住居址14出土土器	28
第35図 住居址15平・断面図	29
第36図 住居址15出土土器	29

第37図 住居址16平・断面図	30
第38図 住居址16出土土器	30
第39図 住居址17平・断面図	31
第40図 住居址17出土土器	31
第41図 住居址18、19平・断面図	32
第42図 住居址18出土土器	32
第43図 住居址19出土土器	33
第44図 住居址20平・断面図	34
第45図 住居址20出土土器	34
第46図 住居址21平・断面図	35
第47図 住居址21出土土器	36
第48図 住居址22平・断面図	36
第49図 住居址22出土土器	37
第50図 住居址23平・断面図	37
第51図 住居址23出土土器	38
第52図 住居址24平・断面図	39
第53図 住居址24出土土器	40
第54図 住居址25、26平・断面図	40
第55図 建物址1平・断面図	41
第56図 建物址2平・断面図	41
第57図 建物址3平・断面図	42
第58図 建物址3出土土器	42
第59図 建物址4平・断面図	43
第60図 建物址4出土土器	43
第61図 建物址5平・断面図	43
第62図 建物址6平・断面図	44
第63図 建物址7、溝1、柱穴列3、4平・断面図	44
第64図 溝1出土土器	45
第65図 建物址8平・断面図	45
第66図 建物址9平・断面図	46
第67図 建物址10平・断面図	46
第68図 段状造構1～6平・断面図	47
第69図 段状造構1出土土器	48
第70図 段状造構3出土土器	48
第71図 段状造構7、8平・断面図	49
第72図 段状造構7出土土器	50
第73図 段状造構9～11、13平・断面図	51
第74図 段状造構9出土土器	52

第75図 段状遺構11出土土器	52
第76図 段状遺構13出土土器	53
第77図 溝2平・断面図	54
第78図 溝2出土土器	54
第79図 杜穴列1、2、5、6平・断面図	55
第80図 土壙6平・断面図	56
第81図 土壙6出土土器	57
第82図 土壙7平・断面図	58
第83図 土壙7出土土器	59
第84図 土壙8平・断面図	60
第85図 土壙8出土土器	61
第86図 土壙9～11平・断面図	62
第87図 土壙9出土土器	62
第88図 土壙11出土土器	62
第89図 土壙12、13平・断面図	63
第90図 土壙13出土土器	64
第91図 土壙14平・断面図	64
第92図 土壙14出土土器	64
第93図 土壙24平・断面図	65
第94図 土壙24出土土器	65
第95図 土壙25平・断面図	66
第96図 土壙25出土土器	66
第97図 土壙33平・断面図	67
第98図 土壙33出土土器	67
第99図 土壙34平・断面図	68
第100図 土壙34出土土器	68
第101図 土壙35平・断面図	68
第102図 土壙35出土土器	69
第103図 土壙23平・断面図	69
第104図 土壙23出土土器	69
第105図 土壙26平・断面図	70
第106図 土壙27平・断面図	70
第107図 土壙36平・断面図	70
第108図 土壙36出土土器	70
第109図 土壙38平・断面図	71
第110図 土壙38出土土器	71
第111図 土壙39平・断面図	72
第112図 土壙39出土土器（1）	73

第113図 土壙39出土土器（2）	74
第114図 土壙40平・断面図	75
第115図 土壙40出土上器	75
第116図 土壙41平・断面図	75
第117図 土壙41出土土器・上製品	76
第118図 土壙42平・断面図	77
第119図 土壙42出土上器	77
第120図 土壙1～5、15～19平・断面図	78
第121図 土壙28～30平・断面図	79
第122図 石器（1）	81
第123図 石器（2）	82
第124図 石器（3）	83
第125図 遺構に伴わない遺物	83
第126図 C地区遺構配図図	84
第127図 1号埴平・断面図	85
第128図 1号埴主体部平・断・立面図	86
第129図 1号埴出土鉄器	87
第130図 1号埴出土上器（1）	88
第131図 1号埴出土土器（2）	89
第132図 西古田北遺跡中期末～後期前半弥生土器編年図	93
第133図 小原遺跡段状遺構1出土土器	94
第134図 西古田北遺跡弥生時代時期別遺構配図図	97
第135図 国内出土鉄鐸実測図	104
第136図 韓国出土鉄鐸実測図	105

## 表 目 次

表1 従来の編年との対比	95
表2 西古田北1号埴、長戻山、長戻山北古墳群鍛冶具、鉄滓等副葬古墳一覧表	100
表3 鉄鐸出土遺跡	102
表4 韓国での鉄鐸出土遺跡	106

## 図版目次

図版1-1 A地区全景（北東から）	図版18-1 住居址23（東から）
2 建物址1（南西から）	2 住居址24（北東から）
図版2-1 土壙1（東から）	図版19-1 住居址25、26付近（南から）
2 上壙2（南西から）	2 調査風景
図版3 A地区出土遺物	図版20-1 建物址1（南東から）
図版4-1 B地区北半部（上空東から）	2 建物址2（北から）
2 住居址1（南から）	図版21-1 建物址3（南から）
図版5-1 住居址2（北から）	2 建物址4（東から）
2 住居址2柱穴7	図版22-1 建物址5（東から）
図版6-1 住居址3（南から）	2 建物址6（東から）
2 住居址4（北から）	図版23-1 建物址7、溝1、柱穴列3、4 (東から)
図版7-1 住居址5（南から）	2 建物址8（東から）
2 住居址5柱穴1遺物出土状況	図版24-1 建物址9（南から）
3 住居址5柱穴4遺物出土状況	2 建物址10（北から）
図版8-1 住居址6（南東から）	図版25-1 段状遺構1（東から）
2 住居址7（南東から）	2 段状遺構2（南西から）
図版9-1 住居址8（東から）	図版26-1 段状遺構3～6（北東から）
2 住居址8北側床溝内上層断面、石の 据え付け状況	2 段状遺構7、8（東から）
図版10-1 住居址9（東から）	図版27-1 段状遺構9（東から）
2 住居址10（南から）	2 段状遺構11（東から）
図版11-1 住居址10遺物出土状況（東から）	図版28-1 段状遺構11ピット2遺物出土状況 (東から)
2 住居址11（東から）	2 住居址10、段状遺構12（東から）
図版12-1 住居址12（東から）	図版29-1 段状遺構13（東から）
2 住居址13（南から）	2 溝2周辺（北から）
図版13-1 住居址14（南西から）	図版30-1 柱穴列6（北から）
2 住居址15（西から）	2 柱穴列1（西から）
図版14-1 住居址16（北西から）	図版31-1 土壙6（北西から）
2 住居址17（東から）	2 土壙7（北から）
図版15-1 住居址18、19（北西から）	3 土壙8（東から）
2 住居址20（北西から）	図版32-1 上壙9～13配列状況
図版16-1 住居址20ピット5赤色顔料検出状況	2 上壙9（北から）
2 住居址21（西から）	3 土壙10（南から）
図版17-1 住居22（北東から）	図版33-1 土壙11（南から）
2 住居址22遺物出土状況 (南壁沿いピット5西側)	2 土壙12（北から）

- 3 土壙13（北から）
- 図版34－1 土壙14（南から）
  - 2 土壙24（南から）
  - 3 土壙25（北から）
- 図版35－1 土壙33（北から）
  - 2 土壙34（北東から）
  - 3 土壙35
- 図版36－1 土壙23（南東から）
  - 2 土壙26（西から）
  - 3 土壙27（北東から）
- 図版37－1 土壙36（北西から）
  - 2 土壙38（南東から）
  - 3 土壙39（北東から）
- 図版38－1 土壙40（南西から）
  - 2 土壙41（南西から）
  - 3 土壙42（北から）
- 図版39 その他の土壙（1）
- 図版40 その他の土壙（2）
- 図版41 B地区出土遺物（1）
- 図版42 B地区出土遺物（2）
- 図版43 B地区出土遺物（3）
- 図版44 B地区出土遺物（4）
- 図版45 B地区出土遺物（5）
- 図版46 B地区出土遺物（6）
- 図版47 B地区出土遺物（7）
- 図版48－1 1号墳全景（南から）
  - －2 1号墳主体部（南東から）
- 図版49－1 1号墳主体部（北東から）
  - －2 鉄鋤出土状況
- 図版50 1号墳出土遺物（1）
- 図版51 1号墳出土遺物（2）



## I 遺跡の立地と周辺の遺跡

### 1 遺跡の位置と立地

西吉田北遺跡は岡山県津市西吉田672-3番地他に所在する。県道西吉田川崎線を国分寺から東方向に進むと吉井川の支流である広戸川をわたる。わたるとすぐ北側に位置する丘陵が西吉田北遺跡の位置する丘陵である。この丘陵の南半は現在、住宅団地となっているが、団地造成に先立ち発掘調査された西吉田遺跡の所在地である。

遺跡はこの団地の北側、丘陵からみると北半部分に位置する。この北半部分も細かく見ると尾根が樹状に入り込んだ複雑な地形を呈している。すなわち、C地区は最高所から北に派生した尾根、B地区は西方向へし字型に派生した尾根上、A地区はその先端部にあたる。それぞれの尾根の間の谷間には、谷頭部に溜め池が作られ水田が営まれている。丘陵の北側と西側は広戸川が蛇行して流れている。

平野部との比高差はA地区で約10m、B地区で約30m、C地区で約40mを測る。



第1図 西吉田北遺跡調査区位置図

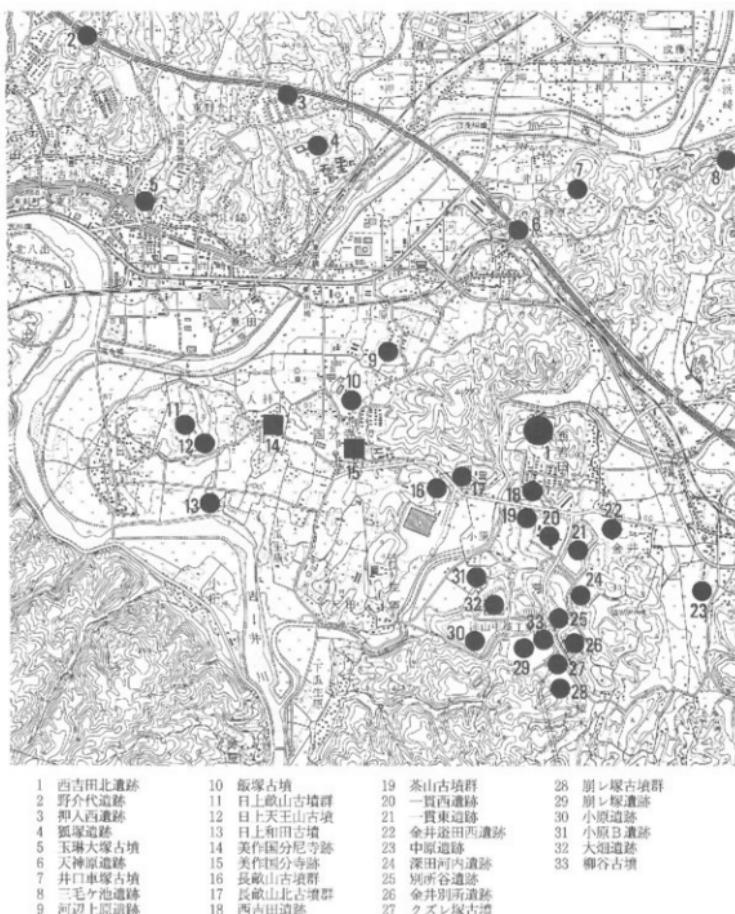
## 2 周辺の主要遺跡

この地域は津山市の中でも比較的遺跡の密集する地域である。時期は弥生時代から古代にわたる（第2図）。

以下、各時代ごとに概観することにする。

### 弥生時代

弥生時代の遺跡は大きく中期と後期に分けられる。中期から後期にかけて継続して営まれている遺跡は、この地域に限定してみる限り少ないようである。中期に属する遺跡には野介代遺跡、押入西遺跡、



第2図 周辺主要遺跡分布図 (S = 1 : 30,000)

西古田遺跡、一貫西遺跡、深田河内遺跡、別所谷遺跡、金井別所遺跡、崩レ塚遺跡である。また、後期に属する遺跡には大神原遺跡、河辺上原遺跡、一貫東遺跡、小原遺跡、大畠遺跡、小原B遺跡をあげることができる。しかし、中期と後期に2分したこれらの遺跡も細かく見ると、決して同一時期のものではなく時期差がある。

まず中期からみると、中期はさらに前葉、中葉、後葉の3時期に分けることができる。前葉に属する遺跡は認められない。このことはこの地域に限った現象ではなく、津山市全域を視野に入れた場合でもこの時期に属する遺跡は極めて少ない。中葉に属する遺跡には西古田遺跡、崩レ塚遺跡があるが、これも決して多いという状況ではない。後葉になると西古田遺跡をはじめ、野介代遺跡、押入西遺跡、一貫西遺跡、深田河内遺跡、別所谷遺跡、金井別所遺跡というように遺跡が急増する。

後期を前半と後半の2時期に大別した場合の前半に属するものは、河辺上原遺跡、一貫東遺跡、小原遺跡、大畠遺跡、小原B遺跡である。後半に属するものは天神原遺跡、一貫東遺跡で前者に比べて少ない。

以上のように、細かく見るとそれぞれに時期差があり、中期後期に分類してもそれらの遺跡が等しく同一時期を共有していたという状況ではない。

他に中期と後期の墳墓遺跡である二毛ヶ池遺跡がある。

#### 古墳時代

多くの古墳および古墳群があるが、代表的なものをあげると玉琳大塚古墳、井口車塚古墳、飯塚古墳、歟山古墳群、日上・天王山古墳、口上和田古墳、長歟山北古墳群、茶山古墳群、クズレ塚古墳、崩レ塚古墳群、柳谷古墳などがある。これらを横穴式石室の有無で分けた場合、圧倒的に横穴式石室導入以前のものが多く、以後のものはクズレ塚古墳、柳谷古墳の2例にすぎない。そして、横穴式石室墳は点在し、群を構成するようなことはない。一方、横穴式石室導入前の古墳は歟山古墳群、長歟山北古墳群などのように比較的まとまって、群を構成するものもある。これら横穴式石室導入前の古墳の埋葬主体部は箱式石棺、竪穴式石室、組合式石棺、木棺直葬など非常にバラエティーに富んでいる。

古墳以外に製鉄遺跡である狐塚遺跡がある。

#### 古代

代表的なものには美作国分寺跡、同國分尼寺跡がある。国分寺跡については伽藍などの構造や規模が明らかになっているが、国分尼寺跡については不明である。

この他に、8世紀段階に属する製鉄関連の集落遺跡である一貫西遺跡がある。

## II 調査の経過

### 1 調査に至る経過

平成6年10月12日、事業主体者である（株）ウエスコ代表取締役社長加納淳基から岡山県津山市西古田672-3番地外60筆、面積97,680m<sup>2</sup>の開発に伴う埋蔵文化財の取り扱いついて、津山市教育委員会に協議がなされた。

教育委員会としては、開発予定地は周知の遺跡ではないが、弥生時代中期の集落遺跡である西古田遺跡に隣接することから、事前に確認調査を実施するようお願いした。その結果、埋蔵文化財の保護についてご理解いただき、確認調査を実施することで合意に達した。

これを受けて、平成7年5月25日、事業主体者と津山市教育委員会教育長藤原修己との間で「開発事業に伴う埋蔵文化財確認調査に関する覚書」を締結し、早速、6月1日から着手した。着手の初日から遺構の存在が確認された。確認調査の方法はバックホーを借り上げ、幅2mのトレーニングを尾根に直交するように5~6m間隔で設定した。

この結果、遺跡はかなり広範囲にわたることが判明し、西古田北遺跡と命名した。このため、事業主体者である（株）ウエスコから文化財保護法第57条の5第1項の規定による「遺跡発見届」が6月12日付けで津山市教育委員会に提出された。これを受け、津山市教育委員会は平成7年6月30日付け、津教委文第34号で岡山県教育委員会に進達すると同時に、同日付け、津教委文第35号で文化財保護法第98条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査通知書を併せて提出した。

そして、7月3日付けで本調査に伴う「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書」を（株）ウエスコ代表取締役社長山地弘と津山市長中尾嘉伸との間で締結し、7月7日より本調査を開始した。

なお、調査事務所用プレハブ、及び電気、電話については（株）ウエスコ、（株）大木組のご厚意に甘えさせていただいた。記して厚くお礼申し上げる次第である。

### 2 調査の経過

確認調査は前述のように6月1日からバックホー1台で開始したが、遺跡の範囲がかなり広範囲にわたりることから、6月8日からは遺構の検出されたトレーニングを中心に、もう1台を導入し表土剥ぎ作業と並行して行った。トレーニングによる確認調査自体は6月21日に終了したが、そのバックホーは引き続き表土剥ぎ作業に移り、2台で作業を進めた。その結果、6月28日に全体の表土剥ぎ作業が終了した。面積は約10,450m<sup>2</sup>である。

この間、A地区と命名した調査箇所は工事の工程上、最も急ぐ箇所だったので、6月12日から6月20日まで確認調査及び表土剥ぎ作業と並行して本調査を実施した。

6月28・29日の両日でテント、発掘調査器材を搬入し、7月7日から本調査に着手した。

本調査も工事の工程上、C地区の1号墳の調査から開始した。7月10日には鉄鉗、鉄錘、須恵器等の遺物が出土。写真撮影、尖端を以て、7月13日、C地区の調査を終了した。

B地区的調査は7月13日から開始した。B地区も工事工程に従ってSH2、SB4、SB7、SH11、SH12等、調査区の北辺部から着手した。その後は南へ移動し、SH24、SB10、SH22の順に南から

北に調査を進めた。さらに、SH14、SH13からは丘陵の南半部を西方向に作業を継続し、10月18日、すべての発掘作業を終了した。

10月19日及び20日の午前中にかけて、調査区全体の清掃を行った。午後からラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、すべての調査を終了した。

この間の8月11日には、津山市教育委員会生涯学習振興室の行事として「夏休み親子発掘体験教室」を受け入れた。参加者は親子合わせて30名で、SH17、SH22、SH23のそれぞれの住居址の発掘に汗を流した。

### 3 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は次のとおりである。

津山市教育委員会 教育長 藤原修己（～平成8年9月30日）

松尾康義（平成8年10月1日～）

教育次長 内田康雄（～平成8年3月31日）

中尾義明（平成8年4月1日～）

文化課長 粕山三千穂

文化財センター 所長 神田久遠

次長 中山俊紀

主査 行田裕美（調査担当）

主事 版本心平（〃）

主任 青木瞳子（事務担当）（～平成8年9月30日）

整理作業は文化財センター嘱託員野上恭子、岩木えり子、家元弘子、臨時職員河木雅子（～平成8年3月31日）が担当した。

発掘作業は社団法人津山市シルバー人材センターにお願いした。作業従事者の方々には猛暑の中、大変なご苦労をおかけした。記して厚くお礼申し上げたい。

福垣光男 福垣裕史 姶尾嘉明 神崎昌徳 木沢賢次 谷口末男 藤沢淳一郎 森二三男 山下加海

また、青木瞳子、河木雅子の二人をはじめ嘱託員の方々にも発掘及び測量の補助で多人の協力を得た。調査が順調に進んだのもこの方々の協力があったからこそである。併せてお礼申し上げたい。

尚、発掘調査及び報告書の作成にあたり、下記の方々から指導・助言を得た。厚くお礼申し上げる次第である。

尾上元規 田中清美 金田善敬 龜田修一 女屋和志雄 矢島宏雄 浅野晴樹 近藤義郎 河木 清  
福田正繼 清水貞一 木下 巨 池崎謙二 高橋 義 離波紀了（順不同）

### III 調査の記録

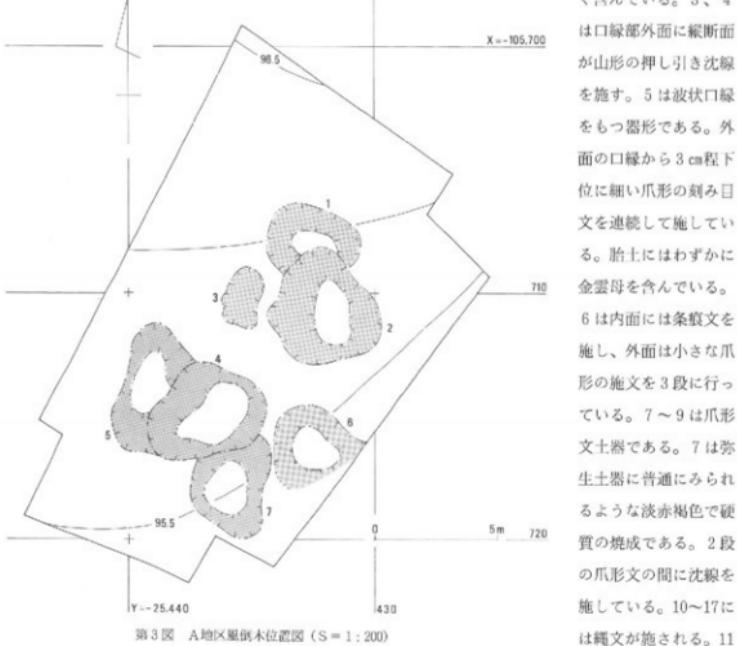
#### 1 A地区の調査

A地区は、丘陵末端付近の台地状になった部分に位置する。台地上には約20m×30m程の平坦部があり、東側は緩い谷状の地形、西側は急な斜面となって広戸川の河原に落ち込んでいる。調査面積は約250坪である。

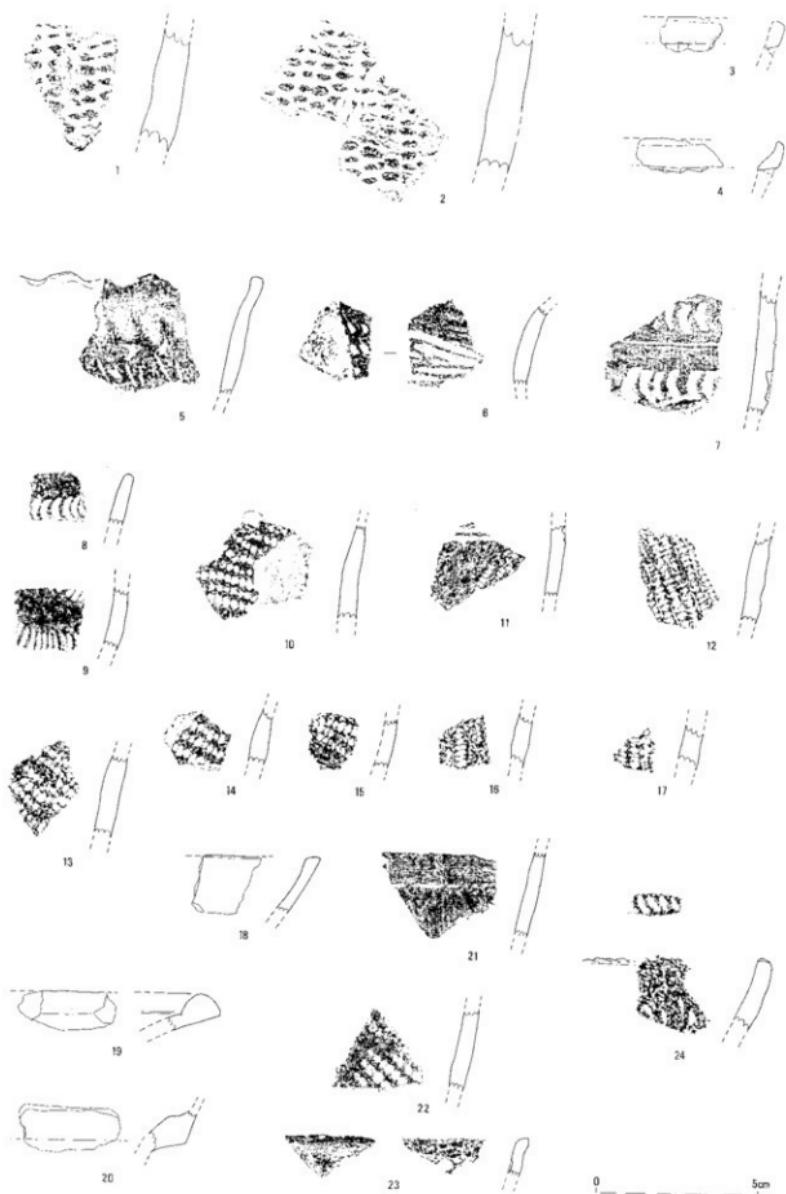
##### (1) 繩文時代

A地区からは、縄文土器片約100点が出土した。いずれも風倒木からの出土であり、遺構に伴うものはない。第3図に風倒木の位置を示し、以下第4図に図示した遺物の出土位置を述べる。風倒木1からは6、23、風倒木2からは3～5、7、8、10～12、14～16、22、風倒木3からは13、17、風倒木4からは1、24、風倒木5からは2、9、18～21が出土した。この他に1～6の風倒木から数片から20片ほどの繩文土器片及びサヌカイトチップ若干が出土している。縄文時代以外の土器は混じらないようである。縄文土器は、早期、前期のものと晩期のものが認められるが、いずれも小片で器形の全容が分かることはない。

1、2は押型文土器である。器壁は厚く、外面に梢円文を施す。胎土は粗く、3mm～5mmの砂粒を多く含んでいる。3、4は口縁部外面に縱断面が山形の押し引き沈線を施す。5は波状口縁をもつ器形である。外面の口縁から3cm程下位に細い爪形の刻み目文を連続して施している。胎土にはわずかに金雲母を含んでいる。



第3図 A地区風倒木位置図 (S = 1 : 200)



第4図 A地区出土縄文土器 (S = 2 : 3)

には破片上部に2条の沈線が施される。18~21は晩期の精製土器である。19、20は同一個体とみられるもので、杯部上端から「く」の字形に屈曲し、外反する口縁部に至る浅鉢形の器形と考えられる。22~24については所属時期が明らかでない。22は外面に斜繩文、23は外面に棒状の工具による刺突文を施す。24は口縁部で、端面に爪形の施文を連続して行っている。

なお、縄文土器の詳細についてはIV 1で述べる。

## (2) 弥生時代以降

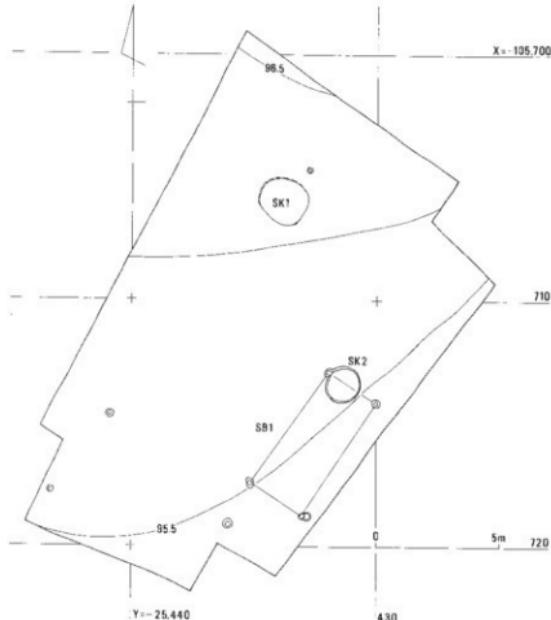
弥生時代以降のものと考えられる遺構は建物址1、土塙2が検出された（第5図）。

### 建物址 1 (第6図)

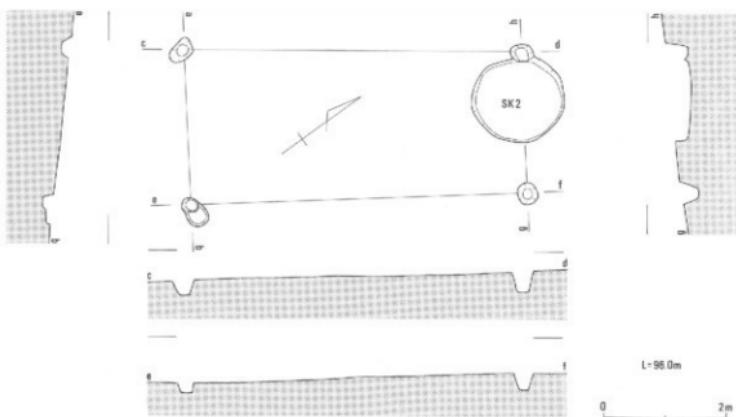
平坦面上のやや南西斜面寄りに位置する、 $1 \times 1$ 間の建物である。桁行は尾根筋に平行する方向（北東—南西）でプランはかなり細長く、桁行全長5.5m、梁間全長2.6mを測る。遺物は出土していない。

### 土壤 1 (第 7 図)

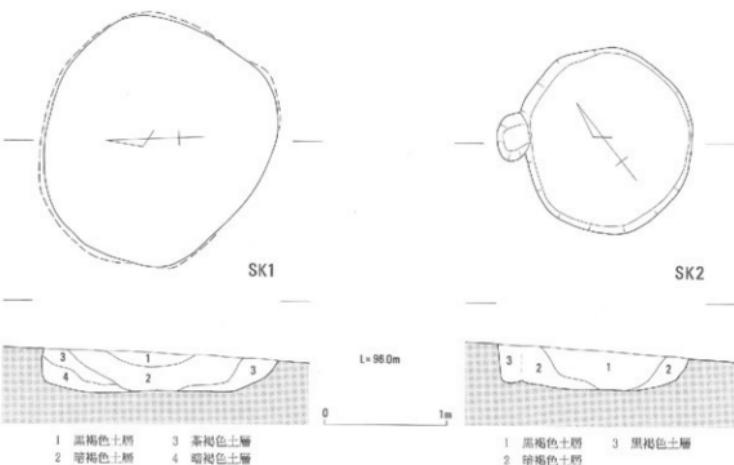
平坦面上の上部中央に位置する円形プランの土壤である。上部がかなり削除されているが、袋状貯蔵穴と考えられるものである。最大径は底面で2.1m、検出面からの深さは現状で0.3mを測る。底面は平坦で、壁面はわずかに袋状となる。弥生土器片1数点、サヌカイト剥片1点が出土したが、詳細な時期については明らかでない。



第5図 A地区遺構配置図 ( $S = 1:200$ )



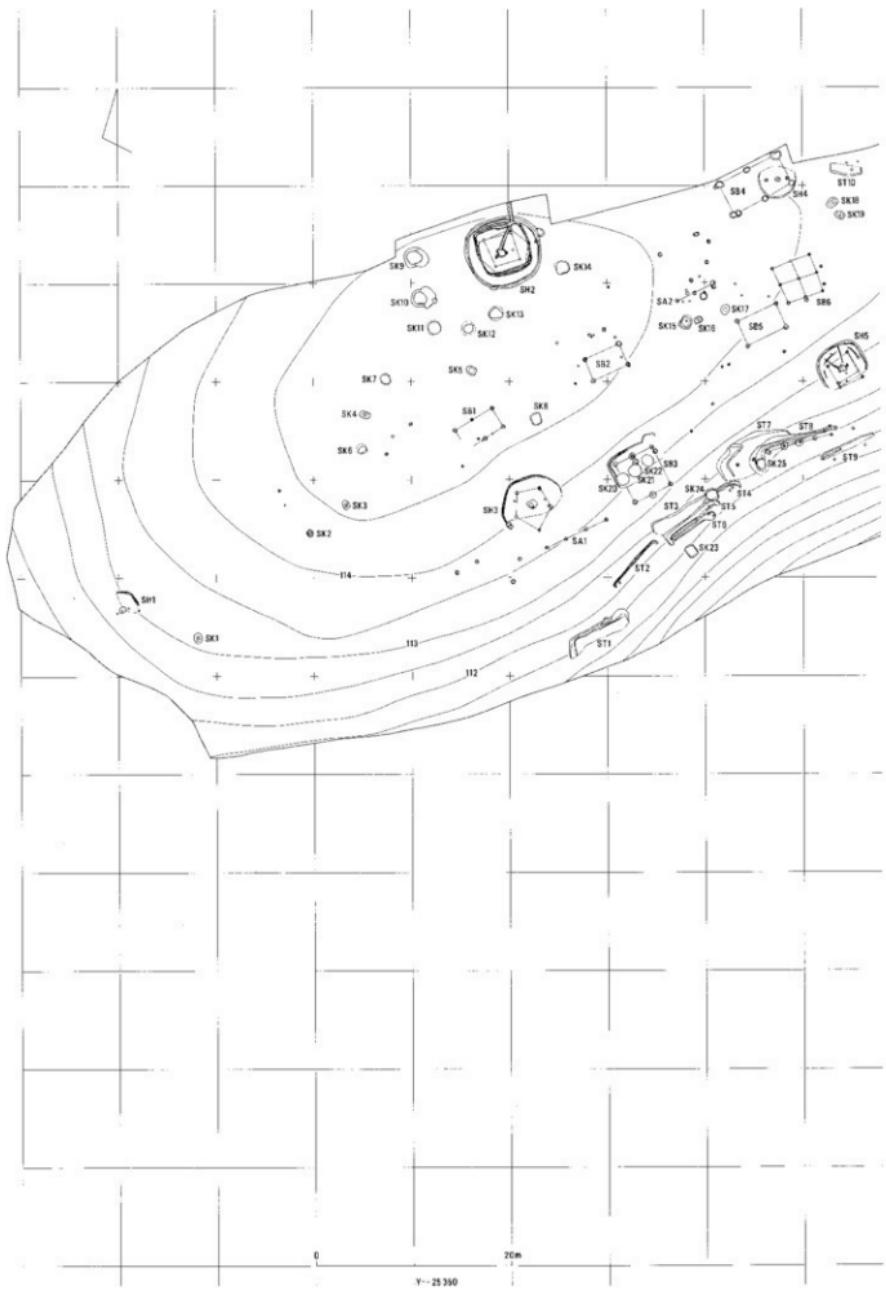
第6図 建物址1平・断面図 ( $S = 1:80$ )

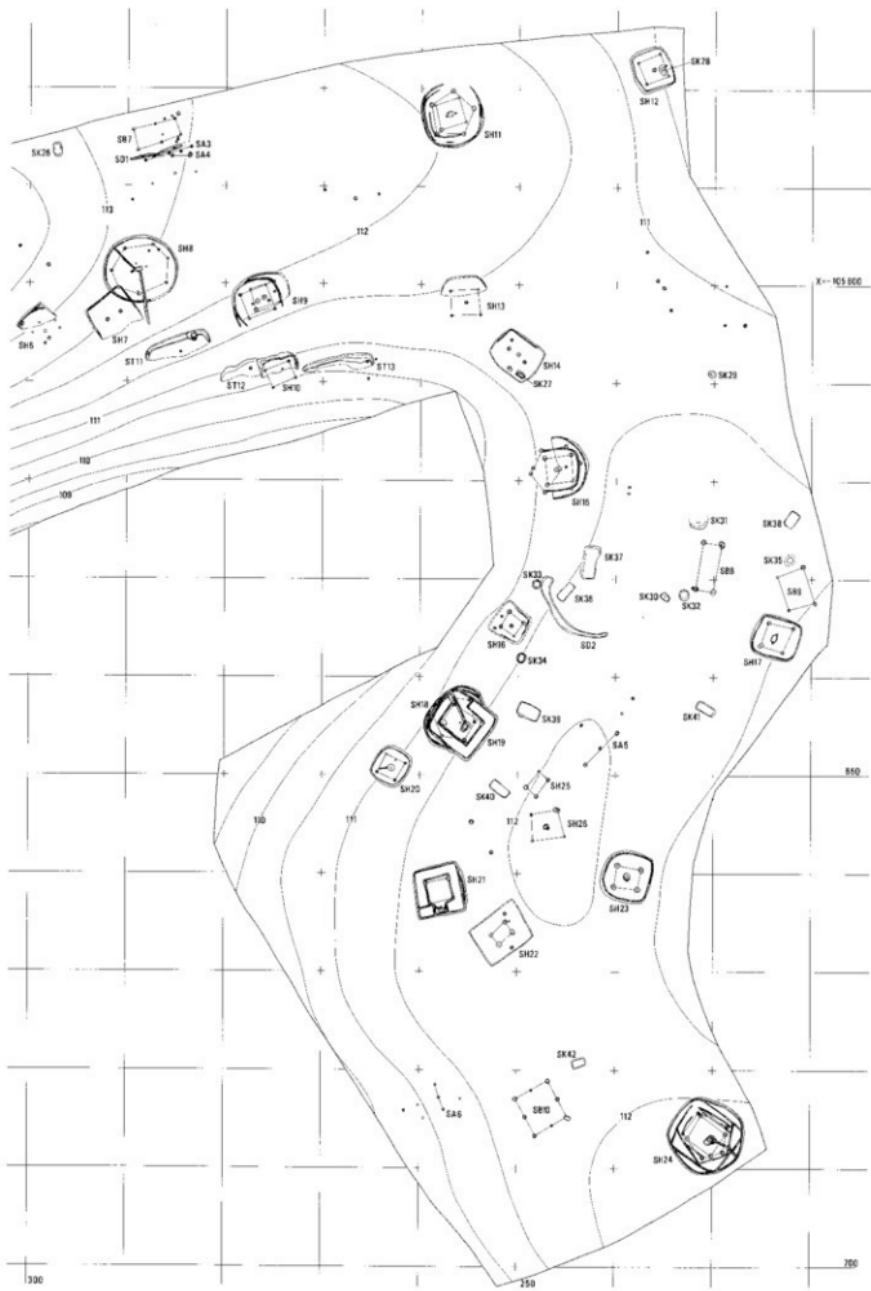


第7図 土壌1、2平・断面図 ( $S = 1:40$ )

#### 土壤2（第7図）

平坦面上のやや南西斜面寄りに位置する円形プランの土壤である。現状では袋状とはならないが、土壤1と同様のものと考えられる。一部が建物址1の柱穴と重複するが、新旧関係は明らかでない。最大径は検出面で1.5m、検出面からの深さは現状で0.3mを測る。弥生土器片数点が出土したが、詳細な時期については明らかでない。



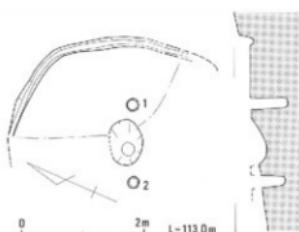


第8図 B地区遺構配置図 ( $S = 1:500$ )

## 2 B地区の調査

B地区は、南側の尾根から派生し、南から北、そして西へ「L」字形に屈曲しながら延びる丘陵上に位置する。丘陵上には南東部、北西部の2カ所に高所があり、屈曲部附近が鞍部になっている。南東側高所と鞍部の標高差は約1m、鞍部と北西側高所との標高差は約4mで、丘陵上は平坦で広い。東側、南西側は緩い谷状の地形、北側は急斜面となって広戸川に落ち込んでいる。調査面積は約9,900m<sup>2</sup>である。

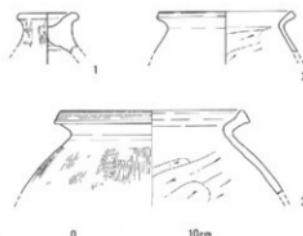
### (1) 住居址



第9図 住居址1 平・断面図 ( $S = 1:80$ )

#### 住居址1 (第9図)

調査区の西端付近、丘陵頂部からやや南西に下がった斜面に位置する。斜面下方部分の住居西半部は床面、壁溝とも残存しない。頂部との標高差は約2mである。床面で径4m程の円形プランと考えられる、2本柱の住居である。床面中央に径76cm×52cm、深さが26cmの楕円形の中央穴があり、その長軸方向の両側に柱穴を配する。遺物は、弥生土器片若干量が出土した。



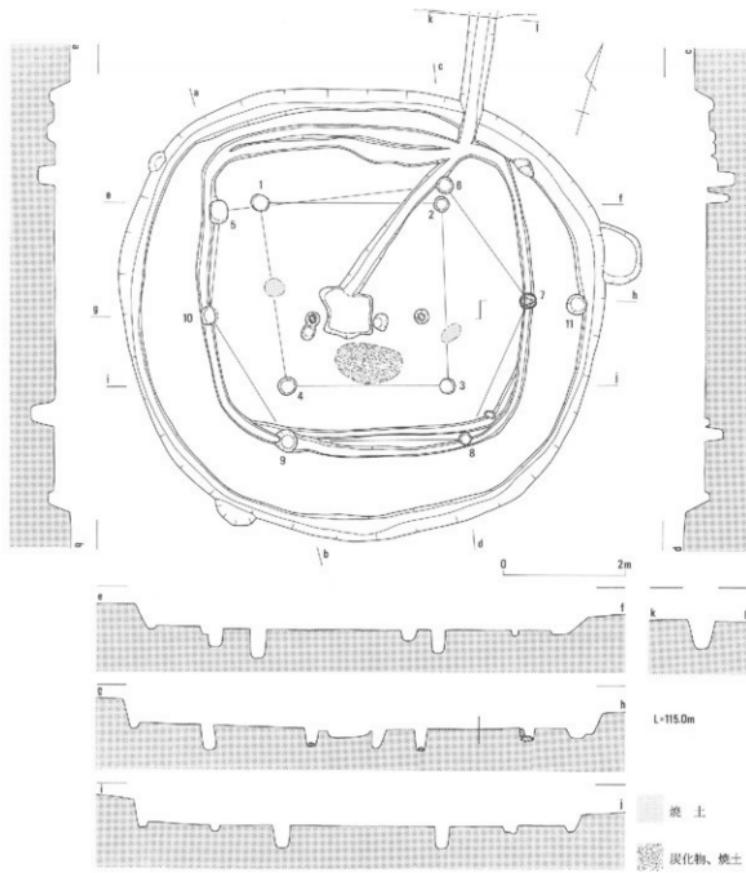
第10図 住居址1 出出土器 ( $S = 1:4$ )

#### 住居址1 出出土器 (第10図)

1は蓋形土器と考えられる。つまみは上面を窪め、外側には部分的にハケ調整を施す。内面は成形後、未調整のままのようである。2は甕形土器、3は甕形土器または壺形土器である。いずれも頭部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。2は口縁端部をわずかに上方につまみ上げ、端面は凹面となる。2は口縁端部を上下両方にやや拡張し、端面には3条の凹線をめぐらせる。外側調整は、2は遺存状態が悪く不明であるが、3は頭部に縦方向のハケ調整を施す。2、3とも内面は頭部までヘラケズリで仕上げる。

### 住居址2 (第11図)

調査区北西部の最高所からやや北よりの平坦部に位置する。2度の拡張が行われており、3時期が認められる。最初の住居は床面で東西5.5m、南北4.8mの隅丸方形プラン4本柱の住居である。柱穴は1~4の4本である。1回目の拡張は、最初の住居の北壁及び南壁を外方に掘げることによって行われている。この結果、東西の規模は変わらず、南北で5.4mの隅丸方形住居になる。柱穴は最初の住居と共に4本柱である。2回目の拡張は2時期目の住居の北側で約50cm、他の三方は100~120cm程外方に壁を新設することによって行われている。3時期目の住居は南北7.4m、東西7.9mのほぼ円形プランで、柱穴は5~10の6本柱である。柱穴のうち、7では底面に偏平な石を敷き、さらに壁面も三方を石で囲って柱を支える構造になっている。中央穴は3時期とも共有すると考えられ、約85cm四方、深さ約10cmの不整な方形である。中央穴をはさんで東西両側に小ピットが配される。小ピットは片側に2個ずつ、計

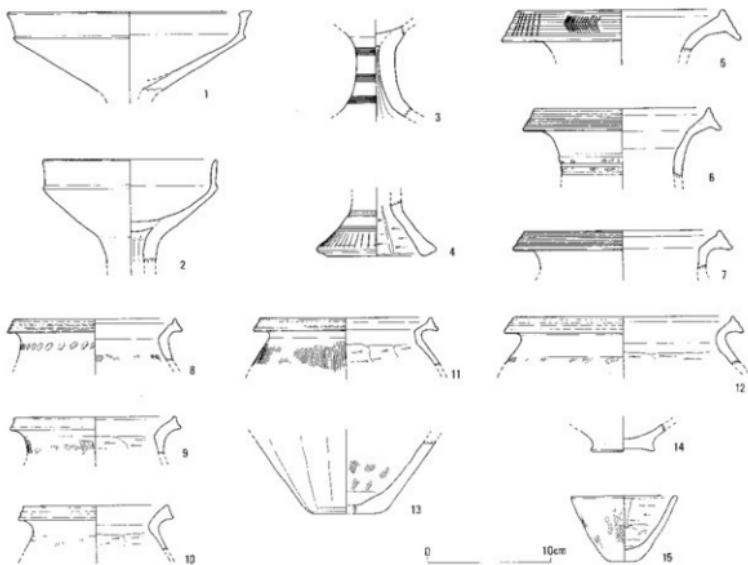


第11図 住居址2 平・断面図 (S=1:80)

4個が存在し、うち両側の各1つは拳大の石が詰められていた。両側1個ずつの2セットが時期をずらして使用されたと思われる。小ピットの外方には、中央穴を挟んで東西両側に赤化した焼土面が認められる。また、中央穴南側には $110\text{cm} \times 65\text{cm}$ 程の範囲で炭化物、焼土の集中がみられる。中央穴から北東外方へ床溝がはしり、最初の住居の壁溝のところで北へ向きを変えて住居外方へ延びている。遺物は、弥生土器片がコンテナ約半箱分、偏平片刃石斧1点(第122図2)、サヌカイト剥片1点が出土した。

#### 住居址2 出土土器 (第12図)

1、2は高杯形土器杯部である。いずれも斜め上方に延びた杯部から屈曲して口縁部が作り出されている。屈曲部外側はやや突出して棱となる。1はやや外方に開いて立ち上がる口縁部をもち、端部両側



第12図 住居址2出土土器 (S=1:4)

を水平方向にやや拡張している。2のII線部は垂直に立ち上がり、端部は丸くおさめる。3、4は脚部である。4の脚端部はやや肥厚し、端面はわずかに凹面となる。いずれも外面は数段の櫛描文で加飾され、4の脚幅部には縦方向の櫛描文が施される。

5～7は壺形土器である。5、6は、斜め上方に開く口縁部をもち、端部は上下に強く拡張する。7は頸部から屈曲して斜め上方に開くII線部をもち、端部は上下に拡張する。端面にはいずれも数条の凹線をめぐらせ、5はその上からハケメ原体によると思われる、数本一組・直線状と十数本一組・「く」の字状の文様を交互に施している。6は頸部にハケ調整の上から凹線文をめぐらせる。

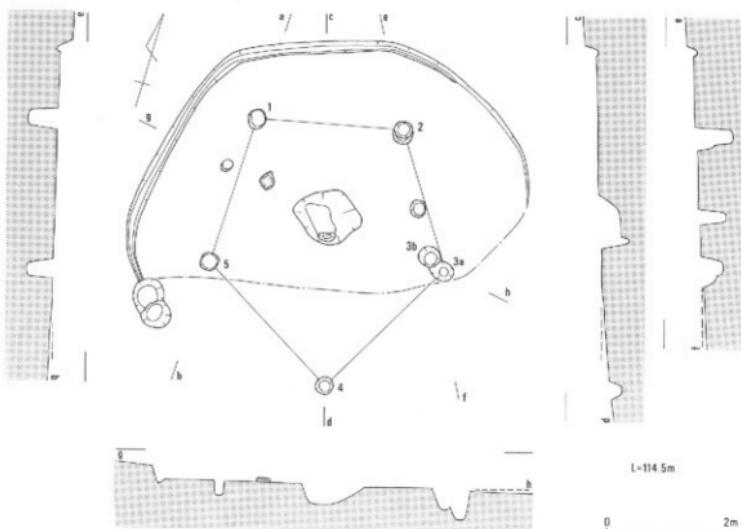
8～12は壺形土器である。いずれも頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。11は特に鋭く外反する。いずれも端部は上下に拡張または肥厚し、端面は凹面となるか(9)、2～3条の凹線をめぐらせる。外面調整は観察可能なものはすべてハケ調整である。8は頸部外面に米粒形の刺突文をめぐらせる。内面調整は、8がハケ調整であるほかは、いずれも頸部までヘラケズリで仕上げる。

13、14は底部である。基本的には外面を縦方向のヘラミガキで仕上げ、下端を横にナデ消すようである。内面は13は一部にハケ調整を施し、14はナデによって仕上げているようである。

15はミニチュア土器である。やや深いおちょこ形を呈する。外面はハケ調整が一部にみられ、内面は下半部は成形後未調整、上半部はヘラケズリで仕上げる。

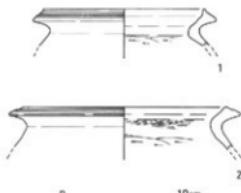
#### 住居址3 (第13図)

調査区の西部、丘陵頂部からやや南側に下がった斜面寄りに位置する。頂部との標高差は約1mである。斜面下方部分の住居南半部は床面、壁溝とも残存しない。床面で径6.5m前後の円形プランと考え



第13図 住居址3平・断面図 (S = 1:80)

られる、5本柱の住居である。柱穴は1～5の5本であるが、3についてはほぼ同じ位置に重複して2つのピットが検出された。いずれかが柱の建て替えに伴うもの可能性も考えられるが、床面とその周囲からは所属不明の小ピットが複数検出されており、明らかではない。床面中央に径約90cm×120cm、深さ36cmの不整形の中央穴がある。中央穴の底部南端は28cm×13cm、底面から13cmの梢円形に掘り窪められている。遺物は、弥生土器片が小型のボリ袋1袋分、また中央穴西側床面から20cm大程の偏平な石が出士した。



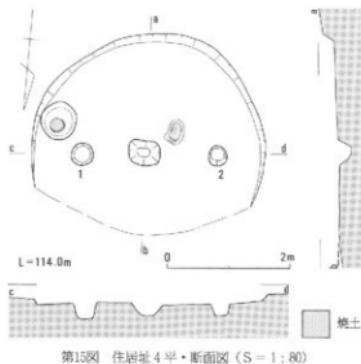
第14図 住居址3出土土器 (S = 1:4)

#### 住居址3出土土器（第14図）

1は壺形土器、3は壺形土器または壺形土器である。いずれも頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。1は口縁端部を上下両方に拡張し、端面には3条の凹線をめぐらせる。2は口縁端部を上方にやや拡張し、下部は外方へ拡張する。端面には2条の凹線をめぐらせる。外面調整は残存部分では1、2ともナデ、内面調整は頸部までヘラケズリで仕上げる。2は頸部上部内面にハケ調整を残す。

#### 住居址4（第15図）

調査区北側中央部、頂部からやや東へ下った北側斜面寄りに位置し、建物址4と一部が重複している。斜面下方部分の住居址北部は床面が一部失われている。床面で径3.8mを測る、円形プラン、2本柱の住居である。壁溝は検出されなかった。柱穴の中心間の距離は2.2mで、そのほぼ中间に径52cm×42cm、深

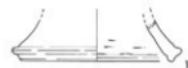


第15図 住居址4 平・断面図 (S=1:80)

さ22cmの楕円形の中央穴がある。中央穴の南西側には焼土が認められる。焼土は中央部30cm×15cmが黄褐色、その外方40cm×30cmの範囲が赤褐色を呈する。遺物は、弥生土器若干量、石鏃1点(第122図10)が出土した。

#### 住居址4 出出土器 (第16図)

1は脚部である。脚端部は上下両方にやや拡張し、端面には1条の凹線をめぐらせる。外面調整は不明であるが、内面はヘラケズリによって仕上げる。2は壺形土器である。頸部から「く」の字形に鋭く外反する口縁部をもつ。口縁端部を上下両方にやや拡張し、端面には2条の凹線をめぐらせる。外面調整は不明であるが、内面はナデによって仕上げている。

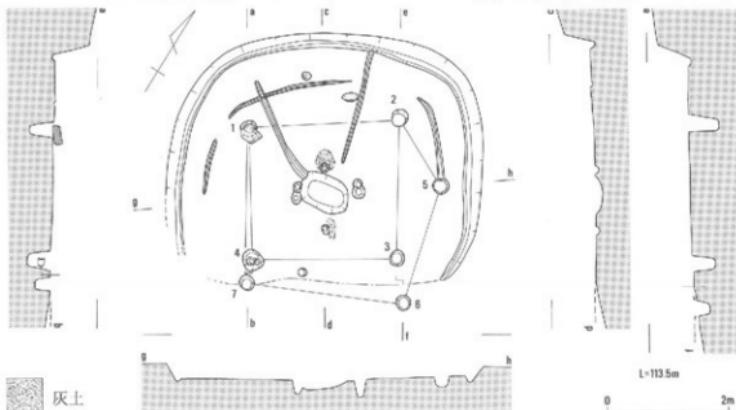


#### 住居址5 (第17図)



第16図 住居址4 出出土器 (S=1:4)

調査区北半中央部、頂部からやや東へ下った南側斜面寄りに位置する。斜面下方部分の住居南部は床面が一部失われている。拡張が行われており、2時期が認められる。最初の住居は北東-南西方向で4mの隅丸方形プラン、4本柱の住居に復元される。柱穴は1~4の4本である。拡張時のものは床面北東-南西方向で4.8mの隅丸方形、5本柱の住居に復元される。柱穴は1、2、5~7の5本である。ただ柱穴5は深さが17cmしかなく、他の柱穴よりかなり浅い。北西側2本の柱穴及び中央穴は、最初の住居と共有している。中央穴は径85cm×55cm、深さ10cmの楕円形で、北西側、南東側に1つずつ、北東側、南西側に2つずつの小ピットがそれぞれ中央穴を挟む形で検出された。また、



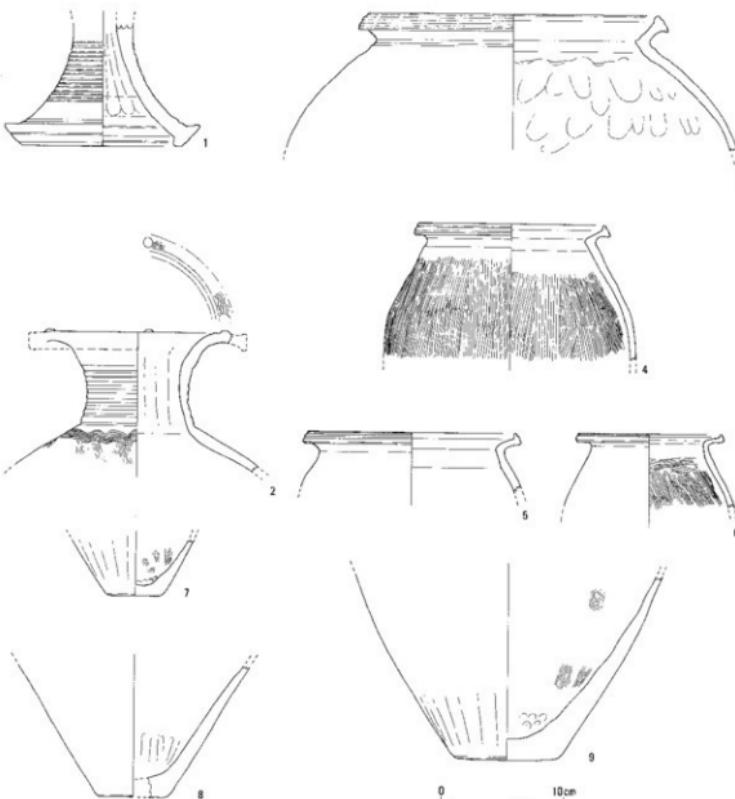
第17図 住居址5 平・断面図 (S=1:80)

北西側、南東側の小ビットと重なる位置には灰土が分布する。床面北側には中央穴から放射状に2本、床溝が検出されている。遺物は、弥生上器片がコンテナ1箱分出土した。第18図1は柱穴1から、2は柱穴4から出土している。また、床面上、柱穴1に重なる状況で30cm四方、厚さ10cm程の石が、北側の床溝沿いからも30cm×15cm程の石が出土した。

#### 住居址5出土土器（第18図）

1は高杯形土器脚部である。脚端部は上下に拡張し、端面には2条の凹線をめぐらせる。外面はナデの上から中央部、脚裾部に凹線文をめぐらせる。内面は上部に絞り痕を残し、下部はナデによって仕上げる。

2は壺形土器である。筒状の頸部から緩やかに外反する口縁部をもつ。口縁部上面では、櫛描波状文を施した上に円形浮文を加える。頸部には数条の凹線をめぐらせ、胴部上部外面はハケ調整の上にナデ



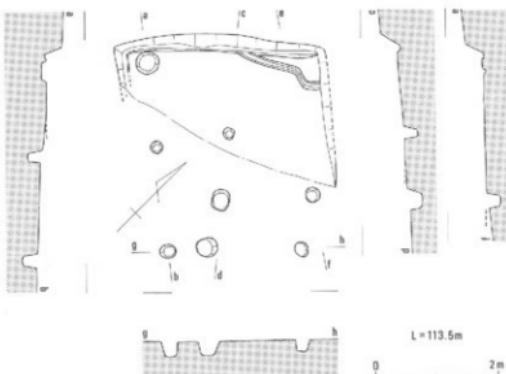
第18図 住居址5出土土器（S=1:4）

を加え、櫛描波状文をめぐらせている。内面調整はナデである。

3は壺形土器または甕形土器である。頭部から「く」の字形に鋭く外反する口縁部をもち、端部は上下に拡張する。端面には3条の凹線をめぐらせる。外面調整は不明であるが、内面には指頭圧痕が残る。

4～6は甕形土器である。いずれも頭部から「く」の字形に鋭く外反する口縁部をもつ。いずれも端部は上方に拡張し、端面には1～2条の凹線をめぐらせる。外面調整、内面調整とも、観察可能なものはすべてハケ調整である。4は、口縁部下面、胴部外面にススの付着がみられる。

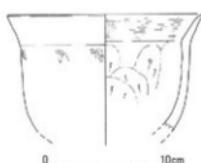
7～9は底部である。7、9は外面を縱方向のヘラミガキで仕上げる。内面は一部にハケ調整がみられるが、いずれも成形後、おおむねナデによって仕上げているようである。7、9は内面にスス状の付着物がみられ、7では指頭圧痕の窪みにおこげ状にたまっている。



第19図 住居址6 平・断面図 (S=1:80)

#### 住居址6 (第19図)

調査区の北半中央部の南側斜面寄りに位置する。斜面下方部分の住居南半部は床面、壁溝が失われている。住居は、床面北西辺で3.2mを測り、方形プランに復元される。床面からは複数のビットが検出されたが、柱穴の構成を明らかにすることはできなかった。住居北半の北西辺、南西辺では壁溝が検出され、北角付近には床溝がみられる。遺物は、須恵器片、土師器片若干量が



第20図 住居址6 出出土器 (S=1:4)

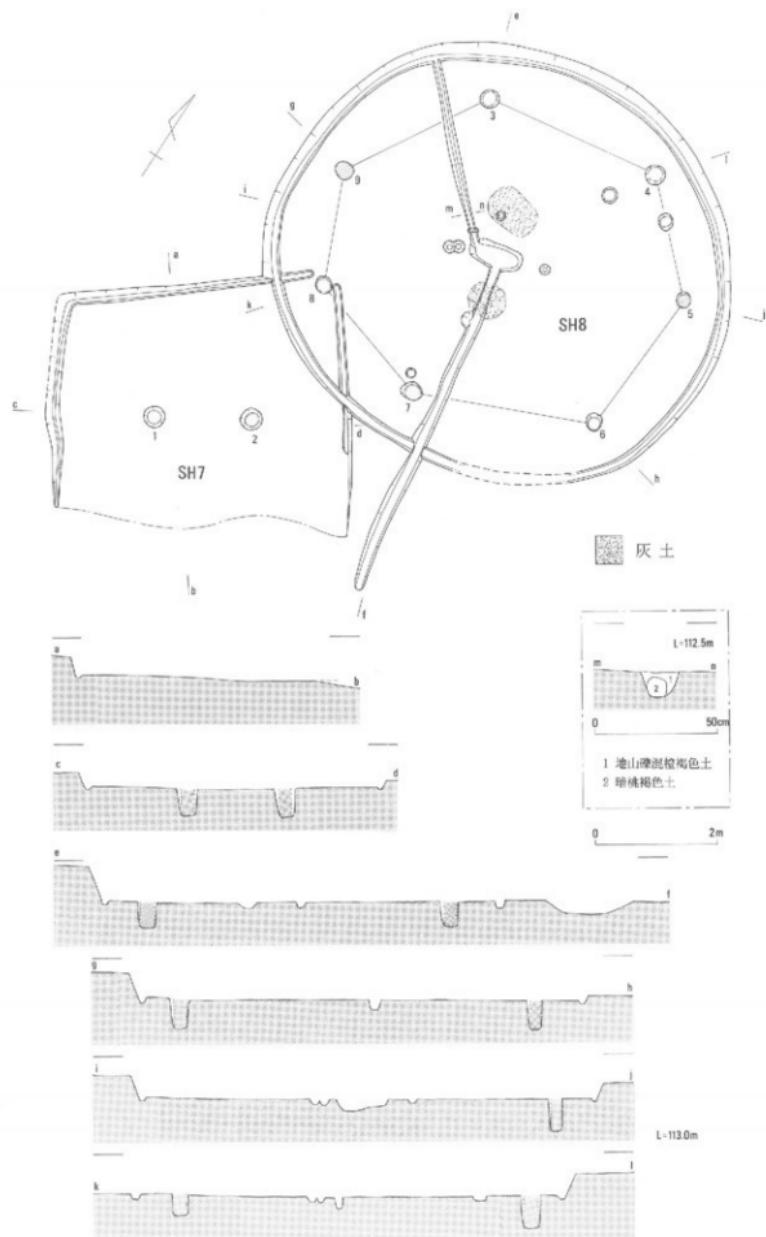
出土した。

#### 住居址6 出出土器 (第20図)

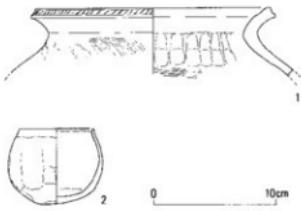
土師器甕である。張りのない胴部から屈曲して直線的に斜め上方に開く口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめる。外面調整は明らかでないが、一部にハケ調整が残る。内面は胴部はヘラケズリ、口縁部は横方向のハケ調整である。胴部外面には一部にススの付着がみられる。

#### 住居址7 (第21図)

調査区の北半中央部の南側斜面寄りに位置する。住居址8と一部が重複している。斜面下方部分の住居南半部では床面、壁溝が失われている。住居は、床面北西辺で4.5mを測り、方形プランに復元される。2本柱で、中央穴は検出されなかった。壁面が残存する3辺からは壁溝が検出されている。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋1袋分出土した。



第21図 住居址7、8平・断面図 ( $S = 1:80$ )



第22図 住居址7出土土器 (S~1:4)

端部はやや上につまみ上げて丸くおさめる。

#### 住居址7出土土器（第22図）

1は壺形土器である。頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。口縁端部はやや肥厚し、下方にわずかに拡張する。端面は強い凹面となり、爪によると思われる刻み目文を連続してめぐらせる。胴部外面はハケ調整で、ナデを加える。内面には指による成形痕を残している。口縁部下面、胴部外面にススの付着がみられる。

2はミニチュア土器である。球形の胴部をもち、口縁

#### 住居址8（第21図）

住居址7の北東側に一部重複して位置する。住居は、床面で南北6.8m、東西7.6mの円形プランで、7本柱である。中央穴は径90cm×40cm、深さ20cmの楕円形で、ここから、北西側では壁溝まで、南側では住居外に至る床溝が延びている。北西側床溝の中央穴寄りでは、溝の両側を耳状に拡げ、ここに溝をせき止めるような状況で長さ15cm程の細長い河原石が据えられていた（図版9-2）。またm-nの断面からは、本来この溝がトンネル状の空洞構造であった可能性が考えられる。中央穴の東西方向の両側には、これを抉む形で小ビットが配される。同様の小ビットが南北方向にもみられ、うち南側の小ビットは床溝と重複している。また中央穴の南北両側には灰土の集中が認められる。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋2袋分、偏平片刀石斧1点（第122図3）、すり石1点（第123図18）、石錐1点（第123図22）、大型のサヌカイト剥片1点（第123図17）が出土した。

#### 住居址8出土土器（第23図）

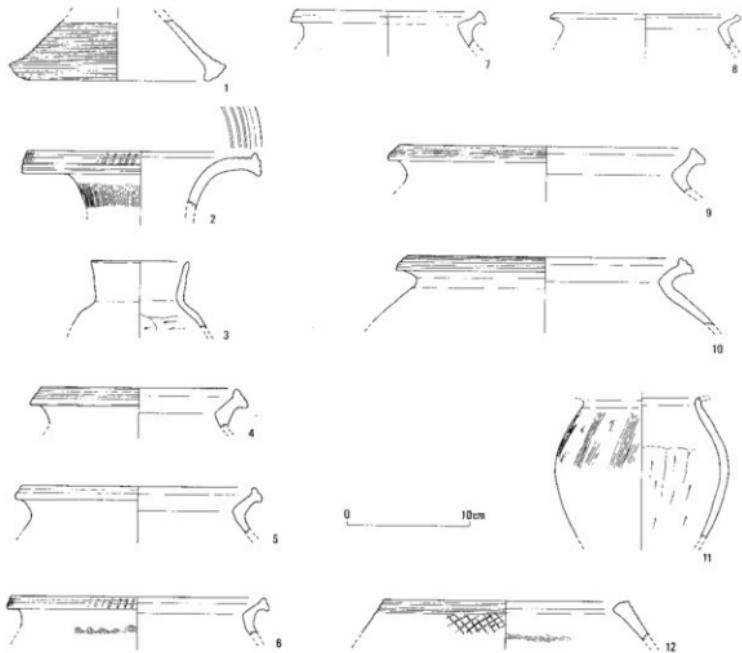
1は高杯形土器脚部である。脚端部は上下に拡張し、外面と端面には一面に凹線をめぐらせる。内面はナデによって仕上げる。

2、3は壺形土器である。2は、筒状の頸部から強く外反する口縁部をもつ。口縁部上面には3条の凹線をめぐらせ、端部は上下に拡張している。端面には3条の凹線をめぐらせ、その上から斜方向の刻み目文を連続して施す。頸部外面はハケ調整、他はナデによって仕上げる。3は直口壺である。直線的に上方に立ち上がる口縁部をもち、端部は丸くおさめる。胴部内面はヘラケズリ、それ以外はナデ仕上げである。3は住居址8としてとり上げたが、明らかに時期が下がり、混入と考えられる。

4~10は壺形土器または壺形土器の口縁部である。いずれも頸部から「く」の字形に鋭く外反し、端部は8は上方に拡張し、他は上下に拡張して端面に1~3条の凹線をめぐらせる。器面の調整はいずれも不明であるが、6は口縁部端面に刻み目文を連続して施す、頸部下側に櫛櫛波状文をめぐらせる。

11は壺形土器の胴部である。外面はハケ調整の上からナデを加えるようである。内面は、胴部最大径付近以上はナデ、それ以下はヘラケズリで仕上げる。

12は、胴部最大径から内傾して口縁部に至る器形のものと推定される。口縁部端面はやや内傾し、端部外面は3条の凹線をめぐらせ、その下に斜格子目文を施す。内面端部はナデ、その下はハケ調整である。台付無頸壺と考えられる。



第23図 住居址8出土土器 (S = 1:4)

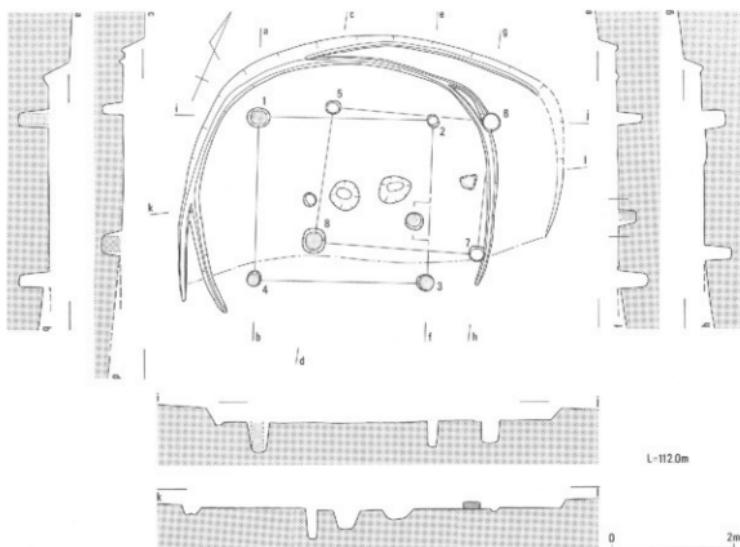
#### 住居址9（第24図）

調査区北半の東部、鞍部近くの南側斜面寄りに位置する。斜面下方部分の住居南部では床面、壁溝が失われている。拡張が行われており、大きく2時期が認められる。最初の住居は床面の北東—南西方向で径5mを測り、円形プランに近い形と考えられる。4本柱で、1～4の柱穴が対応する。中央穴は東西2つが検出されたが、西側のものが1～4の柱穴の中央にあり、これが最初の住居に対応するものと考えられる。最初の住居は、北東部で小規模な拡張が認められる。南西側にも拡張が認められるが、これが小規模なものか、次の大規模な拡張に伴うものかどうかは明らかでない。大規模な拡張は北側、東側の外方に壁面を新設することで行われている。これに伴って、柱穴、中央穴も北東側へ移動されたと考えられ、5～8の柱穴と東側中央穴がこの住居に対応すると考えられる。遺物は、弥生上器片が小型のポリ袋1袋分、打製石包丁1点（第122図6）が出土した。

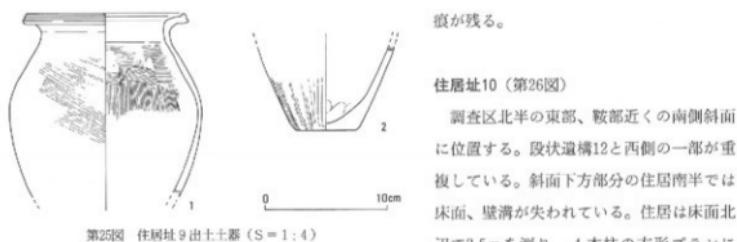
#### 住居址9出土土器（第25図）

1は壺形土器である。頸部から「く」の字形に鋭く外反する口縁部をもつ。端部は上方に拡張し、縁面には2条の凹線をめぐらせる。胴部は、外面、内面ともハケ調整である。口縁部下面、胴部外面にスヌの付着がみられる。

2は底部である。外面は縦方向のヘラミガキで仕上げる。内面調整は明らかでないが、底面に指頭圧



第24図 住居址9 平・断面図 ( $S = 1 : 80$ )



第25図 住居址9 出土土器 ( $S = 1 : 4$ )

痕が残る。

住居址10（第26図）

調査区北半の東部、敷地近くの南側斜面に位置する。段状遺構12と西侧の一部が重複している。斜面下方部分の住居南半では床面、壁溝が失われている。住居は床面北辺で3.5mを測り、4本柱の方形プランに

復元される。北辺中央部には、壁溝にかかる形で70cm×50cm程の範囲で焼上面が認められる。焼土面上からは須恵器横瓶、甕片が、その30cm程東からは土師器甕の口縁部片が出土した。

#### 住居址10出土土器（第27図）

1は須恵器横瓶である。直線的に斜め上方に立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は面をもつ。体外面は平行叩きの後カキ目、内面は同心円叩きである。

2は土師器甕である。張りの弱い胴部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。端部は丸くおさめる。胴部は、外面はハケ調整、内面はヘラケズリである。口縁部はナデによって仕上げるが、内面の一部にハケ調整が認められる。口縁部下面、下部を中心とした胴部外面にススの付着がみられる。

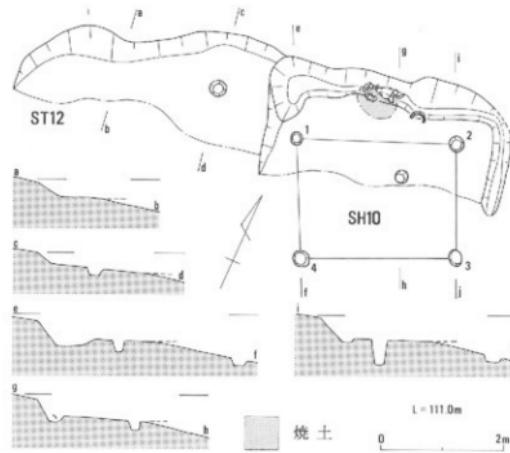
この他図示しなかったが、焼土面から須恵器甕の胴部片2個体分が出土した。1個体は内面に同心円叩きを施した生焼け状で黄灰色を呈し、もう1個体は外面平行叩き、内面同心円叩きの焼きの甘いもの

である。

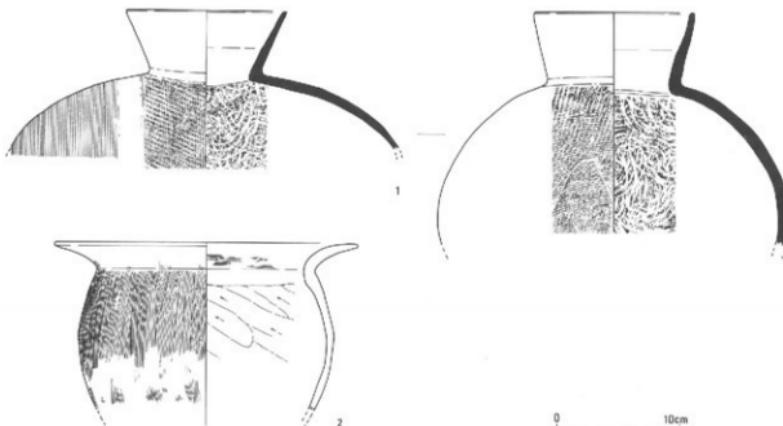
#### 住居址11（第28図）

調査区北東部、鞍部からやや北へ上がった平坦部に位置する。斜面下方部分の住居北部では床面、壁溝が一部失われている。拡張が行われており、3時期が認められる。最初の住居は壁溝が一部しか残存しないが、床面で一辺4.5m前後の隅丸方形プランと考えられる。柱穴は1～4の4本柱である。最初の拡張時のものも壁溝が一部しか残存しない。

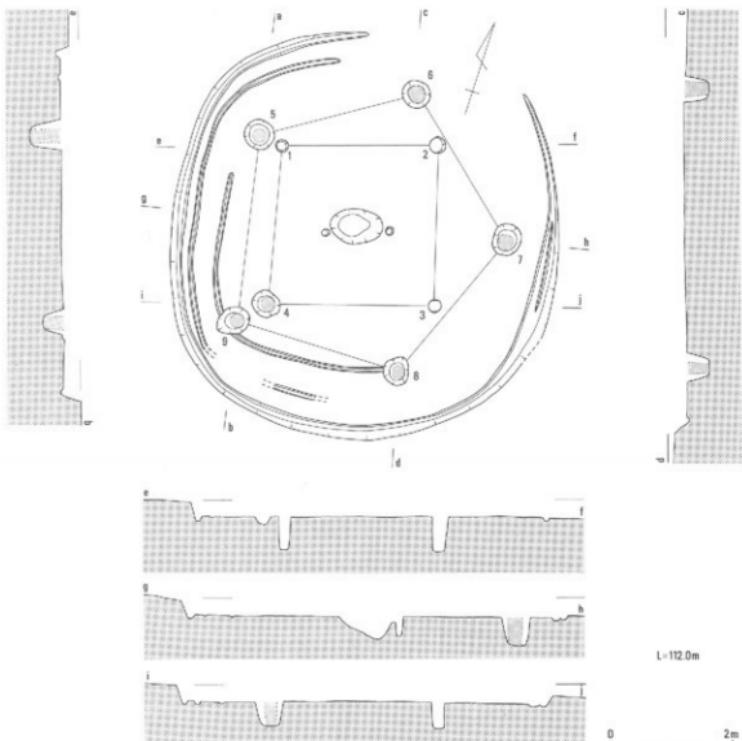
床面の南北方向で最大5.5m程度の隅丸方形に近いプランと考えられる。柱穴5～9とは壁溝が接近しそうな感があり、柱穴は最初の住居と共有していたものと考えたい。3時期目の住居は、東西6.2m、南北6.5mの円形に近いプランで、東側で小規模な拡張が行われている。柱穴は5～9の5本柱である。中央穴は径90cm×55cm、深さ37cmの楕円形で、3時期とも共有すると考えられる。中央穴をはさんではほぼ東西方向の両側には小ピットが配される。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋1袋分出土した。



第26図 住居址10、段状造構12平・断面図 (S = 1 : 80)



第27図 住居址10出土土器 (S = 1 : 4)



第28図 住居址11平・断面図 (S = 1 : 80)

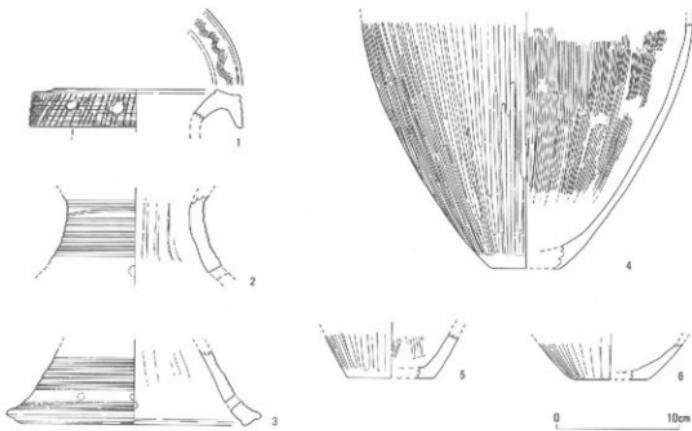
#### 住居址11出土土器（第29図）

1～3は器台形土器である。1は口縁部で、端部は下方に垂れ下がる。縁面には4条の凹線をめぐらせ、その上から斜方向の連続刻み目文、円形浮文で加飾する。口縁端部上面には櫛描波状文を施している。2は胴部である。外面は凹線文で埋め、下部の無文帯に円形透かし孔を穿っている。内面には絞り痕を残す。3は脚部である。端部は両側にやや拡張し、縁面には2条の凹線をめぐらせる。外面は凹線文で埋め、端部に近い無文帯に円形透かし孔を穿っている。内面はナデによって仕上げる。

4～6は底部である。いずれも外面を縦方向のヘラミガキで仕上げる。内面は、4、5はハケ調整で底面付近はその上からナデ、6は底面をナデで仕上げる。

#### 住居址12（第30図）

調査区北東隅、鞍部からやや北の東側斜面寄りに位置する。住居内には土壤28が重複している。住居は、床面で東西3.9m、南北4.0mの隅丸方形プランである。柱穴構成は、柱穴1～4の4本柱または柱穴5を含めた5本柱である。床面中央に径45cm×35cm、深さが7cmの浅い椭円形の中火穴があり、その

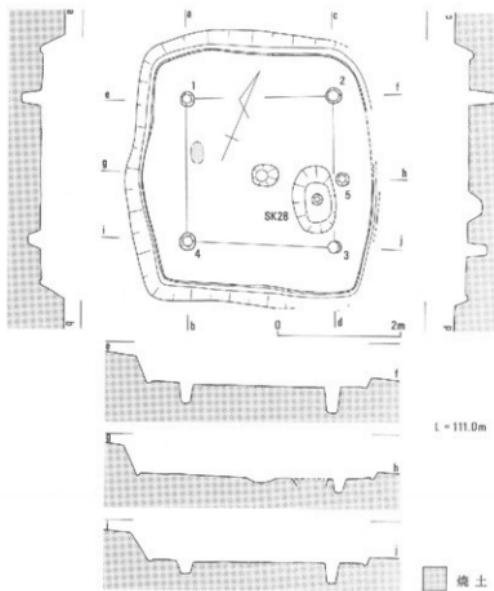


第29図 住居址11出土土器 (S = 1:4)

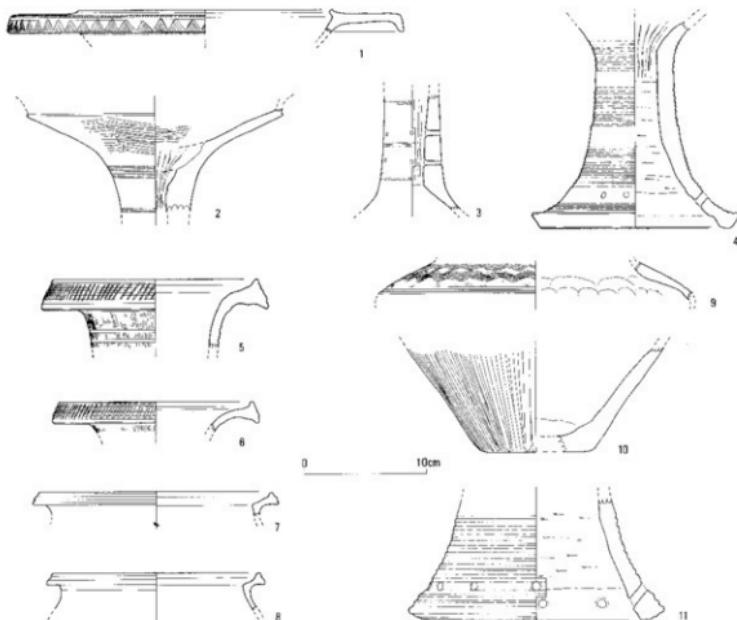
西側80cm程のところには35cm×25cm程の範囲で焼土面が認められる。弥生土器片が小型のポリ袋2袋分、2次加工のある剥片1点(第122図15)が出土した。

#### 住居址12出土土器 (第31図)

1～4は高杯形土器である。1は杯部口縁である。椀状の杯部をもつ器形と考えられる。水平方向に大きく張り出した口縁部をもち、端部は下方に垂れ下がる。端面は斜線で埋めた鋸歯文をめぐらせ、上端に小さな斜方向の連続刻み目文を施す。杯部外面、口縁部下面はハケ調整、杯部内面、口縁部上面はナデである。2は杯部、脚上部である。浅めの杯部から「く」の字形に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ器形と考えられる。杯部は外面、内面とも横方向のヘラミガキを施す。脚上部には、杯部直下に至る2段の櫛描文をめぐらせる。3、4は脚部



第30図 住居址12平・断面図 (S = 1:80)



第31図 住居址12出土土器 (S = 1 : 4)

である。3は摩滅が激しいが、3段に櫛描文をめぐらせ、その間には小さな透かし孔を2段6方向に施している。4は外面に4段の凹線文をめぐらせるようであるが、下から3段目の無文帯は風化のためはっきりしない。最下段の無文帯には2個1組の小さな透かし孔を穿っている。脚端部は上下に拡張する。内面は、透かし穴付近までの下部はナデ、それより上はヘラケズリで、最上部に絞り痕を残している。

5、6、9は壺形土器である。5、6は頸部から緩やかに外反する口縁部をもち、端部は上下に拡張する。端面には3条～4条の凹線をめぐらせ、いずれも斜方向の刻み目文を連続して施す。頸部外面はいずれもハケ調整で、5には2条の凹線がめぐっている。口縁部、頸部内面はナデである。9は胴部がそろばん玉状に張り出す壺形と考えられる。胴部最大径直上に2条の凹線をめぐらせ、それより上頸部までに2段の櫛描波状文をめぐらせる。外面はハケ調整を上からナデ消し、内面には折頭直痕がみられる。

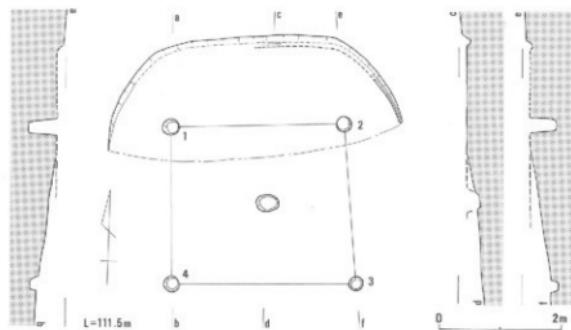
7、8は壺形土器と考えられる。いずれも頸部から「く」の字形に観く外反する口縁部をもつ。いずれも端部は上下にやや拡張し、端面には1～2条の凹線をめぐらせる。外面調整、内面調整とも、観察可能な部分はすべてナデである。

10は底部である。外面調整は下端まで縦方向のヘラミガキで仕上げ、内面は一部にハケ調整がみられる。

11は壺台形土器脚部である。脚端部は肥厚させ、端面には3条の凹線をめぐらせる。外面は凹線文をめぐらせて覆い、下端近くに幅の狭い無文帯を設けてほぼ等間隔に円形透かし孔を穿っている。内面は、下端から透かし穴の上側まではナデ、それ以上はヘラケズリである。

### 住居址13（第32図）

調査区の東部、鞍部北寄りに位置する。斜面下方部分の住居南半では床面、壁溝が失われている。住居は、床面で径5m前後の隅丸方形プランに近い形と推定される。4本柱の住居で、4本の柱穴の中央に検出面での径35

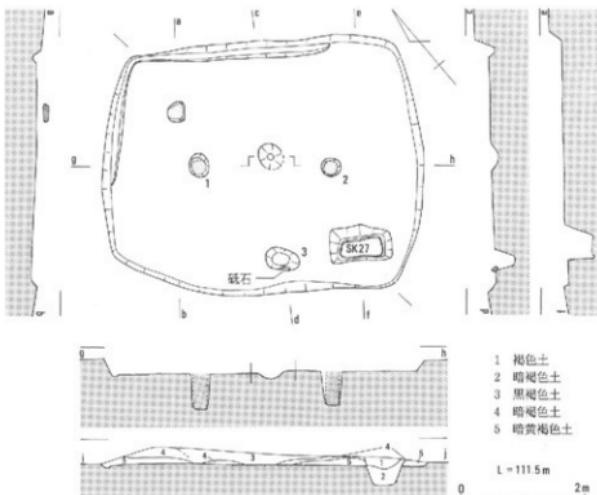


第32図 住居址13平・断面図 (S = 1 : 80)

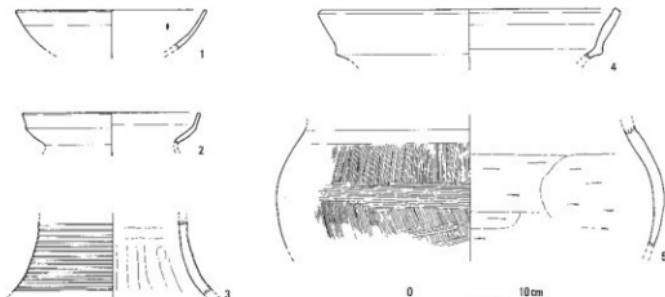
cm×30cm、復元で深さが20cm前後の楕円形の中央穴がある。遺物は、弥生土器片若干量が出上した。図示しなかったが、土器片は弥生時代中期後葉のものを含む。

### 住居址14（第33図）

調査区の東部中央、鞍部上のやや西斜面寄りに位置する。住居内には土壤27が重複しているが、切り合ひ関係から土壤27の方が新しい。住居は、やや長い方形プランに近い形で、床面の長辺方向で最大5.0m、短辺方向で最大4.0mを測る。2本柱で、2つの柱穴の中間に径約40cm、深さ13cmのほぼ円形の中央穴が検出されている。また住居南西辺中央付近の壁際から、径55cm×35cm、深さ33cmの楕円形のピットが検出された。これは出入口の梯子の下端を埋め込んでいたものと考えられるものである。住居北側の一部では壁溝が検出されている。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋1袋分出土した。また、住居北隅近くから30cm角、厚さ10cm程の偏平な石が、梯子ピットの壁側の肩にかかる位置からは砥石（第123図23）が出土している。埋土中からは砥石（第124図24）、2次



第33図 住居址14平・断面図 (S = 1 : 80)



第34図 住居址14出土土器 ( $S = 1:4$ )

加工のある大型の剥片（第123図16）が出土した。

#### 住居址14出土土器（第34図）

1は楕形土器または楕形の高杯形土器の口縁部である。口縁端部は丸くおさめ、外面、内面とも丁寧なナデで仕上げる。

3は壺形土器頸部である。外面には多条の凹線をめぐらせ、内面はナデで仕上げるが、指頭圧痕、絞り痕を残す。

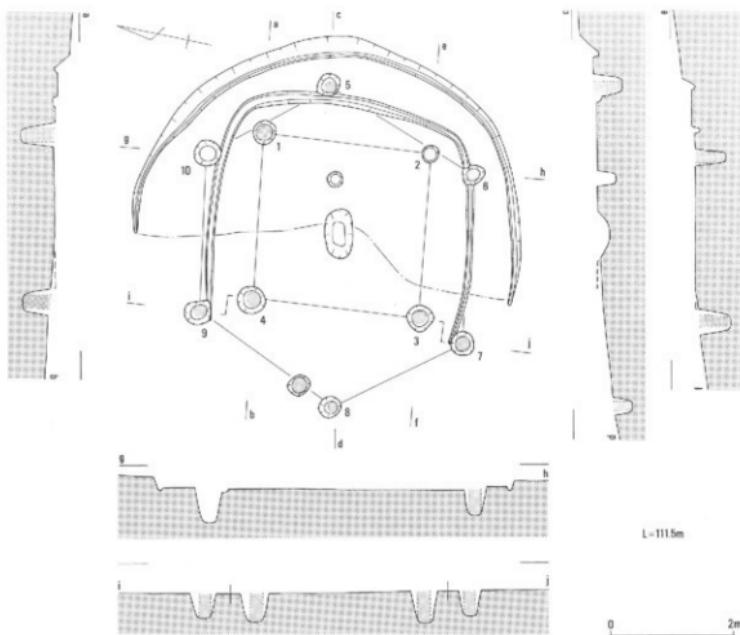
2、4、5は壺形土器または壺形上器である。外面には二重口縁で、端部はやや外方に開く。口縁部端は2は丸くおさめ、4は外傾する端面をもつ。5は胴部である。外面は、縦方向または斜方向のハケ調整の上から一部に横方向のハケ調整を加える。破片の上端部はナデを加えて仕上げる。内面は上端部はナデ、それ以下はヘラケズリである。内外面とも表面は黄灰色で、器壁内部は黒灰色を呈し、一見したところ廿焼きの須恵器のような焼成である。

#### 住居址15（第35図）

調査区東部中央、鞍部のやや南側の西斜面寄りに位置する。斜面下方部分の住居西半では床面、壁溝が失われている。拡張が行われており、2時期が認められる。最初の住居は床面南北方向で4.3mを測る隅丸方形プランと考えられる。柱穴1～4の4本柱と考えられる。拡張時のものは床面南北方向で径6.4mの円形プランと考えられる。柱穴5～10の6本柱である。床面中央には径80cm×45cm、深さ18cmの中央穴があり、2時期で共有していたものと考えられる。柱穴8の北側にも柱痕のあるピットがあり、また中央穴東側にも小ピットがあるが、本住居にかかるものかどうかは明らかでない。遺物は、弥生土器片が小型のボリ袋1袋分出土した。

#### 住居址15出土土器（第36図）

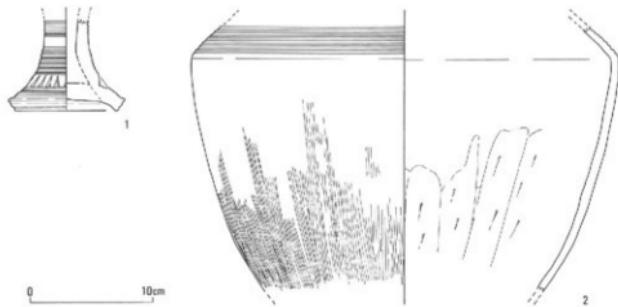
1は高杯形土器脚部である。外面には多条の明瞭な凹線文を3段にめぐらせており、下段の凹線文間に細長い三角形の透かし孔を等間隔に連続して施すが、貫通はしない。脚端面には2条の凹線をめぐらせる。脚部下面は、下端から少し上側の位置で円盤によってふさがれている。円盤下面は籠状のもので調整した後、ナデによって仕上げている。



第35図 住居址15平・断面図 ( $S = 1:80$ )

2は盃形土器胸部である。胸部がそろばん玉状に張り出す器形のものである。最大径部以上には多条の回線をめぐらせ、それ以下はハ

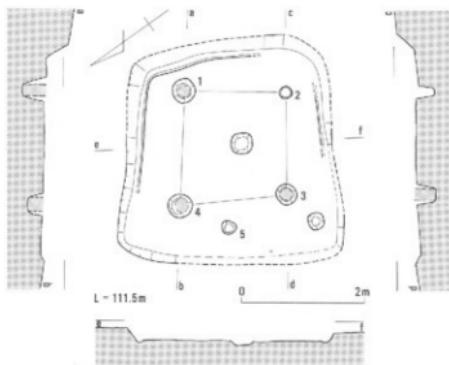
ケ調整で最大径部下側は上からナデを加えるようである。内面は、下半はヘラケズリ、上半はナデによる仕上げである。



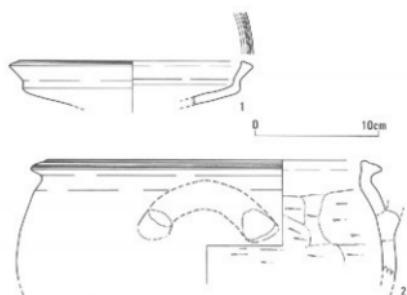
第36図 住居址15出土土器 ( $S = 1:4$ )

#### 住居址16（第37図）

調査区の東部中央、丘陵の西側斜面に位置する。住居は、床面の南東辺で2.8m、北西辺で3.5m、北



第37図 住居址16平・断面図 (S = 1 : 80)



第38図 住居址16出土土器 (S = 1 : 4)

孔をあけ、棒状の粘土を差し込んでアーチ形のものを取り付けていたと思われる。胸部外面はナデ、内面はヘラケズリによる調整である。

#### 住居址17（第39図）

調査区の東端中央部、丘陵の東側斜面寄りに位置する。床面で東西4.8m、南北4.1mを測り卵円形プラン、4本柱の住居である。柱穴3からは柱痕は検出されなかったが、20cm大の偏平な石が出土した。床面中央に径85cm×60cm、深さが22cmの梢円形の中央穴があり、その長軸方向の両側に近接して、1つずつ小ビットを配する。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋1袋分、叩き石1点（第123図19）が出土した。

#### 住居址17出土土器（第40図）

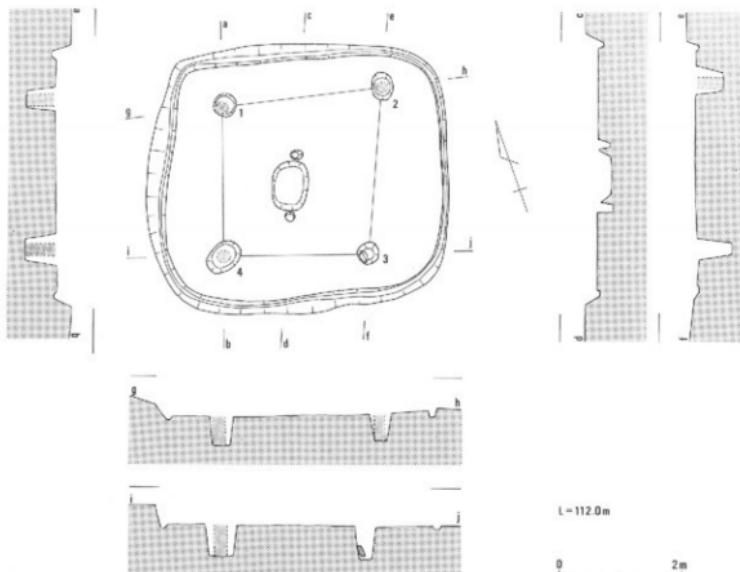
1、2は壺形土器口縁部である。簡状の頸部から緩やかに外反する口縁部をもつ器形のものと考えられる。1は、口縁部上面の端部から頸部上端まで数条の凹線をめぐらせる。端部は上下に拡張し、端面には1～2条の凹線をめぐらせた上に斜方向の連続刻み目文を施す。頸部上端部外面は、ハケ調整の上

西-南東方向で最大3.4mの、台形に近い方形プランに復元される。柱穴1～4の4本柱の住居であると考えられるが、ビット5が柱穴としてかかわってくる可能性も考えられる。ビット5は深さ21cmを測る。床面中央に35cm四方、深さが6cmの隅丸方形の中央穴が検出されている。弥生土器片が小型のポリ袋1袋分出土した。

#### 住居址16出土土器（第38図）

1は高杯形土器杯部である。浅めの杯部から「く」の字形に屈曲して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は肥厚している。やや外傾する端面には3条の浅い凹線をめぐらせており、口縁部、杯部内面ともナデによって仕上げている。杯部の外面調整は明らかでない。

2は壺形土器で、把手をもつ器形である。頸部から「く」の字形に外反する短い口縁部をもつ。端部は両側に拡張し、端面には4条の浅い凹線をめぐらせる。把手は大部分が失われているが、胴部に径2～3cmの



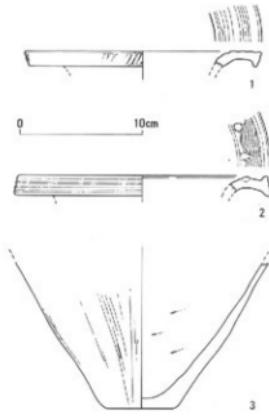
第39図 住居址17平・断面図 (S = 1 : 80)

にナデを加える。2は、口縁部上面に横描波状文を施した上に円形浮文を加える。端部は上下に拡張し、端面には3条の凹線をめぐらせる。

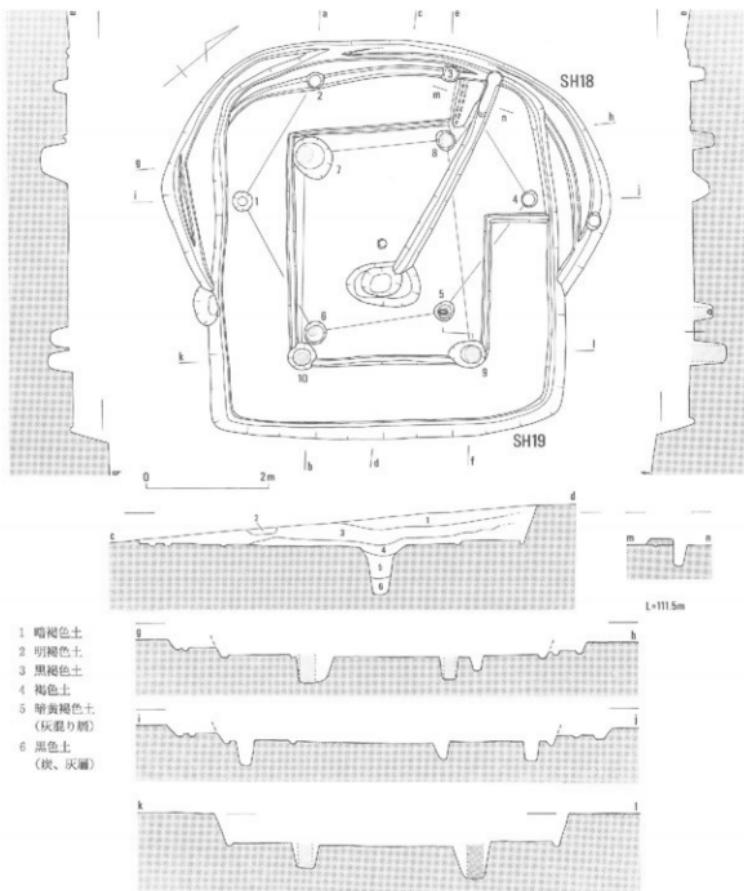
3は底部である。外面は下端まで縦方向のヘラミガキ、内面は一部にヘラケズりがみられるが、おおむねナデによって仕上げているようである。

#### 住居址18（第41図）

調査区南東部、丘陵の西側斜面に位置する。住居19が重複しているが、これは住居18の埋土を切って堅穴が掘り込まれており、まったく別の住居である。床面は壁際の一部が残存するのみであるが、残存する壁溝から、小規模な拡張が行われたことが認められる。最終的な住居は、床面で長径（北東—南西方向）7.0mの楕円形と推定される。柱穴1～6の6本柱である。この住居に対応するとと思われる中央穴は検出されなかった。遺物は、弥生土器片が小型のボリ袋1袋分、叩き石1点（第123図20）が出土した。



第40図 住居址17出土土器 (S = 1 : 4)

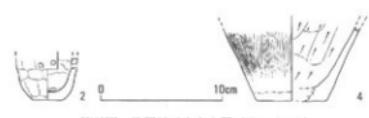


第41図 住居址18、19平・断面図 ( $S = 1:80$ )

#### 住居址18出土土器 (第42図)



1 は高杯形土器脚部である。外面には、2段の崩れをめぐらせる。器壁は厚く、上部では絞り込んだ結果内部の空洞がつぶれ、中実になっている。



2 はミニチュア土器である。口縁部を欠くが、小さな透かし孔を、対向する2方向から貫通させている。全体に指によ

第42図 住居址18出土土器 ( $S = 1:4$ )

る成形痕を残し、内部底面には爪の痕が多数認められる。

3は壺形土器または甕形土器の口縁部である。頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもち、端部は下方に拡張する。端面はわずかに凹面となる。摩滅のため、器面調整は明らかでない。

4は底部である。外面はハケ調整で下部は上からナデを加え、下端は横方向に強くナデしている。内面はヘラケズリである。

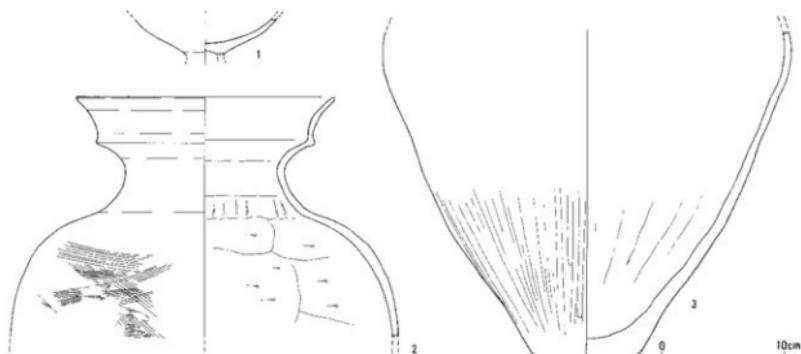
#### 住居址19（第41図）

住居址18と重複する位置にある。住居は方形プランを呈するが、隅はやや丸い。北西辺では小規模な拡張が行われている。最初の住居は床面で北西-南東方向で最大5.8m、北東-南西方向で最大5.5mを測り、拡張後は北西-南東方向で最大6.1mとなる。柱穴7~10の4本柱である。柱穴をつなぐ、あるいはその外側を囲む形で四角く床溝がはしり、北隅付近では直角に屈曲して北西辺、北東辺の壁溝に至っている。この溝に囲まれる部分は、その外側よりもやや低くなっている。ベッド状遺構（註1）のようなものとも考えられるが、溝の内外の高低差は5cm程度しかない。床面中央のやや南東寄りに径120cm×70cm、深さが76cmの椭円形2段掘りの中央穴がある。中央穴内には、底部に黒色の炭、灰層があり、その上にさらに灰層がみられる。中央穴から床溝が北隅に向かってはしり、壁溝に至っている。床溝底面は壁際近くでは10cm程落ち込んでおり、末端は円形ピット状になっている。住居北隅では、壁溝から柱穴8に至る部分で、床溝を覆う状況で10cm程高く土を盛っている部分がみられる。遺物は、土師器片、弥生土器片が小型のポリ袋2袋分出土した。

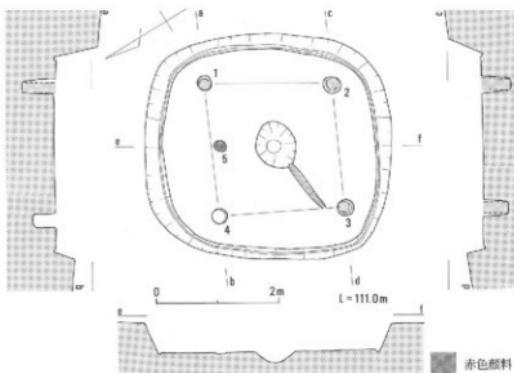
#### 住居址19出土土器（第43図）

1は高杯形土器または橢形土器である。杯部に後から胸部を接合する器形である。摩滅のため、調整等は明らかでない。

2は壺形土器である。二重口縁で、端部は「く」の字形に屈曲して立ち上がり、外反して開く。口縁部端は丸くおさめる。胴部外面は、斜方向のハケ調整の上から一部に横方向のハケ調整を加える。内面はヘラケズリである。頸部以上は内外面ともナデで、頸部内面に絞り痕を残す。



第43図 住居址19出土土器 (S = 1:4)



第44図 住居址20平・断面図 ( $S = 1:80$ )

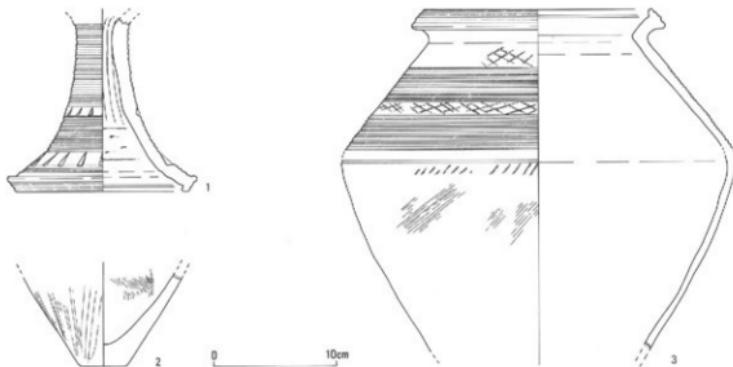
る。住居址19としてとり上げたが、住居址18からの混入の可能性が高い。

#### 住居址20（第44図）

調査区南東部、丘陵の西侧斜面に位置する。住居は、床面の北東・南西方向で最大3.6m、北西・南東方向で最大3.4mの楕円形プランである。柱穴1～4の4本柱である。床面中央に径80cm×65cm、深さが19cmの楕円形の中央穴があり、そこから住居西側に向かって床溝が延びている。住居内北東部からは、赤色顔料のつまつた浅いビット（ビット5）が検出された。このビットは20cm×16cmの楕円形で、深さは2cmを測る。なお、この赤色顔料は分析の結果ベンガラであった。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋1袋分、2次加工のあるサヌカイト剥片1点（第122図7）が出土した。

#### 住居址20出土土器（第45図）

1は高杯形土器脚部である。外面は多条の凹線文を3段にめぐらせる。凹線文間には2段に、細長い



第45図 住居址20出土土器 ( $S = 1:4$ )

3は胴部から底部である。外面の最大径付近はナデ、下部はヘラミガキで仕上げるが、その中間部は摩滅のため明らかでない。内面ナデである。底部下端の外側は、焼成後に表面が四方から剥離し、底面は7cm四方の正方形になっている（図版44）。剥離の状況の明らかな3方で、大きさ、深さもほぼそろっており、人為的なものである可能性がある。

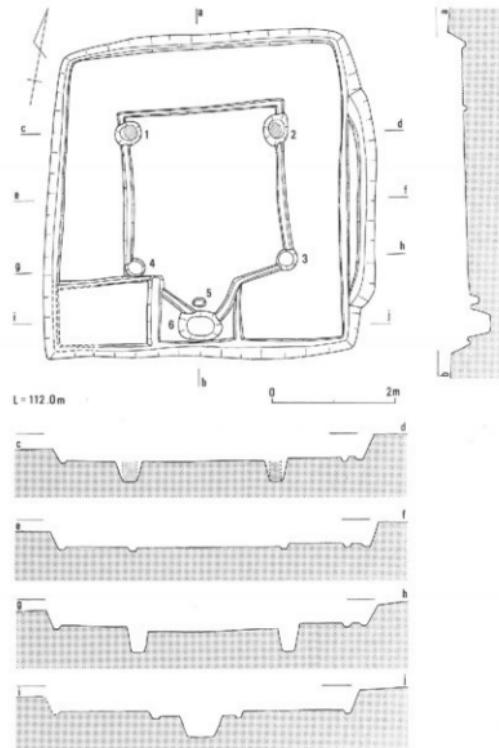
三角形の透かし孔を等間隔に連続して施すが、貫通はない。脚端部は上下に拡張し、端面には2条の凹線をめぐらせる。内面は、下段の無文帯付近までの下部はナデ、それより上、上段の無文帯付近まではヘラケズリで、上部に絞り痕を残している。

2は底部である。外面調整は縦方向のヘラミガキ、内面は破片の上側をハケ調整で仕上げる。

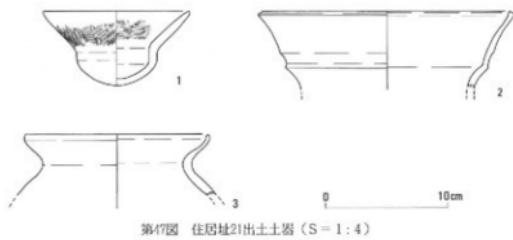
3は壺形土器である。頸部から「く」の字形に観く外反する口縁部をもつ。端部は上下に拡張し、端面には3条の凹線をめぐらせる。胴部は、そろばん玉状に盛り出す器形である。最大径部にはハケメ原体による斜方向の連続刻み目文をめぐらせ、それより上、頸部までは凹線と斜格子目文を交互に施す。外面下部は風化が進んでいるが、一部にハケ調整が認められる。内面は風化が進んでおり、調整は明らかでない。

#### 住居址21（第46図）

調査区南東部、丘陵上平坦部の西側斜面寄りに位置する。住居は方形プランを呈し、東辺の一部を突出させる形の、小規模な拡張と思われる壁面、壁溝が検出されている。住居は床面の南北方向で最大4.9m、東西方向では拡張前で最大4.8m、拡張後は最大5.1mを測る。柱穴1～4の4本柱である。ピット6は、出入口の梯子の下端を埋め込んでいたと考えられるもので、径70cm×50cm、深さ37cmの楕円形を呈する。梯子ピットの内側からも小ピットが検出された。床面には、柱穴をつなぐ形で四角く床溝がはしり、南側では一部屈曲しながら梯子ピットに至っている。また、梯子ピット東側では南辺の床溝からこの溝につながる形で、西側では南北隅を画するように、床溝が検出されている。住居南側では、柱穴をつなぐ溝に囲まれる部分及び梯子ピットの周囲は、溝を境として外側よりも5cm～10cm程度くなっている。北側では内外ほとんど高低差はない。住居19と同様、ベッド状造構に類するものとも考えられる。中央穴



第46図 住居址21平・断面図 (S = 1: 80)



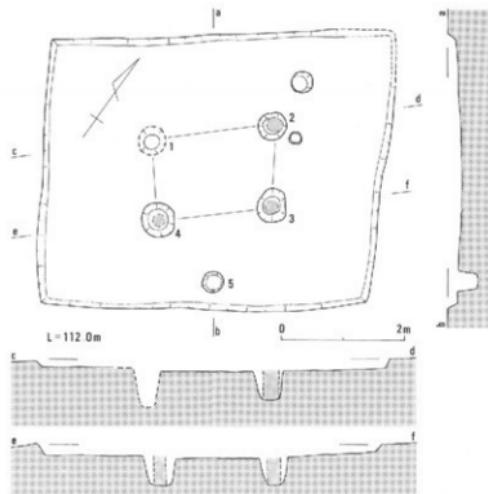
第47図 住居址21出土土器 (S = 1 : 4)

1は小型丸底盃である。球形の体部に外方に開く大きな口縁部がつく。口縁端部は丸くおさめる。体部は内外面ともやや風化が進んでいるが、ナデによって仕上げているようである。口縁部は、外面は縱方向の、内面は横方向のハケ調整である。

2、3は壺または甕の口縁部である。2は二重口縁で、端部は緩やかな「く」の字形に屈曲して立ち上がり、やや外反して開く。口縁部端は内側にわずかにつまみ上げ、わずかな凹面となる端面をもつ。3は頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。端部は上方につまみ上げ、丸くおさめる。いずれも外面、内面ともナデによって仕上げるようである。

#### 住居址22 (第48図)

調査区南東部、丘陵上平坦部のやや西側斜面寄りに位置する。住居は床面の南東辺で5.1m、南西辺で4.1mを測るやや歪んだ方形プランを呈する。柱穴1～4の4本柱である。柱穴間の距離は短く、南東側で中心間185cm、北東側で同135cmを測る。柱穴構成のプランは壁面のプランに対してやや歪んだありかたを示す。ピット5は柱痕はなく、他の柱穴よりもやや浅い。図示しなかったが、ピット5内部からは土師器壺または甕の胴部の大きな破片が出土した。またピット5のやや南側の住居南東辺中央部の壁際からは、土師器高杯 (第49図2)、壺 (第49図5) が並んで出土した (図版17-2)。遺物は、土師器片が小型のボリ袋1袋分出土した。



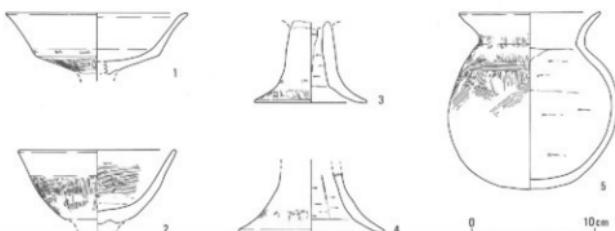
第48図 住居址22平・断面図 (S = 1 : 80)

は検出されていない。遺物は、土師器片が小型のボリ袋1袋分、叩き石1点 (第123図21)、大型の安山岩剥片1点 (第122図14) が出土した。

#### 住居址22出土土器 (第49図)

1～4は土師器高杯である。1、2は杯部である。1は浅めの杯部下段に外反する立ち上がり部がつく器形である。口縁端

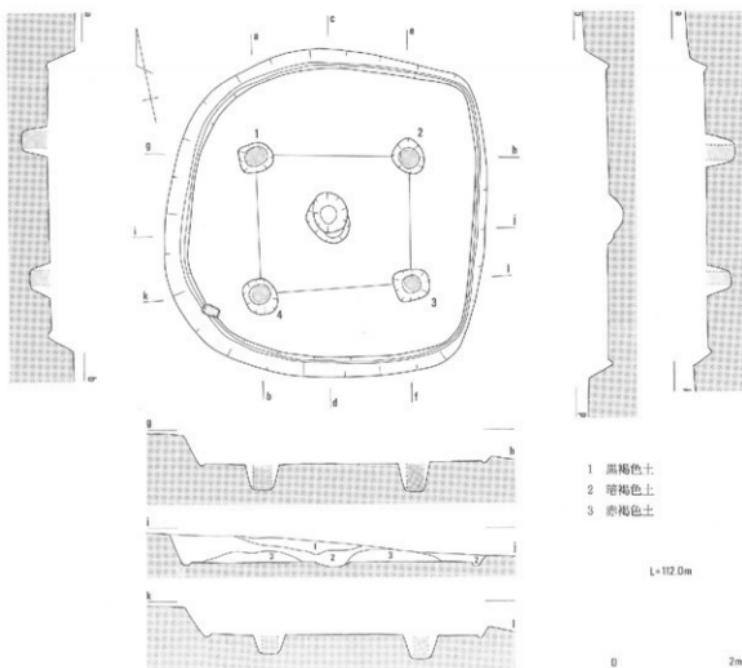
部は丸くおさめる。内面はナデ、杯部下段外  
面はハケ調整、立ち上  
がり部外面  
はハケ調整  
の上からナ



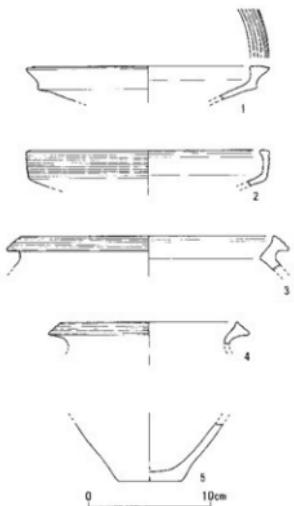
第49図 住居址22出土土器 (S = 1 : 4)

で仕上げているようだ、下端にハケ調整を残している。2は楕形の杯部である。口縁端部は丸くおさめる。内外面ともハケ調整を施し、口縁端部付近、内面底部はナデを加えて仕上げている。3、4は胸部である。筒部と裾部の境界は明瞭でなく、杯接合部から「ハ」の字形に裾部へ開く器形である。いずれも外面はハケ調整の上からナデ仕上げ、内面は裾部はナデ、筒部はヘラケズリである。

5は土師器壺である。頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。口縁部はナデ、胴部は外面ではハケ調整で下半はナデを加えて仕上げ、内面はヘラケズリである。



第50図 住居址23平・断面図 (S = 1 : 80)



第51図 住居址23出土上器 (S=1:4)

#### 住居址23 (第50図)

調査区南東部、丘陵の東側斜面寄りに位置する。住居は隅丸方形で、斜面上側の西側両隅は特に強く丸みを帯びている。床面の東西方向で最大4.8m、南北方向で最大4.9mを測る。柱穴1～4の4本柱の住居である。床面中央に径85cm×70cm、深さが23cmの中央穴がある。2段掘り状で、作り直しによる2時期がある可能性がある。i-jの土層断面から、平面的な分布は明らかでないが、中央穴の両側、壁溝手前までに上手状の層(3層)が堆積している状況がうかがえる。3層は炭化物を多く含み、被熱によると思われる赤化がみられる。遺物は、弥生土器片が小型のボリ袋1袋分出土した。

#### 住居址23出土土器 (第51図)

1、2は高杯形土器杯部である。1は、浅めの杯部から「く」の字形に屈曲して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は外方に拡張している。やや外傾する端面には5条の浅い凹線をめぐらしている。調整は明らかでない。

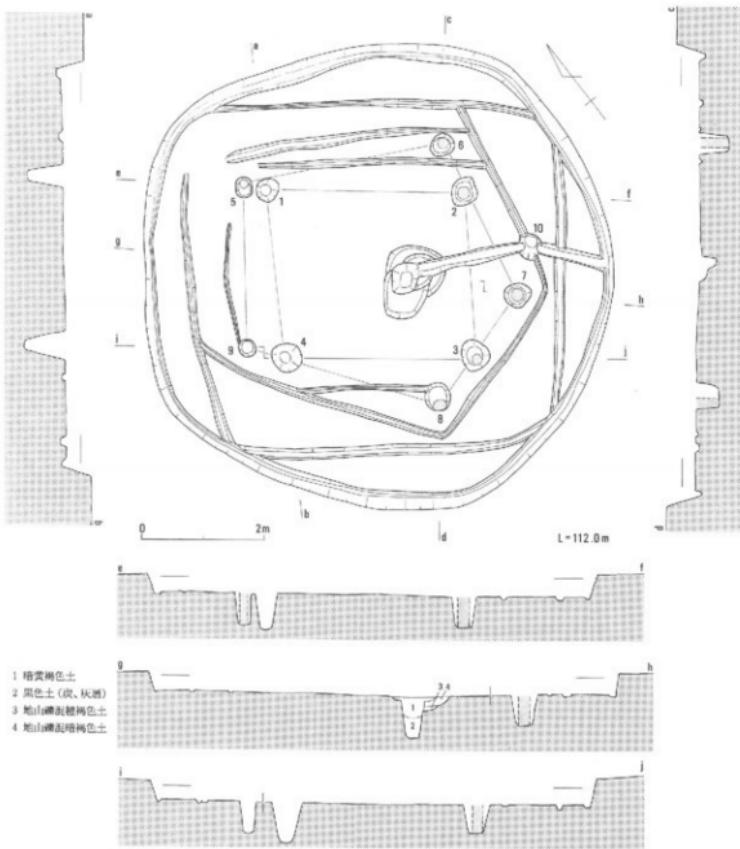
2は、浅めの杯部から真っすぐに立ち上がる口縁部をもち、口縁端部はやや内側に拡張している。口縁部外面には5条の凹線をめぐらしている。内外面ともナデによって仕上げる。

3、4は壺形土器または壺形土器の口縁部である。3は、頸部から「く」の字形に鋭く外反する口縁部をもつ。端部は両側に拡張し、端面には3条の凹線をめぐらせる。胴部外面はナデ、内面ははへラケズリによる調整である。4は、端部を両側に拡張し、端面には2条の浅い凹線をめぐらせる。

5は底部である。風化が進み、調整等は明らかでない。

#### 住居址24 (第52図)

調査区南東端、丘陵上のやや東側斜面寄りに位置する。床面には4本柱、5本柱の2組の柱穴が認められ、建て替えがあったことを示している。最も外側の壁面が最終的な住居のものである。そのプランは丸みを帯びているが、5本柱の柱穴に対応した、隅丸五角形をしていることがうかがえる。とすれば、最初の住居が4本柱、建て替え後が5本柱という柱穴構成になる。最初の4本柱の住居は、壁面のすぐ内側をめぐる隅丸方形の壁溝がそのプランを示すものと考えられる。さらに内側にも柱穴を閉む溝がはいるが、いずれも柱穴に接近し過ぎる感があり、住居の外形プランを示すものではないと考えられる。住居址19、住居址21にみられたような床溝と考えておきたい。柱穴5～9の外側を閉む五角形の床溝が拡張後の住居に対応し、その内側の3方向にみられる溝が最初の隅丸方形住居の床溝に平行しており、この住居に対応する可能性が高いと考えられる。最初の隅丸方形住居は床面北西～南東方向で最大6.3m、北東～南西方向で最大5.7mを測り、拡張時の隅丸五角形住居は床面北西～南東方向で最大7.5m、北東～南西方向で7.3mを測る。いずれの時期も中央穴はほぼ同じ位置に設けていると考えられ、数時期の作り直しが認められる。住居の北西辺では、最初の住居の小規模な拡張により、拡張後の住居と壁

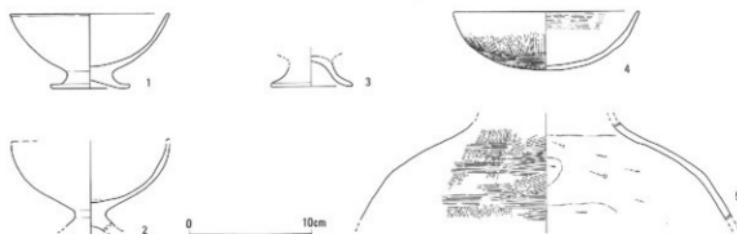


第52図 住居址24平・断面図 (S = 1 : 80)

面、壁溝を共有している可能性も考えられる。その場合、拡張後の隅丸方形住居の北西—南東方向は床面で最大6.8mとなる。床面南東部では、中央穴とピット10を結び、さらに壁溝に至る床溝が検出されている。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋1袋分出土した。

#### 住居址24出土土器 (第53図)

1～4は椀形土器である。1～3は、「ハ」の字形の高台部をもち、1、3の高台端部は丸くおさめる。杯部は半球形で、口縁端部は丸くおさめる。高台部は杯部と別に作り、後から接合される。いずれも全面をナデで仕上げる。4はやや偏平な椀形の器形で、高台はもたない。外面は底部は横方向のハケ調整、中程より上は縦方向のハケ調整で、口縁部では横方向にナデを加えて仕上げる。内面は口縁部では横方向のハケ調整、それより下はナデによって仕上げている。



第53図 住居址24出土土器 ( $S = 1:4$ )

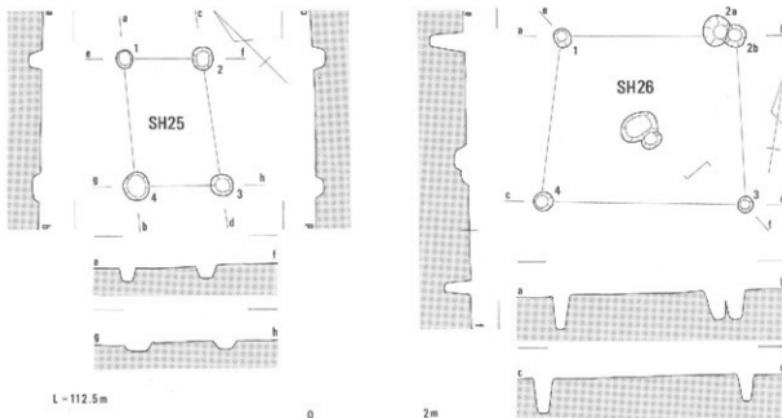
5は壺形土器の断面である。外面は縦方向のハケ調整の上から一部に横方向のハケ調整を施し、内面はヘラケズリによる調整である。

#### 住居址25（第54図）

柱穴のみが検出されたが、住居となる可能性があるものである。調査区の南東部最高所の平坦部に位置する。4本の柱穴は、中心間で南東辺2.1m、南西辺1.4mのやや平行四辺形に近いプランで、北東—南西方向に長い。建物址としては規模が小さすぎ、本遺跡内で類例を求めるに、住居址22の柱穴がほぼ同じ規模、形態を示し、位置的にも近い。遺物は出土していない。

#### 住居址26（第54図）

住居址25同様、柱穴のみが検出されたが、住居となる可能性があるものである。調査区の南東部最高所の平坦部に位置する。4本の柱穴は、中心間で南辺3.3m、西辺2.7mのやや南側の開いた台形である。柱穴2は2本が重複しており、立て直している可能性も考えられる。4本の柱穴の中央に径65cm×45cm、深さが22cmの楕円形のピットがあり、中央穴となる可能性が考えられる。遺物は出土していない。

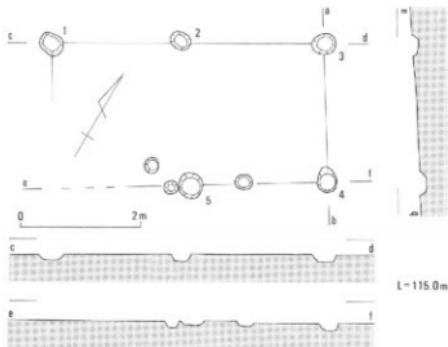


第54図 住居址25、26平・断面図 ( $S = 1:80$ )

## (2) 建物跡

### 建物址 1 (第55図)

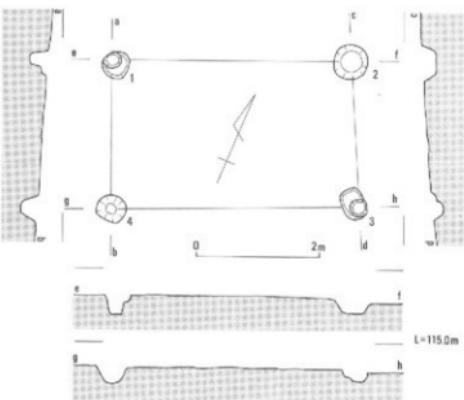
調査区北西部、丘陵最高所やや南寄りの平坦部に位置する。桁行き 2間、梁間 1 間の建物である。桁行き 4.5m、梁間 2.3m を測る。桁行きは尾根筋の方向に平行する。南西側の柱穴は流失している。遺物は出土していない。



第55図 建物址 1 平・断面図 (S = 1 : 80)

### 建物址 2 (第56図)

調査区北西部、丘陵最高所やや南東寄りの平坦部に位置する。桁行き 1 間、梁間 1 間の建物である。桁行き 4.0m、梁間 2.4m を測る。桁行きは尾根筋の方向に平行する。遺物は出土していない。



第56図 建物址 2 平・断面図 (S = 1 : 80)

### 建物址 3 (第57図)

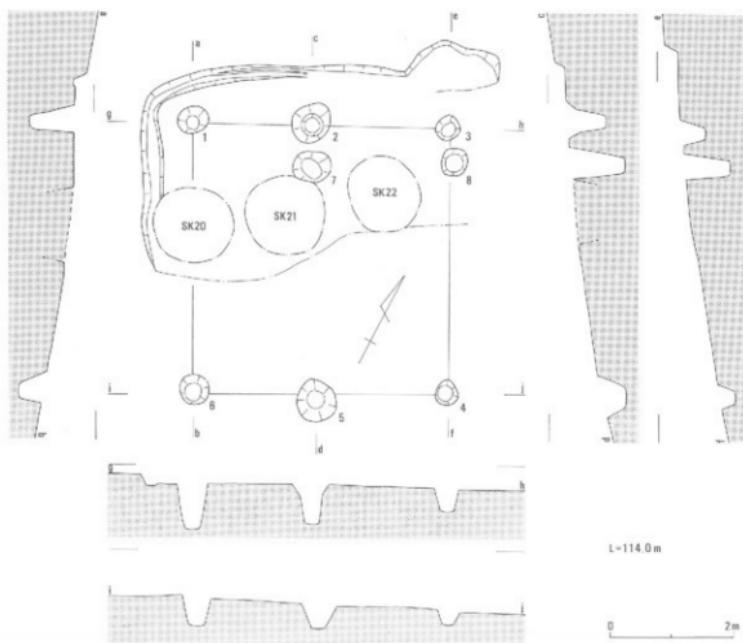
調査区北西部、丘陵最高所南側の斜面に位置する。近世墓と思われる土壙 3 基が重複している。2 間 × 1 間の建物である。柱穴 1 、 3 の中心間が 4.4m 、柱穴 3 、 4 の中心間が 4.2m を測る。建物北辺では、柱穴 7 、 8 が検出され、建て替えが行われた可能性も考えられる。

柱穴 4 、 8 間は 3.8m を測る。建物北半の斜面上方では、壁溝を伴った平坦面の削り出しが認められる。遺物は、柱穴 7 から第58図 1 、 2 他弥生土器片若干が、また段状部埋土からは第58図 3 他土器片、弥生土器片若干、サヌカイト剥片 1 点が出土した。また、柱穴 5 からは弥生土器片若干、鉄滓が出土している。

### 建物址 3 出土土器 (第58図)

1 は高杯形土器杯部である。1 は、浅めの杯部から「く」の字形に屈曲して立ち上がる口縁部をもち、口縁部は外方に拡張している。やや外傾する端面には 3 条の深い凹線をめぐらせている。調整は明らかでない。

2 は甕形土器である。頸部から「く」の字形に外反する短い口縁部をもつ。端部は丸くおさめる。胴部外面は風化が進んでいるが、ナデによって仕上げているようである。内面ははヘラケズリによる調整



第57図 建物址3平・断面図 (S=1:80)

である。胸部外面にはススの付着がみられる。

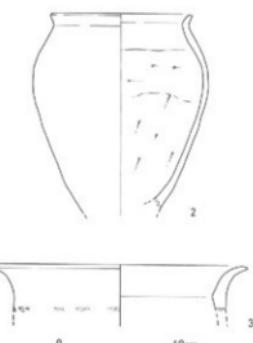
3は土師器甕口縁部である。緩やかに外反して開く口縁部をもち、端部は丸くおさめる。張りのない胸部をもつ器形と考えられる。調整は口縁部はナデ、胸部外面はわずかにハケ調整が残る。

#### 建物址4 (第59図)

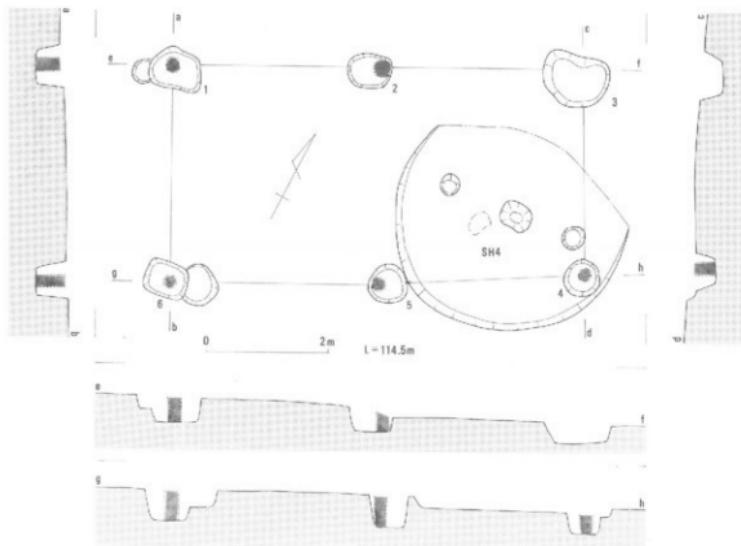
調査区北側中央部、丘陵上の平坦部やや北寄りに位置する。建物東部では、住居址4と重複している。桁行き2間、梁間1間の建物である。桁行き6.8m、梁間3.5mを測り、本遺跡内では大型の部類に入る建物である。桁行きは尾根筋の方向に平行する。遺物は、柱穴1、2、3から弥生上器片若干が出土した。

#### 建物址4出土土器 (第60図)

1、2は底部である。1は柱穴2から、2は柱穴1か

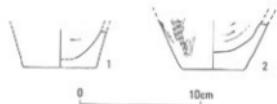


第58図 建物址3出土土器 (S=1:4)



第59図 建物址4平・断面図 ( $S = 1:80$ )

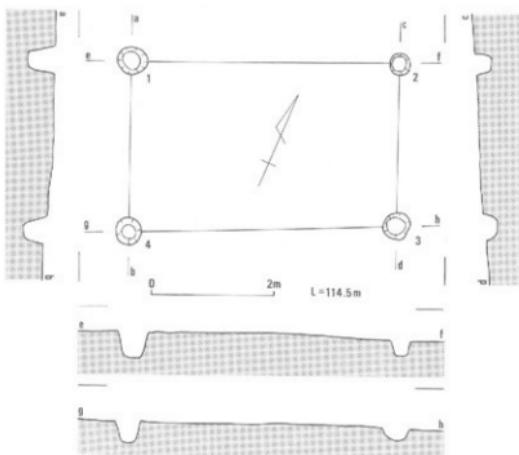
らの出土である。1は風化が進み、外面調整は明らかでない。2は外面はハケ調整で下端は横にナデている。内面はいずれもヘラケズリによる調整である。



第60図 建物址4出土土器 ( $S = 1:4$ )

#### 建物址5（第61図）

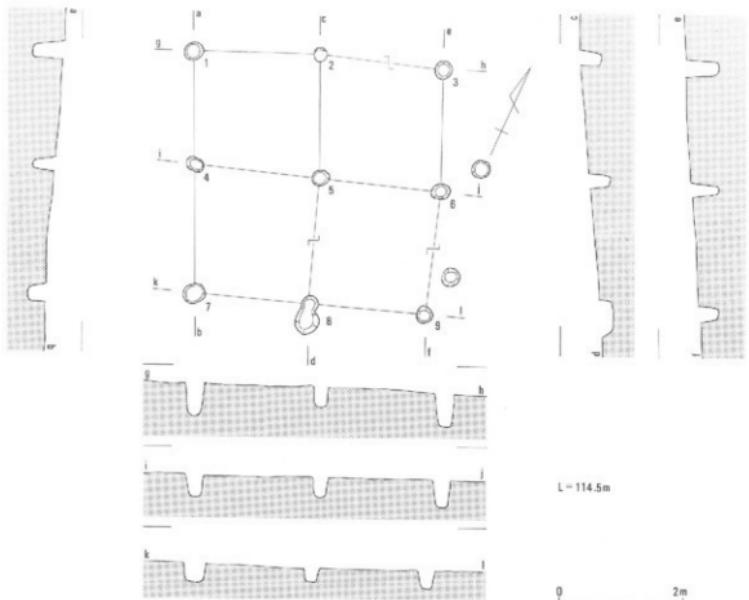
調査区北側中央部、丘陵上の平坦部やや南寄りに位置する。桁行き1間、梁間1間の建物である。桁行き4.4m、梁間2.7mを測る。桁行きは尾根筋の方向に平行する。遺物は、柱穴3、4から弥生土器小片各1点が出土した。



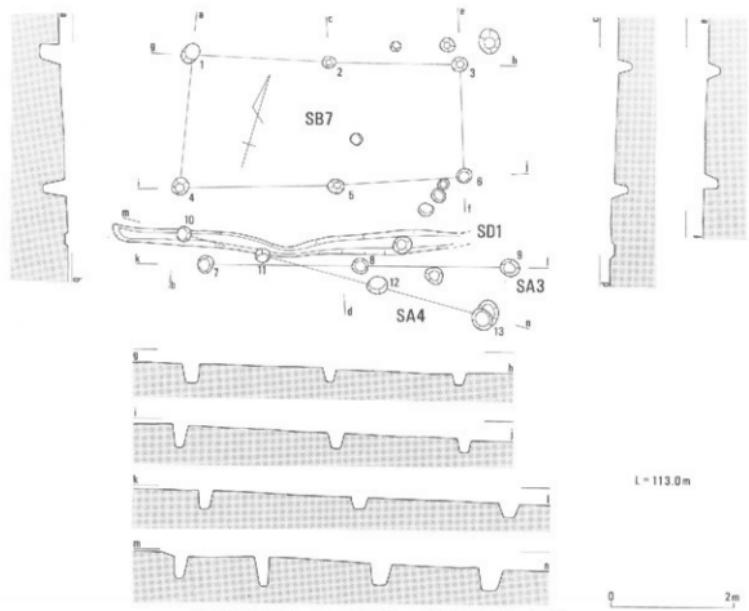
第61図 建物址5平・断面図 ( $S = 1:80$ )

#### 建物址6（第62図）

調査区北側、丘陵上の平坦部に位置する。2間×2間の総柱建物である。北辺



第62図 建物址6 平・断面図 ( $S = 1:80$ )



第63図 建物址7、溝1、柱穴列3、4平・断面図 ( $S = 1:80$ )

で4.1m、東辺で4.0mを測り、プランはやや重んでいる。遺物は、柱穴9から弥生土器小片1点が出土した。

#### 建物址7、溝1、柱穴列3、4（第63図）

調査区北側中央部、丘陵上の平坦部北寄りに位置する。桁行き2間、梁間1間の建物である。桁行きは南辺で4.6m、梁間は西辺で2.3mを測り、プランはやや重んでいる。桁行きは尾根筋の方向に平行する。遺物は出土していない。

建物址6の南側60cm～80cm程のところでは、桁行き方向に平行する溝1が検出されている。遺物は弥生土器片が小型のボリ袋1袋分出土した。

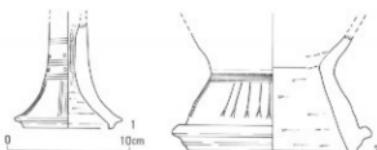
溝1の南側に接して、柱穴3本（柱穴7～9）からなる柱穴列3が検出された。遺物は出土していない。建物址6の桁行き方向、溝1、柱穴列3は重複せずに平行する位置関係をもっているが、時間的な関係については明らかでない。

溝1、柱穴列3に重複して、柱穴4本（柱穴10～13）からなる柱穴列4が検出された。遺物は、柱穴13から弥生土器小片が1点出土した。

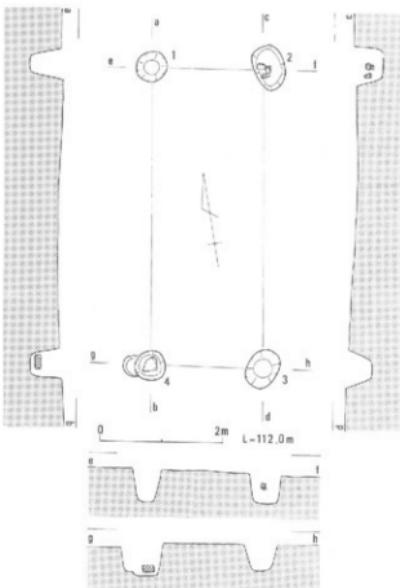
#### 溝1出土土器（第64図）

1は高杯形土器脚部である。外面には、3段の櫛描文をめぐらせ、その間には竹箇状の工具による円形刺突文を2段に施している。脚部外面には縦方向、2本1組の櫛描文を4方向に施している。櫛描文はいずれも沈線状の3本が1組になっている。脚端部は両側に拡張し、端面は強い凹面となっている。外面、内面下位はナデ、内面中位はヘラケズリで、内面上位には絞り痕を残す。

2は脚部である。台付鉢形土器と考えられる。脚端部は凸帯状に外方に拡張し、端面は2条の幅広の凹面状となっている。脚部は外面がやや膨らみ、縦方向の数本1組の直線状または雁股織形の櫛描文を施し、上端には櫛描文を1条めぐらせ。外面はナデ、内面はヘラケズリである。



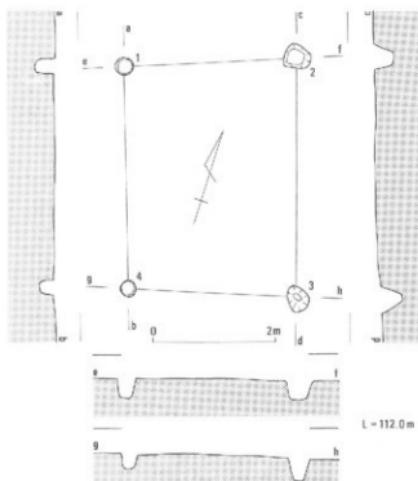
第64図 溝1出土土器（S=1:4）



第65図 建物址8 平・断面図（S=1:80）

### 建物址 8 (第65図)

調査区東部中央、丘陵上の平坦部に位置する。1間×1間の建物である。桁行き4.8m、梁間1.8mを測り、プランは南北に細長い。桁行きはほぼ尾根筋に平行する。柱穴4の底部付近からは、やや浮いた状態で30cm×25cm、厚さ10cm程の偏平な石が出土した。また柱穴2では、柱痕は検出されていない。



第65図 建物址9平・断面図 (S = 1:80)

柱大の石数個が柱の根固めのような状態で出土している。その他の遺物は出土していない。

### 建物址 9 (第66図)

調査区東部中央、丘陵上の平坦部のやや東斜面寄りに位置する。1間×1間の建物である。桁行きは東辺で3.9m、梁間は北辺で2.8mを測り、プランはやや重んでいる。遺物は、柱穴1から弥生土器小片1点が出土した。

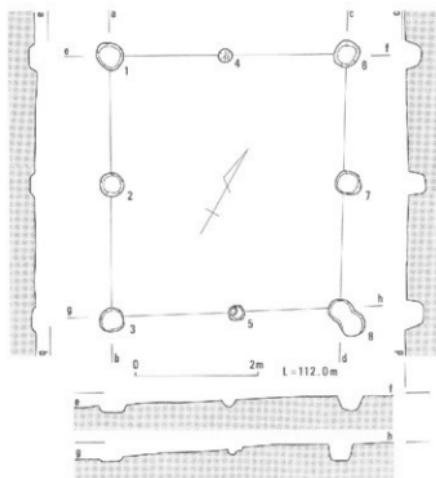
### 建物址10 (第67図)

調査区南東部、丘陵上の平坦部に位置する。桁行き2間、梁間2間の建物である。桁行きは南西辺で4.3m、梁間は北西辺で3.9mを測る。桁行きは尾根筋の方向に平行する。両妻側中央の柱穴は、他の柱穴に比べ、径も小さく、深さも浅い。遺物は、柱穴7からヒョウタン形の小型石器1点（第122図12）が出土した。

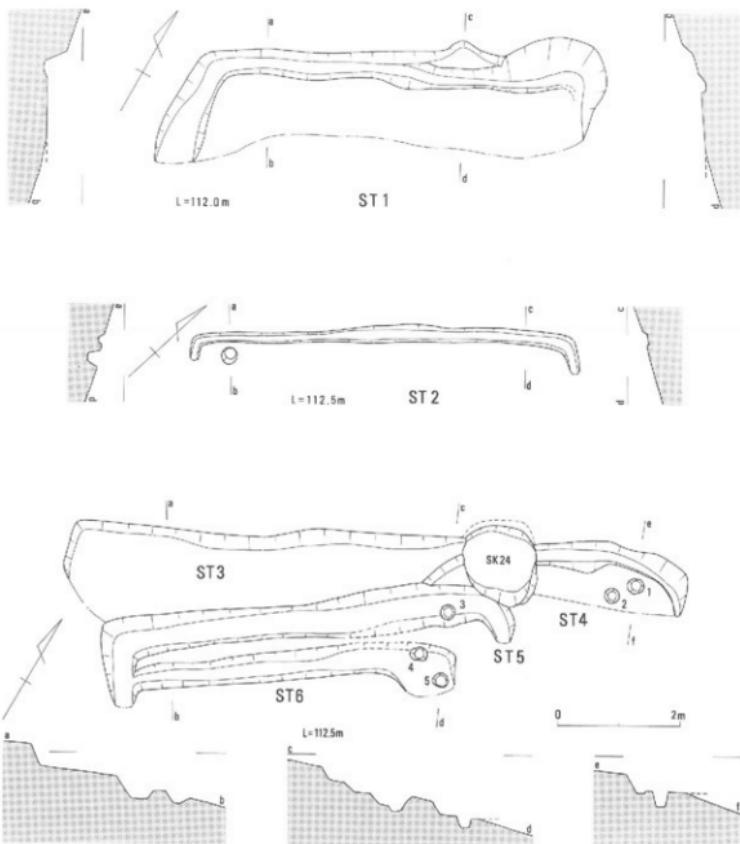
### (3) 段状遺構

#### 段状遺構1 (第68図)

調査区北半中央部、丘陵最高所の南側斜面に位置する。丘陵最高所との標高差は約3.5mを測る。丘陵斜面を断面「L」字形に削平し、現状で長さ7.0m、幅が最大で1.6mの細長い台形プランの平坦面を形成している。平坦面は等高線に平行する。平坦面の北側、西側では、幅15cm～60cmの壁溝が検出されている。東部の一部では、壁溝の



第67図 建物址10平・断面図 (S = 1:80)



第68図 段状遺構1～6平・断面図 (S = 1:80)

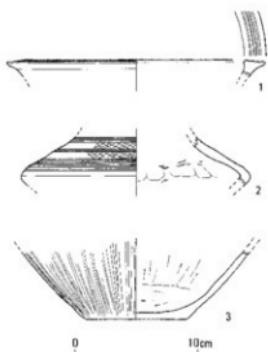
山側を120cm×35cmの三角形の棚状に削りこんでいる。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋1袋分出土した。

#### 段状遺構1出土土器（第69図）

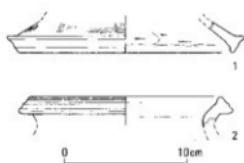
1は高杯形土器杯部口縁である。杯部から「く」の字形に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ器形と考えられる。端部は両側に拡張し、わずかに外傾する端面には4条の凹線をめぐらせる。外面、内面ともナデである。

2は壺形土器である。胴部がそろばん玉状に張り出す器形である。最大径部より上、頸部までは、凹線と斜格子目文を交互に施す。内面はナデで、最大径部上側には指頭圧痕、爪痕を残す。

3は底部である。外面調整は下端まで縱方向のヘラミガキで仕上げ、内面はヘラケヅリである。



第68図 段状遺構1出土土器 ( $S = 1:4$ )



第68図 段状遺構3出土土器 ( $S = 1:4$ )

#### 段状遺構2 (第68図)

調査区北半中央部、丘陵最高所の南側斜面に位置する。丘陵最高所との標高差は約3mを測る。平坦面は流失し、「コ」の字形の壁溝のみが検出された。壁溝は、現状で長さ6.3mで、幅は15cm~30cmで、等高線に平行する。溝の南西端から50cm程のところからは、径25cmのビットが検出されている。遺物は出土していない。

#### 段状遺構3 (第68図)

段状遺構3~6は、調査区北半中央部、丘陵最高所の南東側斜面に位置する。

段状遺構3は、丘陵最高所との標高差は約2.5mを測る。東側では段状遺構4、土壤24と、南側では段状遺構5とそれぞれ重複しているが、時期的な前後関係は明らかでない。丘陵斜面を断面「L」字形に削平し、等高線とはほぼ平行する平坦面を形成している。現状では長さ3.2m、幅が最大で0.8mを測る。遺物は、弥生土器片若干が出土した。

#### 段状遺構3出土土器 (第70図)

1は高杯形土器脚部である。脚端部は両側に拡張し、端面は凹面となっている。風化が進んでいるが、外面には一部にハケ調整が残り、内面はヘラケズリである。2は壺形土器または壺形土器の口縁部である。端部は上下に拡張し、端面には3条の凹線をめぐらせる。

#### 段状遺構4 (第68図)

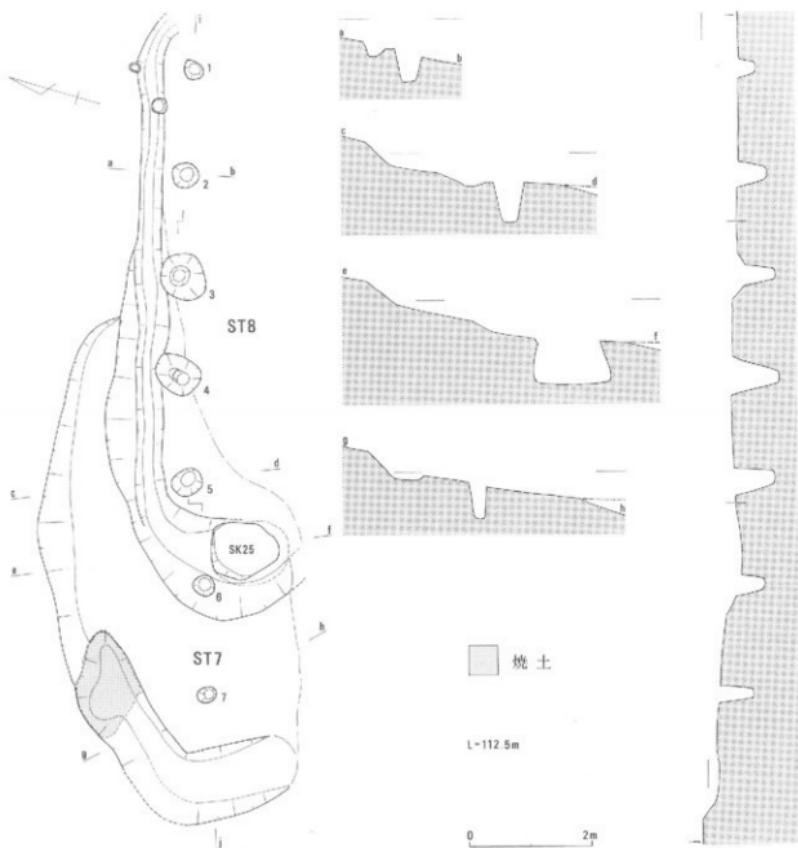
段状遺構4は、丘陵最高所との標高差は約3mを測る。西側では段状遺構3、5、土壤24ととそれぞれ重複しているが、時期的な前後関係は明らかでない。丘陵斜面を断面「L」字形に削平し、現状で長さ4.1m、幅が最大で0.9mの細長い半月形の平坦面を形成している。平坦面は等高線と平行する。平坦面の東側では、壁溝、小ビット2が検出された。遺物は、弥生土器片若干が出土した。

#### 段状遺構5 (第68図)

丘陵最高所との標高差は約3mを測る。平坦面は流失し、「コ」の字形の壁溝のみが検出された。壁溝は、現状で長さ6.7m、幅は50cm~75cmで、等高線と平行する。溝内の、東端から1m程のところからは、径20cmのビットが検出されているが、段状遺構4東部のものと対になる可能性がある。遺物は、弥生土器片若干が出土した。

#### 段状遺構6 (第68図)

丘陵最高所との標高差は約3mを測る。平坦面は流失し、壁溝のみが検出された。壁溝は、現状で長

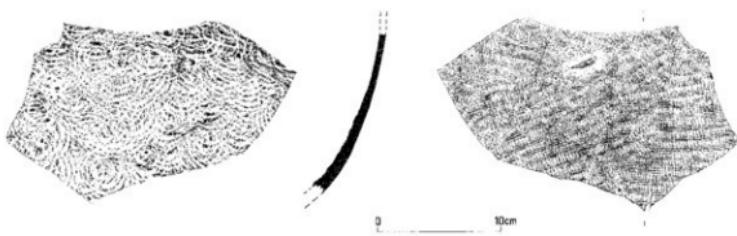


第71図 段状遺構7、8 平・断面図 ( $S = 1:80$ )

さ5.2m、幅は50cm前後で等高線と平行する。溝内東端付近からは、小ピット2が検出されている。遺物は、弥生土器片若干が出土した。

#### 段状遺構7（第71図）

調査区北半中央部、丘陵の南側斜面に位置する。丘陵最高所との標高差は約2.5mを測る。東側部分は段状遺構8と重複している。丘陵斜面を断面「L」字形に削平し、現状で長さ8.0m、幅が最大で3.5mの等高線に平行する平坦面を形成している。平坦面の西部では、「L」字形の壁溝が検出され、その東端部は焼土面となっている。壁溝は、幅90cm～120cmを測る。平坦面の西部からは小ピットが検出されたが、これは段状遺構8の柱穴列の一部となる可能性もある。遺物は、弥生土器片、土師器片、須恵器片がそれぞれ若干出土した。



第72図 段状遺構7出土土器（S=1:4）

#### 段状遺構7出土土器（第72図）

須恵器大壺柄部と思われる破片を図示した。外面は、平行叩き工具の叩き面…端の縁辺部のみを器面に押し付けたものと思われる、1単位で長さ3cm～4cm、幅5mm前後の細長い直線状の叩き凹を鱗状に施している。さらに上からカキ目を施す。内面は同心円叩きである。外面上部の一部に暗緑色の自然釉が認められる。

#### 段状遺構8（第71図）

調査区北半中央部、丘陵の南側斜面に位置する。丘陵最高所との標高差は約3mを測る。西側部分は段状遺構7と重複している。丘陵斜面を断面「L」字形に削平しているが、平坦面はほとんど流失している。山側の壁溝が検出され、現状で長さ10.0mを測り、ほぼ等高線と平行する。壁溝は幅40cm～50cmを測るが、西端部は南へ屈曲して幅1.6mと広がり、末端付近に上塙25が存在している。上塙25との時間的な前後関係については明らかでない。壁から70cm前後の距離を置いて、壁に平行する柱穴列が検出された。柱穴1～5は壁溝に囲まれた部分に存在するが、柱穴6、7もほぼ1列に並び、この柱穴列に含まれる可能性がある。1～7の各柱穴間は1.7m前後ではほぼ一定している。遺物は、弥生土器片若干が出土した。

#### 段状遺構9（第73図）

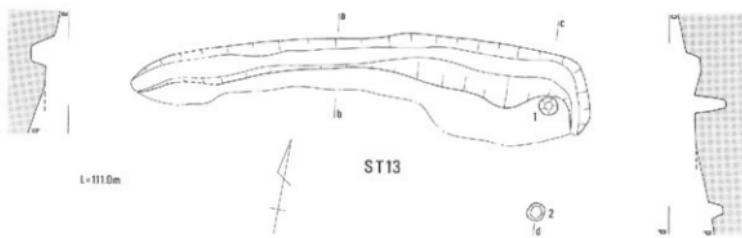
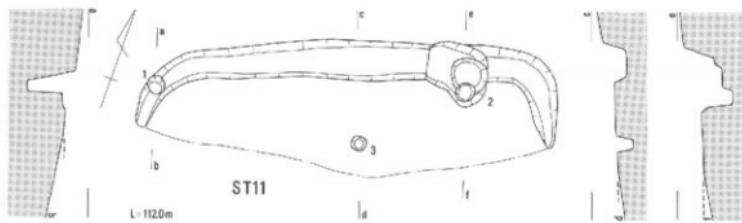
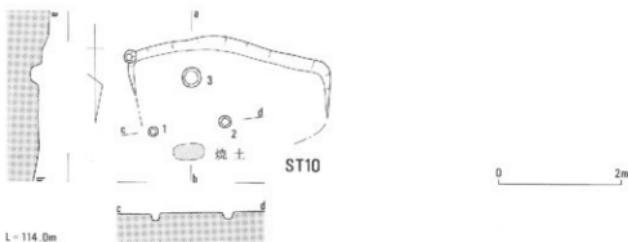
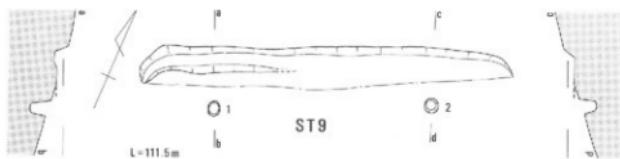
調査区北半中央部、丘陵の南側斜面に位置する。丘陵最高所との標高差は約3.5mを測る。丘陵斜面を断面「L」字形に削平し、現状で長さ6.0m、幅が最大で0.6mの平坦面を形成している。平坦面は等高線と平行する。平坦面の西部では、幅40cm程の壁溝が検出された。壁から約80cm程の距離を置いて、柱穴2個が検出された。遺物は、弥生土器片若干が出土した。

#### 段状遺構9出土土器（第74図）

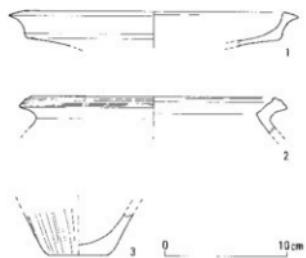
1は高杯形上器杯部口縁である。浅めの杯部から「く」の字形に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ器形である。端部は外方に拡張し、やや外傾する端面をもつ。風化が激しく、調整等は明らかでない。

2は壺形土器または瓶形土器である。頭部から「く」の字形に鋭く外反する口縁部をもつ。端部は両側にやや拡張し、端面には3条の凹線をめぐらせる。

3は底部である。外面調整は縦方向のヘラミガキ、内面はナデで、一部にスス状の付着物が認められる。



第73図 段状道槽 9~11、13平・断面図 (S = 1 : 80)



第74図 段状遺構9出土土器 (S-1:4)

#### 段状遺構10 (第73図)

調査区北半中央部、丘陵の北側斜面寄りに位置する。丘陵斜面を断面「L」字形に削平し、現状で長さ3.1m、幅約2mの平坦面を形成している。平坦面の北部では、50cm×25cmの楕円形の焼上面が検出された。また平坦面からは3個の小ピットが検出されている。遺物は、弥生土器片若干が出土した。

#### 段状遺構11 (第73図)

調査区北半東部、丘陵の南側斜面に位置する。尾根筋との標高差は約1mを測る。丘陵斜面を断面「L」字形に削平し、現状で長さ6.9m、幅が最大で2.1mの平坦面を形成している。平坦面は等高線と平行する。平坦面の山側からは、「コ」の字形の塗溝が検出された。壁溝は幅40cm～60cmを測り、溝内の東西両側からピットが検出されている。遺物は、弥生土器片がピット1から小型のポリ袋1袋分、ピット2から小型のポリ袋2袋分、また2次加工のある剥片1点（第122図8）が出土した。

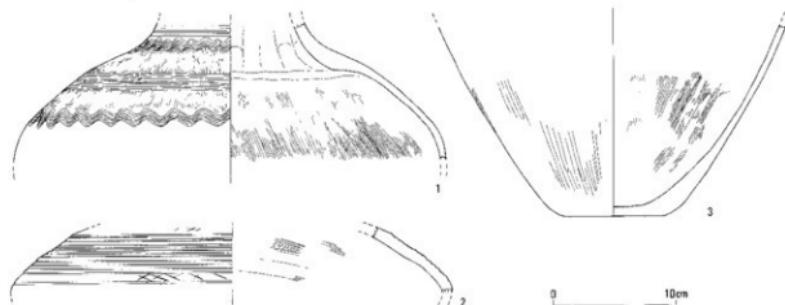
#### 段状遺構11出土土器 (第75図)

1、2は壺形土器である。いずれもピット2からの出土である。1は胴部最大径部に対し、非常に細い頸部をもつ器形である。外面はハケ調整の上から一部にナデを加え、文様構成は、上側から凹線文、櫛描波状文、2条の櫛描直線文、櫛描波状文となっている。内面は、胴部はハケ調整、胴部上端以上はナデで、頸部に絞り痕を残す。2は、胴部がそろばん玉状に張り出す器形と考えられる。外面には凹線文と斜格子目文を交互に施している。内面はおおむねナデであるが、一部にハケ調整がみられる。

3は底部で、ピット1からの出土である。外面調整は縦方向のヘラミガキ、内面はハケ調整の上からナデを加えている。

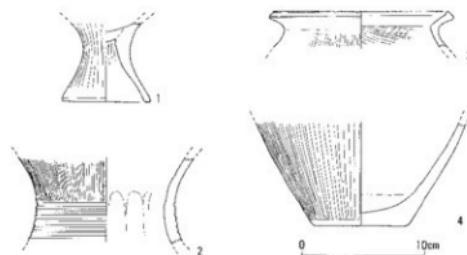
#### 段状遺構12 (第26図)

調査区北半東部、丘陵の南側斜面に位置する。尾根筋との標高差は約1.5mを測る。丘陵斜面を断面



第75図 段状遺構11出土土器 (S-1:4)

「L」字形に削平し、現状で長さ4.2m、幅が最大で1.7mの平坦面を形成している。平坦面は等高線と平行する。平坦面の東部からは小ビットが検出されている。遺物は、弥生土器片、土師器片、須恵器片がそれぞれ若干量出土した。須恵器片は住居址10出土のものと同一個体と考えられ、この段状遺構は住居址10と同時期か、それ以降のものであると思われる。



第75図 段状遺構13出土土器 (S = 1:4)

#### 段状遺構13（第73図）

調査区北半東部、鞍部に近い丘陵南側斜面に位置する。尾根筋との標高差は約1.5mを測る。丘陵斜面を断面「L」字形に削平し、平坦面を形成している。平坦面は人手が失われているが、現状で長さ7.4m、幅が最大で1.5mを測り、等高線と平行する。平坦面の山側からは壁溝が検出されている。壁溝は西部で幅50cm前後、東部ではやや不整な形で、最大1mを測る。遺構東端部付近からは小ビットが検出されている。遺物は、弥生土器片が小型のボリ袋1袋分出土した。

#### 段状遺構13出土土器（第76図）

1は脚部である。裾部は直線的で立ち上がりの急な「ハ」の字形で、平らな端面をもつ。杯部底面は、円盤充填によってふさがれている。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は杯部、脚部ともナデによって仕上げ、脚部内面上部には絞り痕が残る。

2は壺形土器頭部と考えられる。斜め上方にラッパ状に開く口縁部をもつ器形と考えられる。上部はハケ調整、下部には凹線文をめぐらしている。内面には絞り痕がみられる。

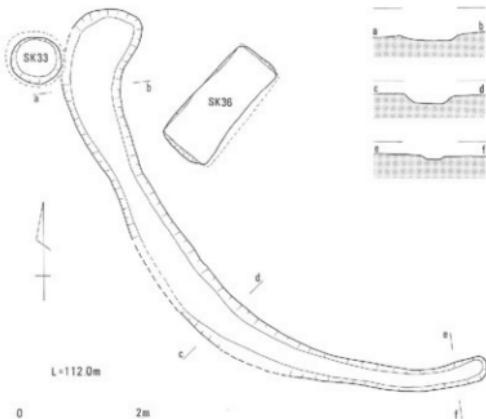
3は甕形土器である。頸部から「く」の字形に鋭く外反する口縁部をもつ。端部は上方にやや拡張し、端面は四面となる。口縁部はナデ、胴部は内外面ともハケ調整である。

4は底部である。外面調整は縦方向のヘラミガキで下端に弱くナデを加え、内面はナデである。

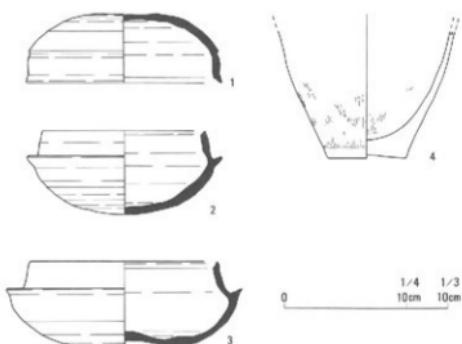
#### (4) 溝状遺構

##### 溝2（第77図）

調査区東部中央付近、鞍部からやや南へ上がった平坦部の西斜面寄りに位置する。弧状を呈し、両端の直線距離は8.9mを測る。幅は東端付近で35cm前後、北端付近で最大1.1mを測る。東端付近からは須恵器蓋杯がまとまって出土した。また、図示しなかったが、無蓋高杯の破片も出土している。古墳の周溝の可能性も考えられるが、土体部等は検出されていない。他に混入と考えられる弥生土器片等、全体で小型のボリ袋1袋分の土器が出土した。



第77図 溝2平・断面図 ( $S = 1:80$ )



第78図 溝2出土土器 (1~3… $S = 1:3$ 、4… $S = 1:4$ )

### 溝2出土土器 (第78図)

1は須恵器杯蓋である。天井部との境界には明瞭な稜をもち、口縁端部は内傾する面をもつ。端面は凹面となっている。天井部の4分の3程に回転ヘラケズリを施す。口径は12.2cmである。

2、3は須恵器杯身である。

2は、口縁部はやや内傾して立ち上がり、内傾する端面をもつ。端面は平らであるが、下端に沈縁を1本付して段を明瞭なものにしている。底部は丸みを帯びてふくらみ、3分の2程に回転ヘラケズリを施す。口径は10.5cmである。

3は、2の杯身よりも大ぶりで、口縁部の内傾度も高い。口縁端部は内傾する凹面となっている。底部は平らで中央がややへこみ、4分の3程に回転ヘラケズリを施す。口径は11.5cmである。

4は弥生上器壺形土器の底部である。内外面ともハケ調整の上からナデを加え、外面下端は強く横にナデしている。内面ではハケメをほとんどナデしていない。底面にも丁寧にナデを加え

ている。

なお、溝1については44、45ページを参照されたい。

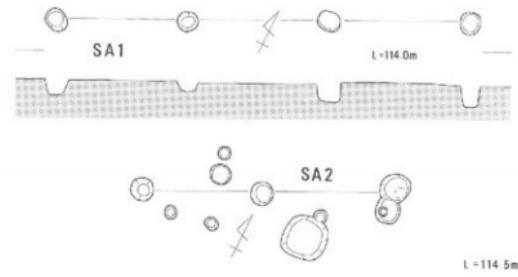
### (5) 柱穴列

#### 柱穴列1 (第79図)

調査区北半中央部、丘陵最高所からやや下った南側斜面寄りに位置する。丘陵最高所との標高差は約1.5mを測り、等高線に平行する。4本の柱穴からなり、両端の柱穴の中心間で6.8mを測る。遺物は出土していない。

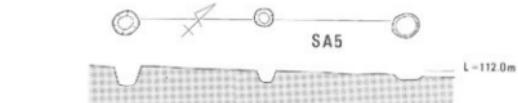
#### 柱穴列 2 (第79図)

調査区北半中央部、丘陵最高所からやや東へ下った平坦部に位置する。この付近は他にも多数の小ピットが検出されている。柱穴列 2 と最高所との標高差は約 0.5 m を測る。尾根筋にはほぼ平行している。3 本の柱穴からなり、両端の柱穴の中心間で 4.5 m を測る。遺物は出土していない。



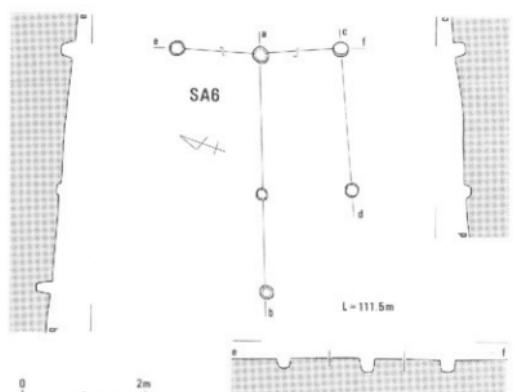
#### 柱穴列 5 (第79図)

調査区南東部、丘陵最高所やや北寄りの平坦部に位置する。3 本の柱穴からなり、両端の柱穴の中心間で 4.6 m を測る。尾根筋にはほぼ平行する。遺物は出土していない。



#### 柱穴列 6 (第79図)

調査区北半中央部、丘陵最高所からやや東へ下った平坦部に位置する。尾根筋との標高差は 1 m 前後である。等高線に平行する 3 本の柱穴からなるが、直交する方向にも組合わせる可能性のある柱穴が 3 個検出されている。遺物は出土していない。

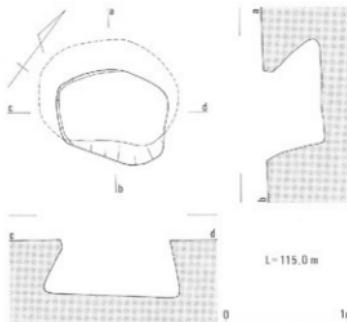


第79図 柱穴列 1、2、5、6 平・断面図 (S - 1:80)

なお、柱穴列 3、4 については 44、45 ページを参照されたい。

#### (6) 土 壤

B 地点で検出された土壤を大きく 3 つの類型に分けることにする。1 つは断面が袋状またはプラスコ状の貯蔵穴と考えられるもの、2 つめは方形のプランをもち、各壁面がほぼ垂直に立ち上がるもの、3 つめは陥れ穴と考えられるものを含むその他の土壤である。それぞれを袋状土壤、方形土壤、その他の土壤とし、以下、各類型ごとに記述していきたい。



第80図 土壌6平・断面図 (S = 1: 40)

### ①袋状土壌

#### 土壌 6 (第80図)

調査区北西部、丘陵最高所やや西寄りの平坦部に位置する。検出面で径90cm×78cm、底面で径約115cm×84cmの楕円形に近いプランで、深さ50cmを測る。断面はやや北西側に片寄った袋状を呈する。遺物は弥生土器片がコンテナ半箱分出土した。

#### 土壌 6 出出土器 (第81図)

1～3は高杯形土器杯部である。1は斜め上方に延びた杯部から「く」の字形に屈曲し、やや内傾して立ち上がる口縁部が作り山されている。口縁部外面には6条の凹線をめぐらせ、端部は内傾する面をもつ。屈曲部外面はやや突出して稜となっている。2、3は斜め上方に延びた杯部から「く」の字形に屈曲し、垂直に立ち上がる口縁部が作り出されている。屈曲部外面はやや突出して稜となる。いずれも口縁端部は丸くおさま、口縁部外面には四凹線をめぐらせる。屈曲部外面は、3は突出して稜となり、2もわずかに突出させている。調整は、2は風化が進みやや不明瞭であるが、1～3のいずれも全面をナデで仕上げている。

4～6は壺形土器である。4、5は、筒状の頸部から外反して斜め上方に開く口縁部をもち、端部は上下に拡張する。いずれも口縁部端面、頸部に凹線をめぐらせ、頸部以上の内面はナデで絞り痕が残る。4は口縁部端面の凹線の上から連続刻み目文を施している。頸部外面はナデ仕上げ、胴部はハケ調整の上からナデで仕上げ、櫛描波状文、櫛描直線文を交互に施している。胴部内面はハケ調整の上からナデで仕上げる。5は口縁部上面に櫛描波状文をめぐらせ、その内側では焼成前に上から下へ小さな円形の穿孔をしている。穿孔は一部不明であるが、12箇所程度である。穿孔部のすぐ内側には低い稜をめぐらせている。外面調整は頸部、胴部ともハケ調整の上から弱くナデを加えているようである。

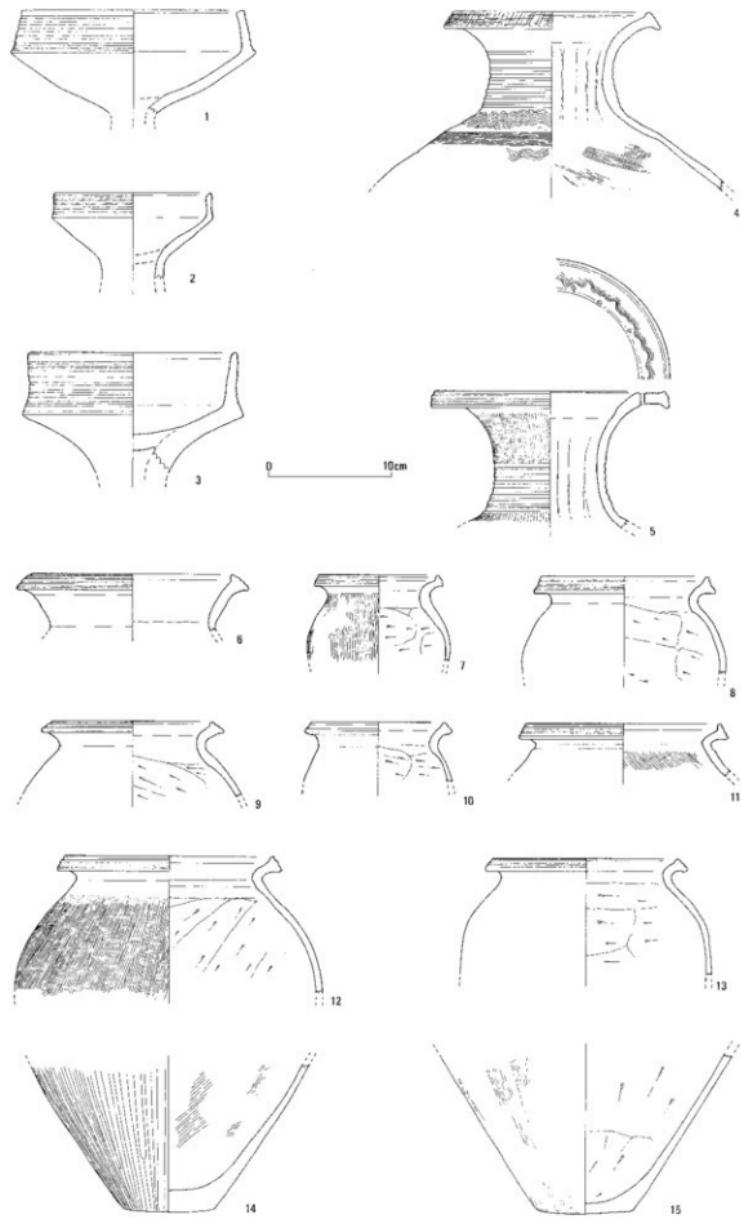
6は頸部から屈曲して直線的に斜め上方に開く口縁部をもち、端部は上下に拡張する。端面には3条の凹線をめぐらせる。内外面ともナデである。

7～13は壺形土器である。いずれも頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。11は特に鋭く外反する。いずれも端部は上下に拡張または肥厚し、端面は凹面となるか(10)、2～3条の凹線をめぐらせる。外面調整は8～10、13はナデ仕上げ、7、12はハケ調整である。内面は、11がハケ調整であるほかは、いずれも頸部付近までヘラケズリで仕上げる。

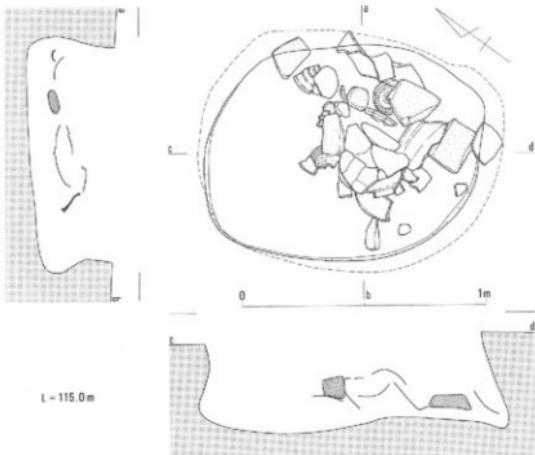
14、15は底部である。14は外面を縱方向のヘラミガキで仕上げ、内面は一部にハケ調整がみられるが、主にナデによって仕上げているようである。15は風化が進んでいるが、外面はハケ調整を施し、ナデによって仕上げているようである。内面はヘラケズリである。外面の一部にススの付着がみられる。

#### 土壌 7 (第82図)

調査区北西部、丘陵最高所付近の平坦部に位置する。検出面で径115cm×88cm、底面では径約124cm×100cmの楕円形に近いプランで、深さ50cmを測る。断面はフラスコ状を呈し、底面はやや凹凸がある。遺物は弥生土器片がコンテナ半箱分出土した。土器は一括して廃棄された状況を示す。



第81圖 土壤6出土土器 (S. 1:4)



第82図 土壌7平・断面図 (S = 1:20)

#### 土壤7出土土器 (第83図)

1～3は高杯形上器脚部である。いずれも外面部は数段の櫛描文で加飾される。脚裾部には1は粗雑な縦方向の櫛描文を、2、3は縦方向の箆描文を施している。3の脚裾部の箆描文は5方向に等間隔に幅2cm程の空白部を設けている。また3は竹管状工具による円形刺突文を縦一列の4方向に施す。この円形刺突文は下側3個までは櫛描文上とその中间部の両方に施

され、それより上では中间部にだけ施される。最下部のものは貫通している。1～3のいずれも脚端部は上方に拡張する。端面は1はわずかに凹面となり、2、3は1条の明瞭な凹線をめぐらせる。外面はいずれもナデ、内面は、1、3は裾部のみヘラケズリで中位以上に絞り痕を残し、2はすべてヘラケズリである。

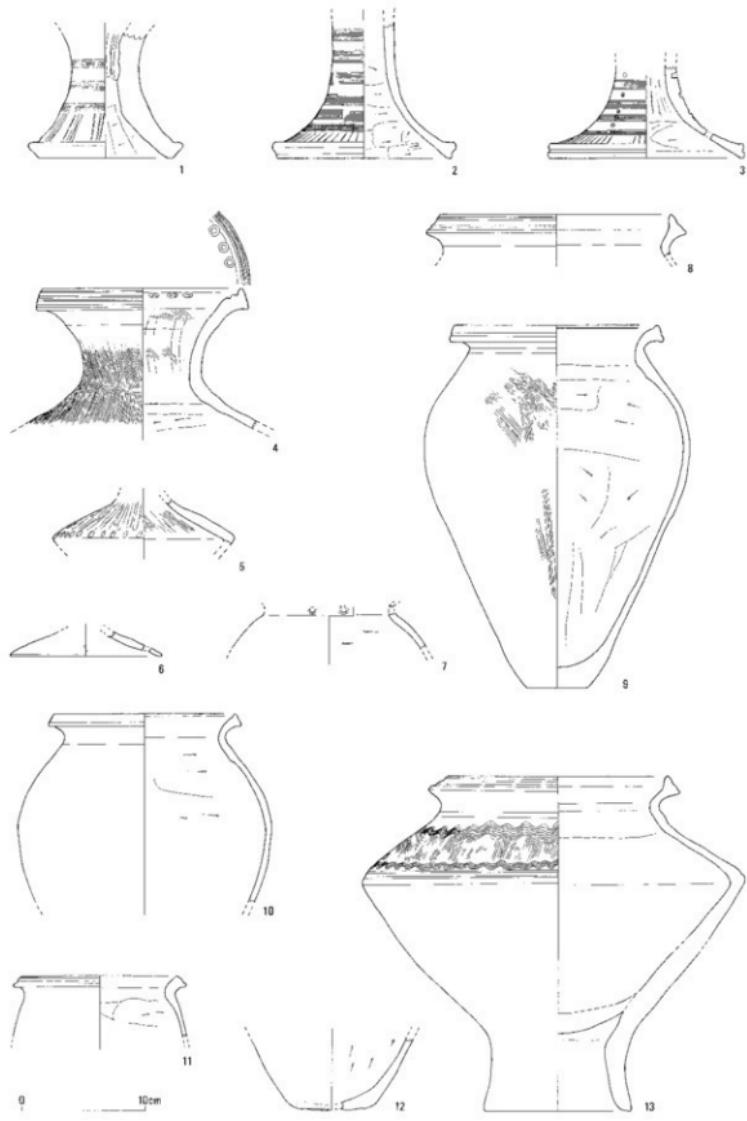
4、5、7は壺形土器である。4は、胴部から外反しながら斜め上方に開く口縁部をもち、端部は上下にやや拡張する。端面には4条の凹線をめぐらせる。口縁部の上面には3個1組の竹管状工具による円形刺突文を90度ごとに施している。胴部、頭部の外面はハケ調整を施し、頭部上端では横にナデ消している。口縁端部付近は内外面ともナデである。頭部内面はハケ調整の上から粗いナデを加え、胴部内面はヘラケズリである。5は胴部がそろばん玉状に張り出す器形である。最大径部直上には米粒状の連続刺突文を施す。それより上、頭部までは縦方向のヘラミガキである。内面はハケ調整で最大径部付近は強く横にナデを加えている。頭部は非常に細い。7は胴部上部である。頭部下端付近に2個の円形の穿孔を施している。風化が進み、調整は判然としないが、内面はヘラケズリのようである。

6は蓋形土器である。端部付近に円形の穿孔を行っている。外面はナデによる仕上げ、内面は風化のため調整は明らかでない。

8～11は甕形土器である。いずれも頭部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。いずれも端部は上下に拡張または肥厚し、端面は凹面となるか(10)、1～3条の凹線をめぐらせる。外面調整は9はハケ調整、風化のため判然としないが10もハケ調整のようである。11の外面はナデである。いずれも口縁部は内外面ともナデ、内面は頭部までヘラケズリで仕上げる。

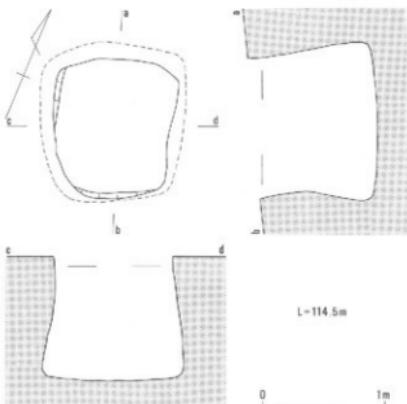
12は底部である。風化が進んでいるが、内面はヘラケズリのようである。

13は台付鉢形土器である。胴部がそろばん玉状に張り出す器形である。頭部から「く」の字形に外反する口縁部をもち、端部は上下に拡張する。端面には2条の不明瞭な凹線をめぐらせる。脚部は筒状でわずかに裾開きとなる。胴部最大径部直上には2条の凹線をめぐらせ、それより上、頭部までに2段に



第383圖 土壤7出土土器 ( $S = 1:4$ )

櫛描波状文をめぐらせていて、口縁部及び胴部内面上部はナデ、胴部外面の最大径部以上はハケ調整、最大径部以下は内外面とも風化のため調整は明らかでない。



第81図 土壌8平・断面図 ( $S=1:40$ )

#### 土壌8 (第84図)

調査区北西部、丘陵最高所付近の平坦部や南寄りに位置する。検出面で南北115cm、東西102cm、底面で南北約130cm、東西118cmの台形に近いプランで、深さ106cmを測る。断面はフ拉斯コ状を呈するが、壁面の立ち上がりは急角度である。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋2袋分、大型蛤刃石斧1点(第122図1)が出土した。

#### 土壌8出土土器 (第85図)

1~6は高杯形土器である。1~3は杯部である。いずれも浅めの杯部から

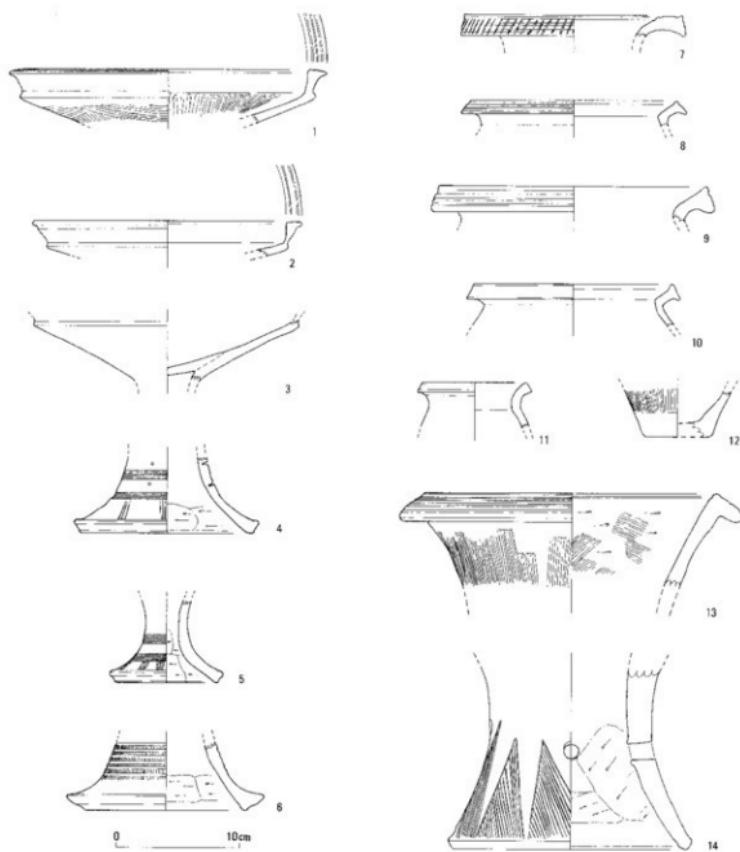
「く」の字形に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ器形である。いずれの屈曲部も突出して稜を形成している。1、2の口縁部はやや外反気味に立ち上がり、端部は主に外方に拡張または肥厚する。端面には2条~3条の凹線をめぐらせていて、1は口縁部はナデ、杯部は内面は放射状のヘラミガキ、外面は斜方向のヘラミガキで縁辺部はその上から横方向のヘラミガキを加えている。2の調整は風化のため明らかでない。3は底部を円盤充填によってふさいでいる。調整は風化のため明らかでない。4~6は脚部である。脚端部は、4はやや肥厚させ、3、4とも外方または上方にやや拡張する。端面はいずれも凹面となる。3、4は外面に2段の櫛描文をめぐらせ、裾部には4は櫛文を、5は櫛描文を施している。4は櫛描文の間に先の尖った棒状の工具による円形刺突文を施す。6は脚端部は外方または上方に大きく拡張する。外面はハケ調整を施し、下位はナデによって仕上げている。外面には明瞭な凹線をめぐらせていて、4~6のいずれも内面はヘラケズリであるが、6は裾部のみでそれより上はナデである。

7は壺形土器である。外反して大きく上方に開く口縁部をもち、端部は上下にやや拡張する。口縁部上面は、端から2cmのところに凹線状の段をめぐらせ、平坦な面を形成している。端面には3条の凹線をめぐらせ、その上から斜方向の刻み目文を連続して施している。

8~11は壺形土器である。いずれも頭部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。8、10は特に鋭く外反する。いずれも端部は上下に拡張または肥厚し、端面は凹面となるか(11)、2~3条の凹線をめぐらせる。10の端面は風化のため明らかでない。口縁部はいずれもナデであるが、胴部の調整が明確に判別できるものはない。11の口縁部下面にはススが厚く付着している。

12は底部である。外面はハケ調整で下端を横にナデ消す。内面はナデによって仕上げているようである。

13、14は壺台形土器である。13は口縁部で、端部は屈曲して下方に垂れ下がる。端面には5条の浅い凹線をめぐらせる。胴部の外面はハケ調整、内面はハケ調整であるが砂粒の移動がみられる。14は胴部、



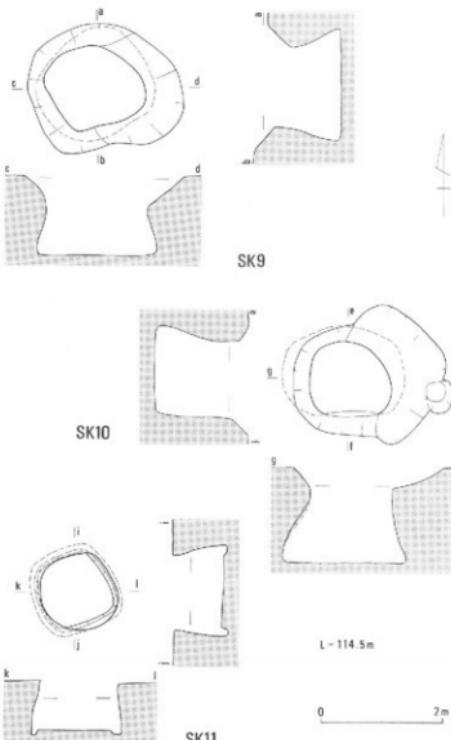
第85図 土壌8出土土器 (S : 1 : 4)

脚部である。端部は薄くなり、端面は内側、外側の2面があり、その境界は稜をなしている。外面には下部に斜線で埋めた鋸歯文をめぐらせる。また中位には約90度ごとに円形透かし孔を穿っている。円形透かし孔は焼成前に外面から内面へ穿孔されている。外面はナデ、内面は下端部と円形透かし孔より上はナデ、その間はヘラケズリである。

土壤9～13は調査区北西部、丘陵最高所付近の平坦部に位置する。土壤9～11は南北に並び、また土壤11から東へ直角な方向へは土壤12、13がほぼ同じ間隔で連なっている。各土壤の間隔は中心間で、土壤9、10間が4.2mとやや長い他は、3.3m～3.5m程ではほぼ一定である。

#### 土壤9 (第86図)

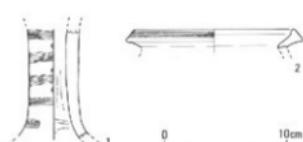
断面フラスコ状を呈するが、くびれ部以上は大きく上に開く。検出面で最大径255cm、くびれ部最大



第86図 土壌9～11平・断面図 (S = 1 : 80)



第87図 土壌9出土土器 (S = 1 : 4)



第88図 土壌11出土土器 (S = 1 : 4)

径165cm、底面で最大径190cmを測り、深さ140cmを測る。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋1袋分、石鐵1点（第122図11）が出土した。

#### 土壌9出土土器（第87図）

1は高杯形土器脚部である。脚端部は上下に抵張する。端面には2条の浅い凹線をめぐらせる。外面に3段の櫛描文をめぐらせ、脚部には1mm間隔で2本が1組の箒描文を施している。また、破片のため全容は明らかでないが、櫛描文の間には、小さな円形透かし穴を穿孔している。外面はナデ、内面は破片上位と下位はヘラケズリであるが、中位はナデである。

2は底部である。外面はハケ調整で下端を一部横にナデしている。内面はヘラケズリである。内面底部付近には一部におこげ状の炭化物が付着している。

#### 土壌10（第86図）

断面はフラスコ状を呈するが、くびれ部以上は大きく上に向く。上面のプランに対し、底面が西から北の方向にややずれている。東部には小ピットが重複しているが、この土壌との関係については明らかでない。検出面で最大径250cm、くびれ部最大径150cm、底面で最大径205cmを測り、深さ155cmを測る。遺物は出土していない。

#### 土壌11（第86図）

断面は袋状を呈するが、壁面の立ち上がりはやや角度である。底面の壁際には深さ5cm～10cm程の溝がめぐっている。検出面で最大径65cm、底面で最大径80cmを測り、深さ85cmを測る。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋1袋分、石器未製品1点（第122図5）、

サヌカイトチップ1点が出土した。

#### 土壤11出土土器（第88図）

1は高杯形土器脚部である。上下を欠いている。外面に5段の櫛描文をめぐらせ、櫛描文の間には竹管状の工具による円形刺突文を施している。外面はナデで、内面には絞り痕を残す。

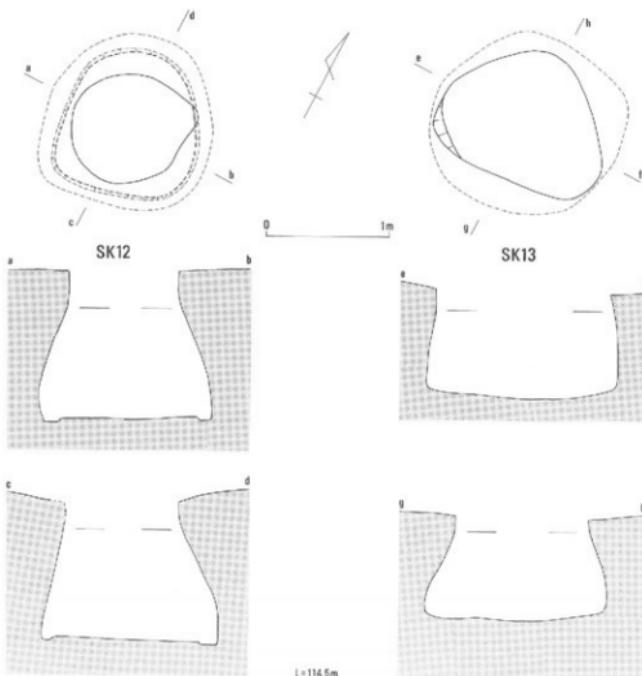
2は壺形土器口縁部である。頸部から「く」の字形に外反する器形である。端部は上下に拡張し、端面には3条の浅い凹線をめぐらせる。調整はナデで、口縁下面にはススの付着がみられる。

#### 土壤12（第89図）

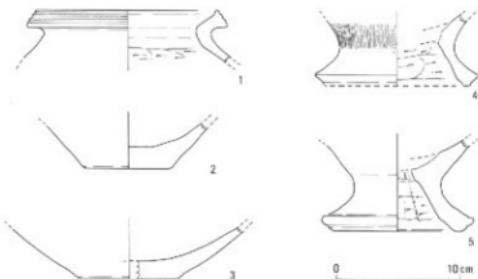
断面フラスコ状を呈する。底面の壁際には深さ3cm程の浅い溝がめぐっている。検出面で最大径106cm、底面で最大径155cmを測り、深さ120cmを測る。遺物は、弥生土器小片若干、石器未製品1点（第122図4）が出土した。

#### 土壤13（第89図）

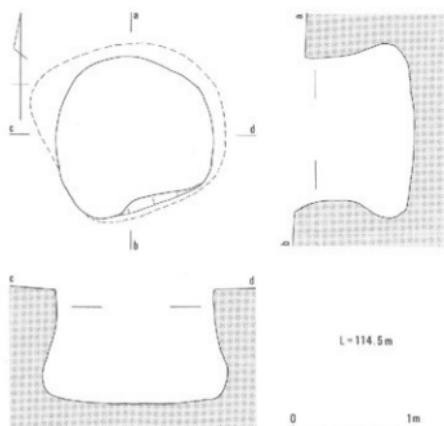
断面は袋状を呈するが、東西の壁面の立ち上がりはやや急角度である。検出面で最大径140cm、底面



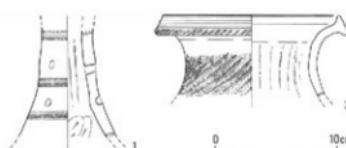
第89図 土壌12、13平・断面図 (S = 1:40)



第90図 土壌13出土土器 ( $S = 1:4$ )



第91図 土壌14平・断面図 ( $S = 1:40$ )



第92図 土壌14出土土器 ( $S = 1:4$ )

で最大径160cmを測り、深さ90cmを測る。遺物は弥生土器片が小型のポリ袋1袋分出土した。

#### 土壌13出土土器（第90図）

1は壺形土器である。頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。端部は上下に拡張し、端面には3条の凹線をめぐらせる。口縁部、胴部外面はナデ、胴部内面はヘラケズリである。

2、3は底部である。いずれも外面はナデで仕上げるようである。内面調整は風化のため明らかでない。

4、5は胸部である。台付鉢形土器と思われる。いずれも脚端部は下方に高台状に拡張し、端面は4は凹面となり、5は1条の凹線をめぐらせる。外面調整は4は鉢部はハケ調整で脚部はナデ、5はどちらもナデである。4の内面は、脚部は全面ヘラケズリ、鉢部は残存部分が少ないが、ナデで仕上げるようである。5の内面は、脚部は下端部はナデ、上部はヘラケズリで、鉢部はナデである。4、5とも鉢部底面は円盤充填の手法が用いられている。

#### 土壌14（第91図）

断面はフラスコ状を呈する。検出面で最大径140cm、底面で最大径165cmを測り、深さ100cmを測る。遺物は弥生土器片が小量のポリ袋1袋分出土した。

#### 土壌14出土土器（第92図）

1は高杯形土器脚部である。上下を欠いている。外面に3段の櫛描文をめぐらせ、櫛描文の間には3方向に小さな円形透かし孔を穿孔している。穿孔は外面から内面へ向けて行われ、確認できる6

個の透かし孔のうち、2個は貫通していない。外面はナデ、内面には絞り痕を残し、下端部はヘラケズリである。

2は壺形土器である。筒状の頸部から外反して開く口縁部をもち、端部は上下に拡張する。端面には3条の凹線をめぐらせ、下端部にハケメ原体による斜方向の刻み目文を連続して施している。頸部外面はハケ調節で上端部をナデ消し、中位にはハケメ原体による斜方向の刻み目文を連続してめぐらせていく。口縁部、頸部内面はナデである。

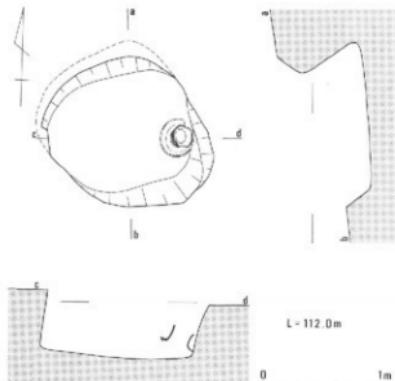
3は底部である。外面はナデによって仕上げ、内面は風化が進んでいるが、底面付近に多数の指頭圧痕が認められる。

#### 土壤24（第93図）

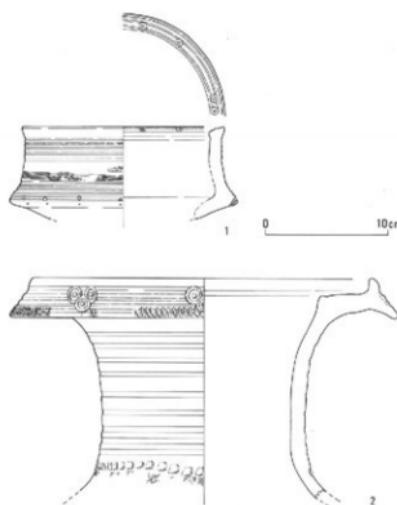
調査区北半中央部、丘陵最高所の南東側斜面に位置する。丘陵最高所との標高差は約3mを測る。段状遺構3、4、5と重複しているが、時期的な前後関係は明らかでない。土壤の断面は片寄ったフラスコ状を呈する。上面のプランに対し、底面が山側にずれている。検出面で最大径145cm、底面で最大径130cmを測り、深さは最大で75cmを測る。遺物は弥生土器片コンテナ半箱分が出土した。第94図2の壺形土器口縁部は、東寄りの底面からやや浮いた状態で、口縁を下にした状況で出土した。

#### 土壤24出土土器（第94図）

1、2は壺形土器である。1は、斜め上方に延びた頸部上位から「く」の字形に屈曲し、垂直に立ち上がる口縁部を作り出されている。屈曲部外面は突出して稜となっている。口縁端部は両側にやや拡張し、やや内傾する端面をもつ。端面には3条の凹線をめぐらせ、さらに竹背状工具による円形刺突文で加飾している。口縁部外面には上位、下位にそれぞれ数条の凹線をめぐらせ、中位にはやや粗雑な櫛描文をめぐらせている。口縁部下端の突出部末端附近には、3cm～3.5cmの間隔で径1mm～2mmの小さな円形の穿孔が行われている。内外面とも

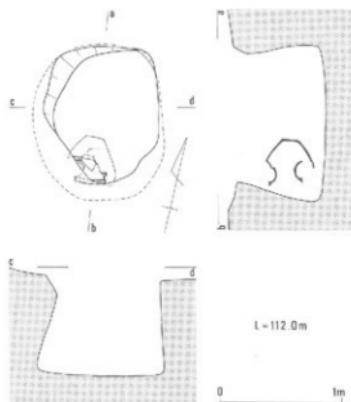


第303図 土壤24平・断面図 ( $S = 1:40$ )



第304図 土壤24出土土器 ( $S = 1:4$ )

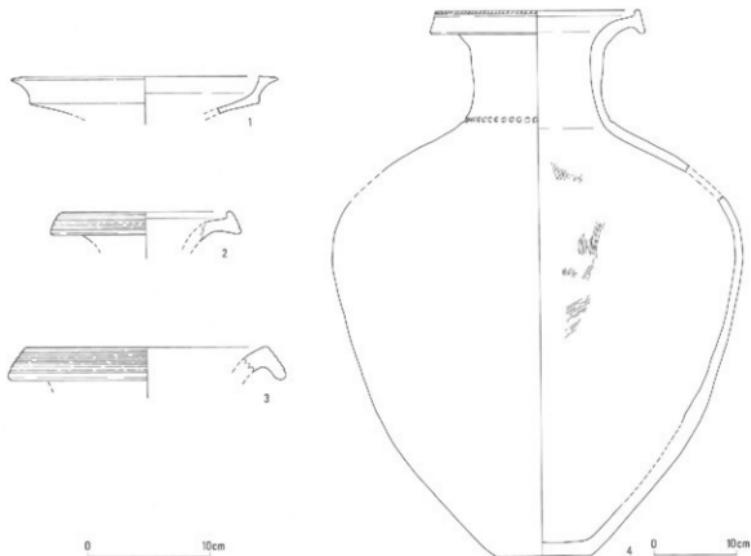
ナデによる仕上げである。胎土はやや粗く、2 mm～5 mmの砂粒の混入が目立つ。2は、筒状の頸部から外反して水平に開く口縁部をもち、端部は上下に拡張する。端面には4条の凹線をめぐらせ、6方または7方に3個1組の円形浮文によって加飾している。円形浮文には竹管状工具による円形刺突文が施され、同心円状になっている。端面下端には斜方向の刻み目文を連続して施している。頸部上端と口縁部の境界はやや突出させて稜になっている。頸部外面には凹線をめぐらせ、下端部には半月形の連続刺突文をめぐらせている。頸部以上は外面ともナデによる仕上げ、胴部外面は上端にハケ調整が一部残るが、上からナデを加えて仕上げている。



第95図 土壌25平・断面図 (S=1:40)

#### 土壤25(第95図)

調査区北半中央部、丘陵の南側斜面に位置する。丘陵最高所との標高差は約3 mを測る。段状構造8の壁溝内にあるが、詳細な時期的前後関係は明らかでない。土壤の断面はフラスコ状を呈する。上面のプランに対し、底面がやや谷側にずれている。検出面で最大径115cm、底面で最大径130cmを測り、深さは最大で83cmを測る。遺物は弥生土器片コンテナ半箱分が出上した。第96図4の壺形土器は南寄りの底面からやや浮いた状態で、頸部以



第96図 土壌25出土土器 (1～3…S=1:4、4…S=1:6)

上が胴部に入り込む状況で出土した。

#### 土壤25出土土器（第96図）

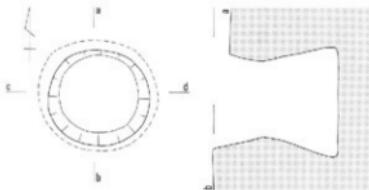
1は高杯形土器杯部である。浅めの杯部から「く」の字形に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。屈曲部はやや突出して稜となっている。口縁端部は外方に拡張する。風化のため調整は明らかでない。

2、4は壺形土器である。2は筒状の頭部から外反して開く口縁部をもつ器形と考えられる。口縁端部は上方に拡張し、端面には4条の凹線をめぐらせる。調整は内面、外面ともナデである。4は特に大型のものである。胴部の張りはやや高い位置にあり、筒状の頭部から外反して開く口縁部をもつ。口縁端部は上下に拡張し、端面には2~3条のごく浅い凹線をめぐらせるようであるが、風化のため明瞭には観察できない。口縁部端面上端には、斜方向の連続刻み目文をめぐらせ、頭部下端には半月形の連続刺突文をめぐらしている。全体に風化が進み、調整等が明らかな部分は少ない。観察できる部分では、口縁部、頸部内面、底部外面はナデであり、頸部外面はハケ調整の上からナデを加えるようである。また胴部内面では一部にハケ調整がみられる。

3は器台形土器口縁部と考えられる。端部は下方に垂れ下がり、端面には5条の凹線をめぐらしている。内外面ともナデによって仕上げる。

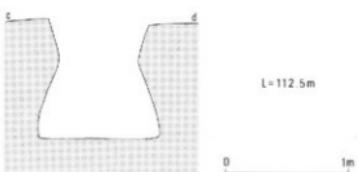
#### 土壤33（第97図）

調査区東部中央、丘陵上の西側斜面寄りに位置する。土壤の断面はフラスコ状を呈する。検出面で最大径82cm、くびれ部で最大径65cm、底面で最大径99cmを測り、深さは最大で104cmを測る。遺物は弥生土器片若干が出土した。



#### 土壤33出土土器（第98図）

1、2は高杯形土器である。1は杯部である。浅めの杯部から緩い「く」の字形に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ。屈曲部はわずかに突出して稜となっている。口縁端部は外方に拡張する。端面には3条の凹線をめぐらしている。風化のため調整は明らかでない。2は脚部である。脚端部は上方に拡張する。外面には、破片上位に3条の凹線をめぐらせる。外面はナデ、内面は擦部はヘラケズリ、上部はナデによって仕上げる。

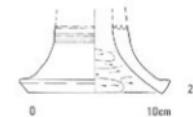


第97図 土壌33平・断面図 (S = 1: 40)

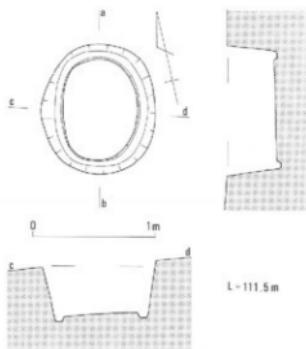


#### 土壤34（第99図）

調査区東部中央、丘陵上の西側斜面寄りに位置する。円形に近いプランであるが、壁面はやや外傾し、袋状にはならない。底面の僅際には深さ3cm前後の浅い溝がめぐるが、土壤11、12が同様のものをもち、時期的にも一致することから、この土壤もそれら



第98図 土壌33出土土器 (S = 1: 4)

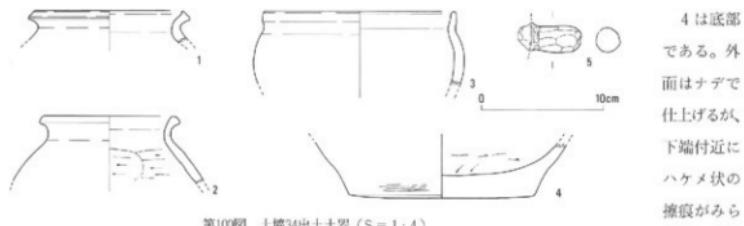


第99図 土壌34平・断面図 (S = 1 : 40)

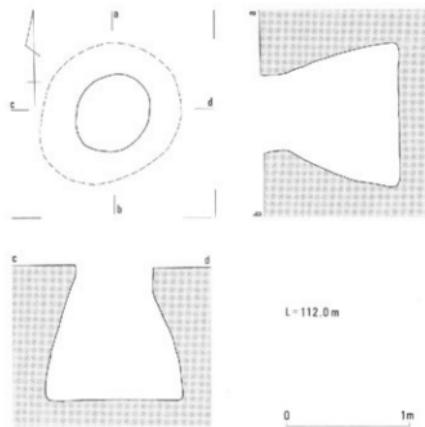
と同じ部類に入るるものと考えた。検出面で最大径106cm、底面で最大径95cmを測り、深さは最大で50cmを測る。遺物は弥生土器片が小型のポリ袋1袋分出土した。

#### 土壌34出土土器（第100図）

1～3は甕形上器である。1、2は頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。端部は、1は上下にやや拡張し、2は肥厚している。端面は、1は四面となり、2は角の丸い凸面となる。1は内外面ともナデ、2は口縁部、胴部外面はナデ、胴部内面はヘラケズリである。3は張りの弱い胴部から、緩く屈曲して直立に立ち上がる口縁部をもつ。口縁部の下側は強く横にナデを加え、四面となっている。内外面ともナデで仕上げる。



第100図 土壌34出土土器 (S = 1 : 4)



第101図 土壌35平・断面図 (S = 1 : 40)

はヘラケズリである。

5は把手である。断面円形の棒状を呈し、図の左端部分が器面に差し込まれて固定されるようになっている。

#### 土壌35（第101図）

調査区東部中央、丘陵上の東側斜面寄りに位置する。土壌の断面はフラスコ状を呈する。検出面での最大径は70cm、底面で最大径125cmを測り、深さは110cmを測る。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋1袋分、安山岩剥片1点、2次調整のある剥片1点（第122図9）、石鐵木製品1点（第122図13）が出土した。

#### 土壌35出土土器（第102図）

1、2は高杯形土器である。1は杯部である。浅めの杯部から「く」の字形に屈曲して立ち上がる口

縁部をもつ器形と考えられる。屈曲部はやや突出して稜となっている。口縁端部は外方に拡張し、端面には2条の凹線をめぐらせている。風化が進むが、外面はナデのようである。内面調整は明らかでない。2は胸部である。上下を欠いている。外面に3段の櫛描文をめぐらせている。外面はナデで、内面に絞り痕を残す。

3、4は壺形土器である。いずれも頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。いずれも端部は上下に拡張し、端面には、3は2条、4は4条の凹線をめぐらせる。3、4とも口縁部はナデ、胴部内面は、頸部までへラケズリで仕上げる。

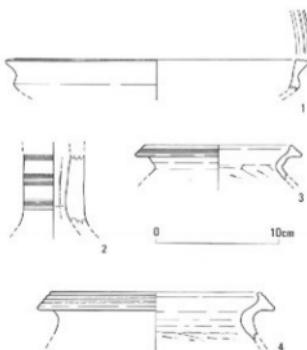
## ②方形土壙

### 土壙23（第103図）

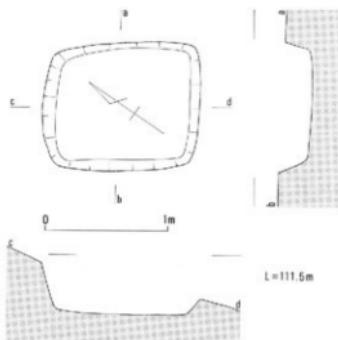
調査区北半中央部、丘陵最高所の南東側斜面に位置する。丘陵最高所との標高差は約3.5mを測る。上部は大半が流失していると思われ、袋状土壙の可能性もある。寸詰まりの長方形プランで、長辺方向の主軸は等高線に直交する。壁面はいずれもやや外傾する。底面の長辺方向で最大110cm、短辺方向で最大90cmを測り、深さは最大で40cmを測る。遺物は、弥生土器片が小型のボリ袋1袋分出土した。

### 土壙23出土土器（第104図）

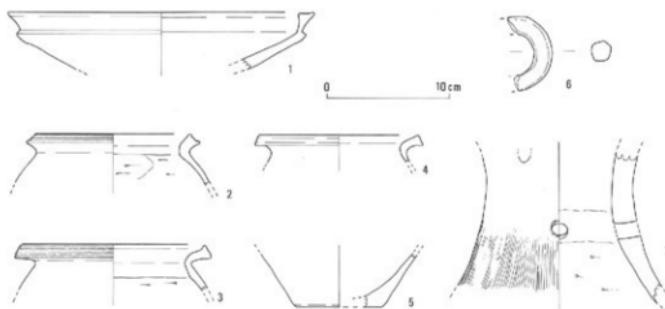
1は高杯形土器杯部である。浅めの杯部から「く」の字形に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ器形である。屈曲部は突出して稜となっている。口縁端部は



第102図 土壙35出土土器（S=1:4）

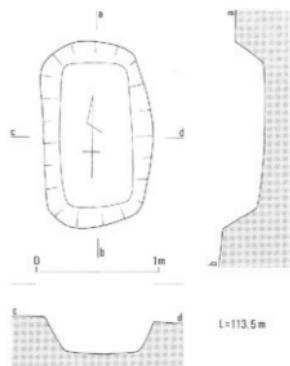


第103図 土壙23平・断面図（S=1:40）



第104図 土壙23出土土器（S=1:4）

外方に肥厚、拡張する。風化が進むが、端面には1~2条の凹線をめぐらせていているようである。杯部内面はナデであるが、他の部分の調整は明らかでない。



第105図 土壌26平・断面図 ( $S = 1:40$ )

2~4は壺形土器である。いずれも頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。いずれも端部は、3は上下に、2、4は主に下方にやや肥厚、拡張する。端面には1~3条の凹線をめぐらせる。口縁部はいずれもナデ、2、3は胴部外面をナデ、内面は頸部までヘラケズリで仕上げる。

5は底部である。風化のため調整等は明らかでない。

6は把手である。断面は鶴丸方形を呈する。

7は器台形土器胴部である。約90度ごとに2段に円形透かし孔を穿っている。上下の透かし孔は縦1列にはそろわない。穿孔は焼成前に行われている。外面下部はハケ調整であるが、上位は風化のため明らかでない。内面下部はヘラケズリ、上位は指でナデしている。

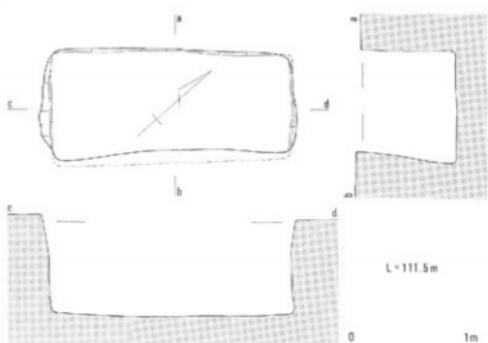
#### 土壤26 (第105図)

調査区北半中央部、丘陵上の北側斜面寄りに位置する。鶴丸の長方形プランで、長辺方向の主軸は尾根筋にほぼ直交する。壁面はいずれもやや外傾する。底面の長辺方向で最大118cm、短辺方向で最大60cmを測り、深さは最大で33cmを測る。遺物は出土していない。

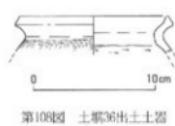
#### 土壤27 (第106図)

調査区北東部、鞍部上の西側谷寄りに位置する。住居址14と重複しているが、埋土が住居址の埋土を切っており、こちらの方が新しい。やや不整な長方形プランで、長辺方

向の主軸は尾根筋にほぼ平行する。壁面はいずれもやや外傾する。底面の長辺方向で最大78cm、短辺方向で最大40cmを測り、深さは最大で47cmを測る。遺物は出土していない。



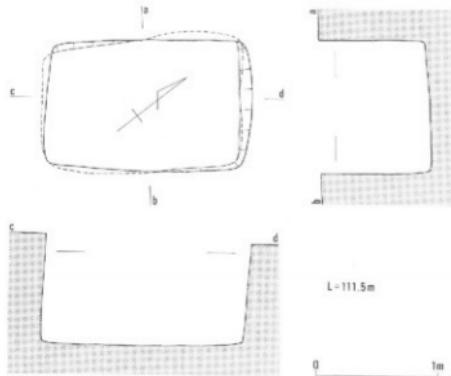
第106図 土壌27平・断面図 ( $S = 1:40$ )



第108図 土壌36出土土器 ( $S = 1:4$ )

土壤36（第107図）

調査区東部中央、丘陵上の西側斜面寄りに位置する。細長い長方形プランで、長辺方向の主軸は尾根筋に平行する。壁面はほぼ垂直かやや内傾し、短辺はいずれも上部で傾斜が緩くなる。底面の長辺方向で最大198cm、短辺方向で最大94cmを測り、深さは最大で82cmを測る。遺物は、弥生土器片若干が出土した。

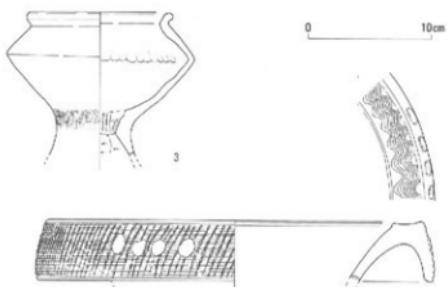
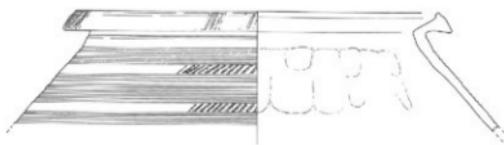


土壤36出土土器（第108図）

甕形土器である。頸部から「く」字形に外反する口縁部をもち、端部は、上下にやや拡張する。端面は平坦な面になっている。口縁部はナデ、胴部外面はハケ調整で、内面は頸部までヘラケズリで仕上げる。口縁部下側にはススが付着している。口縁部下側にはススが付着している。

土壤38（第109図）

調査区東部中央、丘陵上の北側斜面寄りに位置する。長方形プランで、長辺方向の主軸は尾根筋にほぼ平行する。壁面はほぼ垂直で、北東側短辺は上部で傾斜が緩くなる。底面の長辺方向で最大166cm、短辺方向で最大112cmを測り、深さは最大で92cmを測る。遺物は、弥生土器片が小型のボリ袋2袋分出土した。



土壤38出土土器（第110図）

1は甕形土器である。頸部から「く」字形に鋭く外反する口縁部をもつ。端部は上下に拡張し、風化のため判然としないが、端面には斜方向の刻み目文を連続して施しているようであ

第110図 土壌38出土土器（S = 1:4）

る。胴部はそろばん玉状に張り出す器形と考えられる。胴部外面は、ハケメ原体による斜方向の連続刻み目文、凹線文を交互に施している。内面は風化が進んでおり、調整は不明瞭であるが、指による整形痕がみられる。

2は底部である。外面はハケ調整、内面は風化が進んでいるが指による整形痕がみられる。

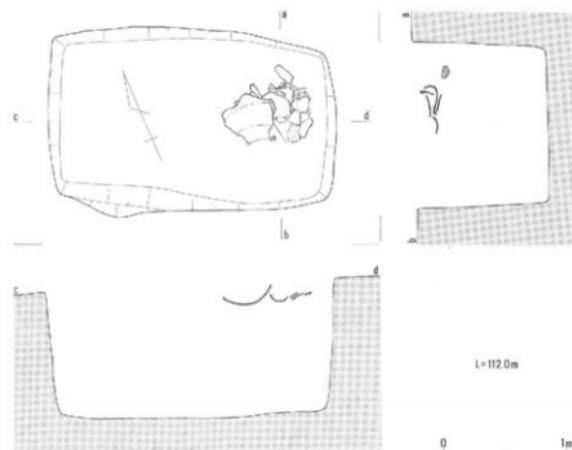
3、4は台付鉢形土器である。3は胴部がそろばん玉状に張り出す器形である。頸部から「く」の字形に外反し、端部を丸くおさめる短い口縁部をもつ。胴部、底面の成形には絞り、円盤充填の手法が用いられている。胴部、脚部の外面はナデ仕上げ、脚上部ではハケ調整の上からナデを加えている。口縁部及び胴部内面は風化のため調整等は明らかでない。胴部内面はヘラケズリである。4は脚部である。裾は「ハ」の字形に開き、端部は平らな面となっている。外面はナデによって仕上げているようである。内面調整は明らかでない。

5は器台形土器である。口縁端部は屈曲して大きく下方に垂れ下がるが、上方にもわずかに拡張する。端面には10条の明瞭な凹線をめぐらせ、その上から斜方向の連続刻み目文、円形浮文で加飾する。円形浮文は4個1組で、5方向に施される。胴部内面上端には低い段をつけて口縁部上面と区画し、弱い凹面となった口縁部上面には柳描波状文を施している。胴部は、外面はハケ調整、内面はナデである。

#### 土壤39（第111図）

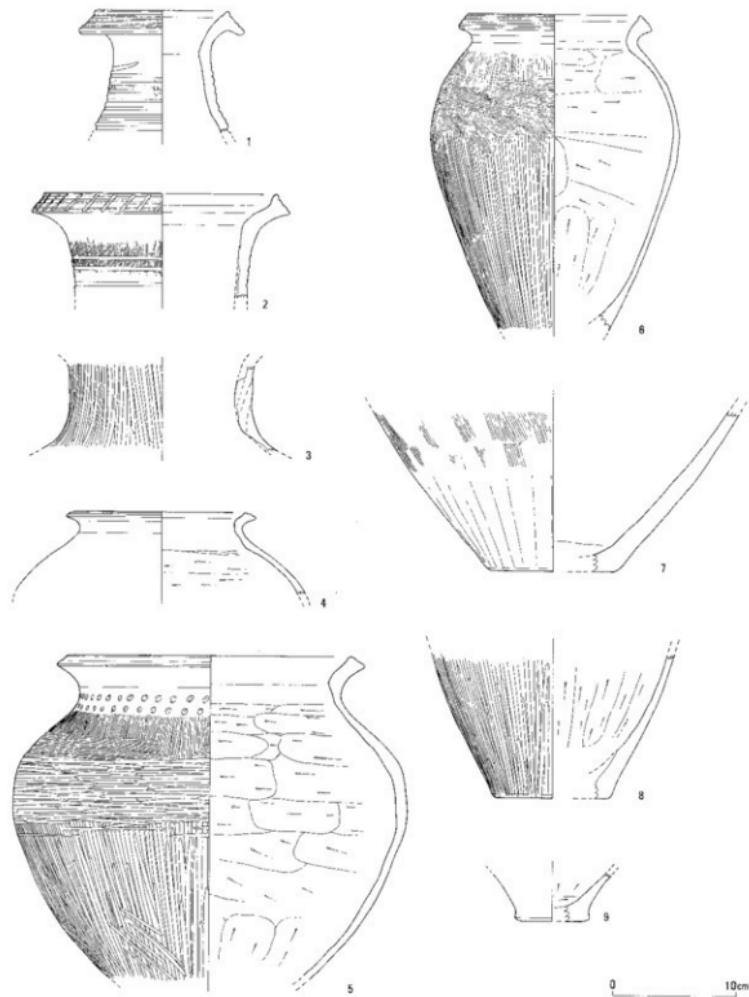
調査区東部中央、丘陵上平垣部のやや西側斜面寄りに位置する。長方形プランで、長辺方向の主軸は尾根筋に直交する。壁面はほぼ垂直である。底面の長辺方向で最大219cm、短辺方向で最大133cmを割り、深さは最大で114cmを測る。遺物は、弥生土器片がコシナ1箱半出土した。遺物は、土壤東部の底面から約1m浮いた位置から、一括して廃棄された状況で出土した。

#### 土壤39出土土器（第112図、第113図）



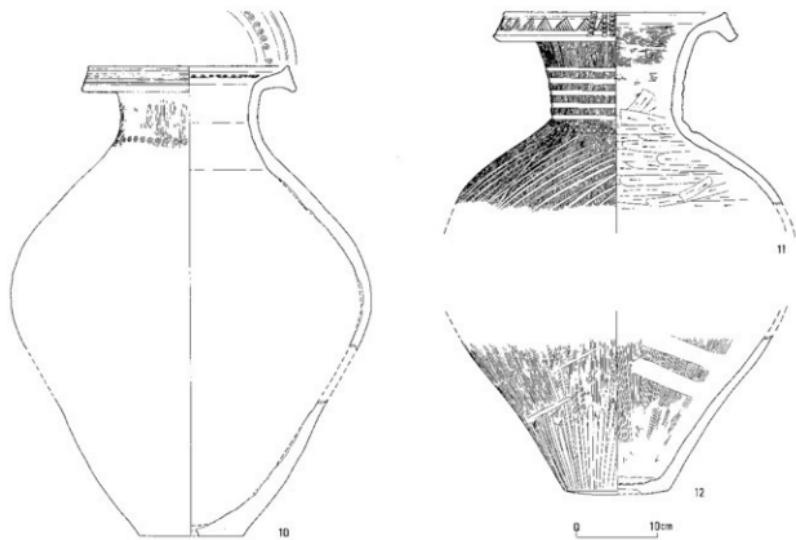
第111図 土壌39平・断面図 (S=1:40)

1～5、10、11は壺形土器である。1、2は、筒状の頸部から外反して斜め上方に開く口縁部をもち、頸部は1は下方に大きく拡張し、2は上方に拡張する。いずれも口縁部端面には凹線をめぐらせ、2は連続刻み目文で加飾している。頸部にはいずれも凹線をめぐらせるが、1では螺旋状に施される。1の口縁部、内面は



第112図 上塙39出土土器(1) ( $S = 1:4$ )

ナデ、頭部外面はハケ調整をナデ消している。2は口縁部、内面はナデ、頭部外面はハケ調整をナデ消すが、上部はハケメが残る。3は筒状の頭部である。外面は縱方向のヘラミガキ、内面調整は剥離のため明らかでない。4、5は短い頭部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。端部はいずれも下端を外方にやや拡張し、上端もわずかにつまみ上げる。端面は4は2条の凹線をめぐらせ、5は浅い凹面となる。5の頭部には楕円形の連続剥突文が2段にめぐらしている。外面調整は、4は風化のため明らかで



第113図 上塙跡出土土器(2) (S=1:6)

ない。5は、胴部最大径より上、頸部までは縦方向のハケ調整の上から下位の一部に横方向のハケ調整を加え、頸部以上はナデで仕上げる。胴部最大径より下は縦方向のヘラミガキで下位の一部に斜方向のヘラミガキを加える。胴部最大径部は最後に仕上げられ、横方向のヘラミガキである。内面は、4、5とも頸部付近までヘラケズリで仕上げる。10、11は大型のもので、筒状の頸部から外反して水平方向に開く口縁部をもつ。10は、口縁端部は上下に拡張し、端面には5~6条の凹線をめぐらせる。風化のため明瞭には観察できないが、端面下端には、斜方向の連続刻み目文をめぐらせるようである。口縁部上面、頸部下端には竹管状工具による連続刺突文をめぐらしている。胴部の張りは中程よりやや上有る。全体に風化が進み、調整等が明らかな部分は少ない。観察できる部分では、口縁部、胴部上位はナデであり、頸部外面は一部にハケ調整がみられる。11は口縁端部を下方に大きく拡張し、上方にもややつまみ上げる。端面には両端に浅い凹線をめぐらせ、内部を斜線で埋めた鰯齒文がめぐる。またその上から、縦断面が波状の細い粘土帯を3本1組で縦に貼り付け、加飾している。粘土帯の波状の成形は、ハケメ原体による刺突でなされている。口縁部は全周のうち3分の2が遺存しているが、粘土帯による加飾は1カ所のみである。頸部には5条の凹線をめぐらせ、胴部上端には半月形の連続刺突文がめぐる。口縁部はナデ、頸部外面はハケ調整、胴部外面はハケ調整の上から斜方向のヘラミガキをまばらに施している。内面は、頸部はハケ調整の上から一部にナデを加え、胴部はヘラケズリである。

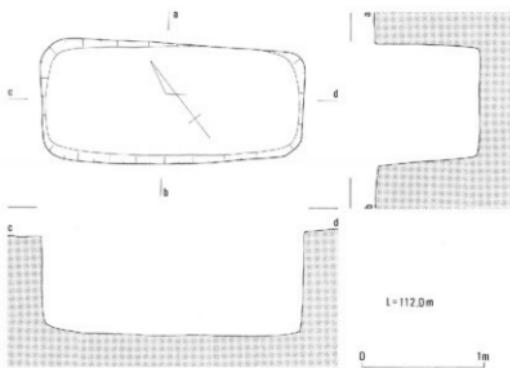
6は壺形土器である。頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。端部は肥厚して上にやや拡張し、端面には4条の凹線をめぐらせる。頸部、口縁部はナデで仕上げる。頸部外面の仕上げの調整は上位が縦方向のハケ調整で、最大径部付近では上から横または斜方向のハケ調整を加え、最大径より下が最後に縦方向のヘラミガキを上から施している。内面は、頸部までヘラケズリで仕上げる。

7~9、12は底部である。7の外表面はハケ調整で下位を中心にナデを加えて仕上げる。8は外表面を下

端まで縦方向のヘラミガキで仕上げ、内面はヘラケズリである。9は外面はナデ、内面はヘラケズリである。12は、外面はハケ調整の上から下位にはやや粗くヘラミガキを加え、上位にも部分的にヘラミガキ、ナデを加える。内面はハケ調整で一部にナデを加え、底面付近はナデで指頭圧痕が残る。

#### 土壤40（第114図）

調査区東部中央付近、丘陵上平坦部のやや西側斜面寄りに位置する。細長い長方形プランで、長辺方向の主軸は尾根筋に直交する。壁面はほぼ垂直である。底面の長辺方向で最大208cm、短辺方向で最大90cmを測り、深さは最大で86cmを測る。遺物は、弥生土器片が小型のポリ袋1袋分、安山岩剥片が1点出土した。

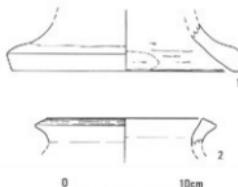


第114図 土壌40平・断面図 (S = 1 : 40)

#### 土壤40出土土器（第115図）

1は脚部である。脚端部はやや肥厚し、端面は平坦である。外面はナデ、内面はヘラケズリで仕上げる。

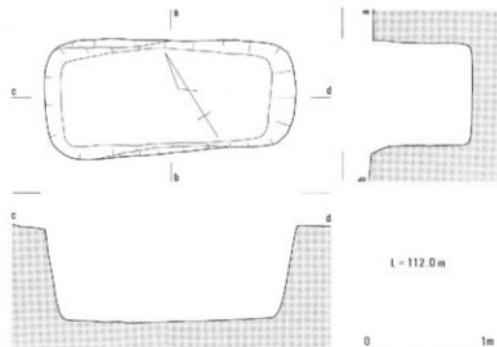
2は彫形土器である。頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ器形と考えられる。端部は上下にやや拡張し、端面には3条の凹線をめぐらせる。内外面ともナデで仕上げる。口縁部下面には、スヌの付着がみられる。



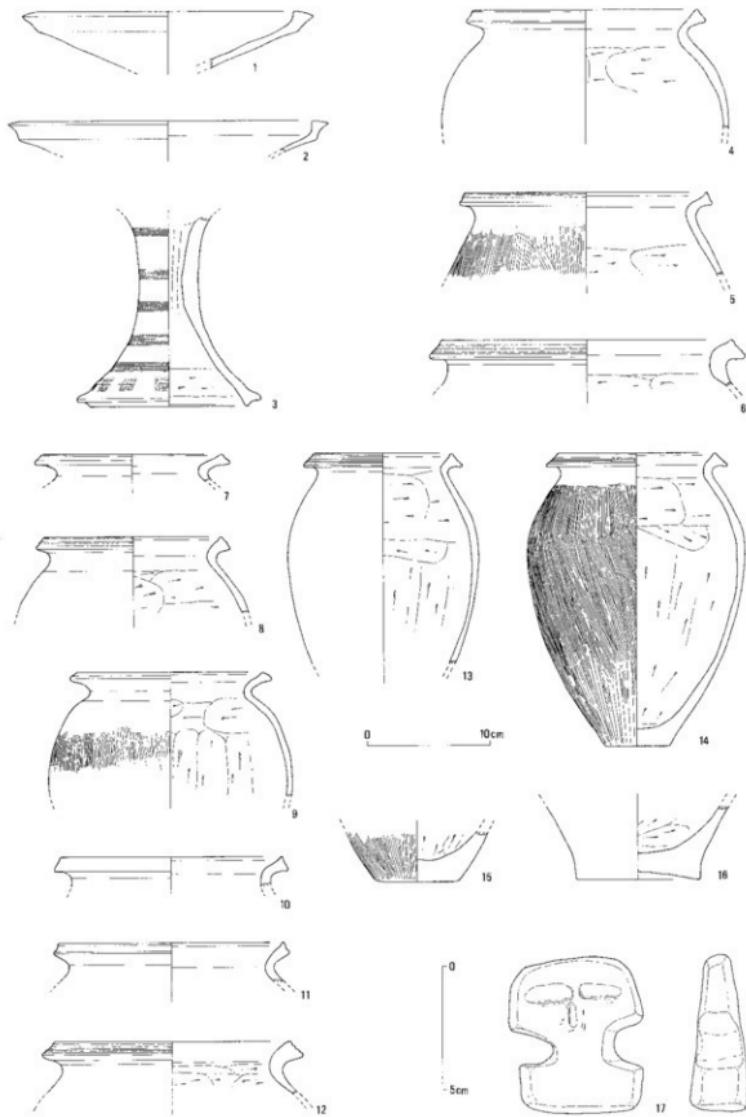
第115図 土壌40出土土器 (S = 1 : 4)

#### 土壤41（第116図）

調査区東部中央付近、丘陵上平坦部のやや東側斜面寄りに位置する。細長い長方形プランで、長辺方向の主軸は尾根筋に直交する。壁面はほぼ垂直で、両側の長辺では上部の一部で傾斜が緩くなる。底面の長辺方向で最大174cm、短辺方向で最大78cmを測り、深さは最大で82cmを測る。遺物は、弥生土器片がコンテナ



第116図 土壌41平・断面図 (S = 1 : 40)



第117図 土壌4出土土器・土製品 (1~16…S=1:4、17…S=1:2)

半箱分、分銅形土製品が1点出土した。

#### 土壤41出土土器（第117図）

1～3は高杯形土器である。1、2は杯部である。いずれも浅めの杯部から「く」の字形に屈曲して立ち上がる口縁部をもつ器形である。2の屈曲部はわずかに突出して稜となっている。口縁端部は主に外方に拡張する。いずれも風化が進むが、2の端面には1～2条の凹線をめぐらせているようである。調整は明らかでない。3は胸部である。脚端部は、下方、外方へ拡張し、端面は凹面となる。外面には5段の櫛描文をめぐらせ、裾部には縦方向に櫛描文を施している。外面はナデ、内面は裾部をヘラケズリで仕上げる。

4～14は壺形土器である。いずれも頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。端部は、上方あるいは上下両方に肥厚または拡張する。端面は、凹面となるか、1～3条の凹線をめぐらせている。

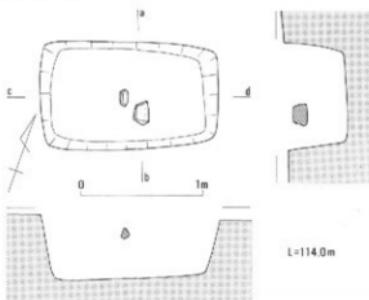
観察可能なものでは、頸部、口縁部はナデで仕上げ、胸部外面は5、9が縦方向のハケ調整、8がナデによる仕上げである。9は上位では横にナデを加えている。14の胸部外面の仕上げの調整は、上位が縦方向または急な角度の斜方向のハケ調整で、最大径部以下では上から急な斜方向のハケ調整を加え、底部付近が最後に縦方向のヘラミガキを上から施している。内面は、ほとんどのものが頸部までヘラケズリで仕上げるが、5はやや低い位置にとどめる。14の胸部外面、口縁部下面にはススの付着がみられる。なお、判別できなかったが、壺形土器の口縁部となる可能性のあるものも含まれる。

15、16は底部である。15の外面はハケ調整、内面はヘラケズリで底面には指による整形である。16の外面は風化のため不明瞭であるが、ハケ調整のようである。内面はヘラケズリである。

17は分銅形土製品である。ほぼ完形である。上部には目、鼻が表現されているが、わずかな彫みであり、本来は粘土帯を貼り付けていたものが剥離していると思われる。側縁下位では角が丸くなり、横断面は細長い小判形を示す。全面を丁寧なナデで仕上げている。

#### 土壤42（第118図）

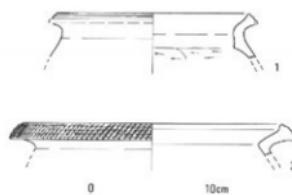
調査区南東部、わずかな鞍部状になった部分に位置する。長方形プランで、長辺方向の主軸は尾根筋に直交する。壁面はほぼ垂直か、やや外傾する。底面の長辺方向で最大126cm、短辺方向で最大76cmを測り、深さは最大で52cmを測る。遺物は、弥生土器片若干が出土した。



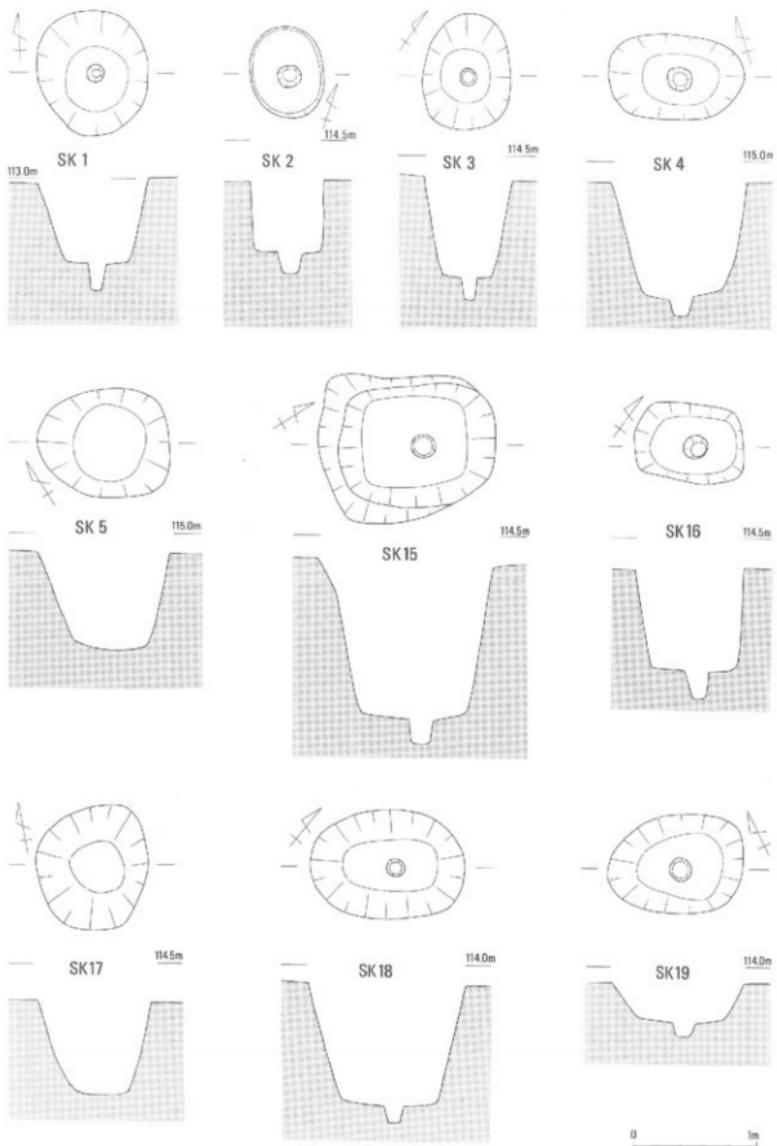
第118図 土壤42平・断面図 (S = 1:40)

#### 土壤42出土土器（第119図）

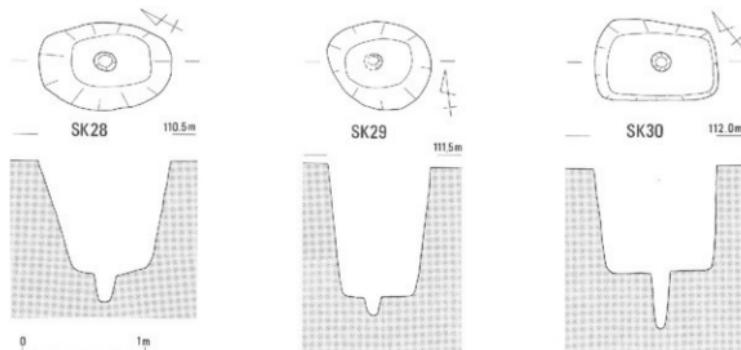
1、2は壺形土器または壺形土器の口縁部である。いずれも頸部から「く」の字形に外反する口縁部をもつ。2は特に鋭く外反する。端部はいずれも上下両方に拡張する。端面は、1は2～3条の凹線をめぐらせ、2は4条の凹線をめぐらせた上から、斜方向の連続刻み目文を施している。1は口縁部、頸部、胸部外面はナデ、胸部内面は頸部までヘラケズリで仕上げる。2は内外面ともナデで仕上げる。



第119図 土壤42出土土器 (S = 1:4)



第120図 土壠1～5、15～19平・断面図 (S = 1: 40)



第121図 土壙28~30平・断面図 (S = 1 : 40)

### ③その他の土壙 (第120図、第121図)

土壙5、17以外は底面に小ビットをもつ土壙である。このような底面に小ビットを配した土壙は、「陥とし穴」と考えられている。このような陥とし穴は総計11基検出された。プランは円形、楕円形、方形など様々である。調査区北半の西側から中央に多く、8基が分布する。残り3基は調査区北東部に点在している。獣道に沿って掘られたためか、おむね尾根筋上に1列に分布している。土壙5、17はプラン、断面、立地とも陥とし穴としたものに類似のものがみられるが、底面の小ビットはもない。時期、性格とも不明であり、その他の土壙に含めた。いずれも出土遺物は認められず、時期は明らかでない。

### (7) 出土石器 (第122図、第123図、第124図)

1は磨製の大型蛤刃石斧である。土壙8からの出土である。中程から折損している。2、3は偏平片刃石斧である。いずれも結晶片岩製である。2は住居址2の床面から、3は住居址8からの出土である。2は未製品と考えられる。風化が進み、剥離の状況は詳細には分からぬ。3は風化のため、刃部先端が欠けている。全面を磨いているが、一部に成形の際の剥離面を残すようである。2は結晶片岩製、3は白雲母石英結晶片岩製である。

4、5は石器未製品である。4は土壙12から、5は土壙11からの出土である。いずれも両面を両側から調整し、縦断面、横断面ともレンズ状を呈する。図の裏面はいずれも調整がやや粗い。4、5とも頁岩または粘板岩と思われる石材を用いている。

6は打製石庖丁である。図の下側が刃部である。刃部、背部とも両面から細かい調整を加え、刃付け、刃潰しを行っている。両側縁は両面から剥離し、抉りを入れている。サヌカイト製である。

7~9、14~16は2次調整のある剥片である。7~9は小型でサヌカイト製である。7は住居址20から、8は段状遺構11から、9は土壙35からの出土である。7は一部欠損するが、ほぼ縁辺部の全周にわたって調整を施している。調整は両面から行われ、図の下側が鋭い刃付け、他はやや鈍い刃潰し状になっている。スクレイパーとして使用された製品かもしれない。背面の一部に自然面を残している。8は、横長の剥片に粗い剥離を施したもので、両端は欠損している。剥離は主に背面に行われている。9は、

図は腹面で、上側は折損しているようである。剥離は、図の右下の部分の腹面に数カ所、連続して小さく施されている。14～16は、大型のもので、15は安山岩製、16は泥岩と思われる石材である。14は住居址21から、15は住居址12から、16は住居址14からの出土である。14は、図は背面である。腹面には剥離は行われない。図の左側、断面に矢印で示した面は磨かれている。砥石の破損品の可能性もある。15は、図の裏面は円錐の自然面である。裏側の自然面の剥離は小さいものが2カ所のみである。16は、両面に剥離が施されるが、図の裏面の剥離は粗い。図の左側の側縁は自然面である。

10、11はサヌカイト製の石鎌である。10は住居址4からの出土、11は土壙9からの出土である。10は表裏とも主要剥離面を大きく残し、縁辺部に向面から剥離を施す。基部の片面には一部自然面を残している。11は有茎式の石鎌である。表裏とも両側からの細かい剥離が中央で切り合い、稜をなしている。基部の後端は、クサビ状に尖らせている。いずれも風化は進んでいない。12は建物址10からの出土である。ヒョウタン形の小型の石器である。石鎌の一類かとも考えられるが、管見では類例を見ない。両面とも全周にわたって剥離を施しているが、図の表側の剥離はやや急角度で、裏面は平坦で主要剥離面を大きく残している。そのため断面は図の表側へふくらんだ、片寄ったレンズ状である。風化は進んでいない。サヌカイト製である。13は、サヌカイト製の石鎌未製品と考えられるものである。土壙35からの出土である。剥離はほとんど図の表側にしか行われていない。中途で折損している。

17は大型の安山岩剥片である。住居址8からの出土である。2次的な加工といえるものはほとんどみられない。裏面は丸い河原石状の自然面である。

18は、すり石と考えられるものである。住居址8からの出土である。偏平なおむすび形で、一方の側縁に、直交する方向の擦痕がみられる。

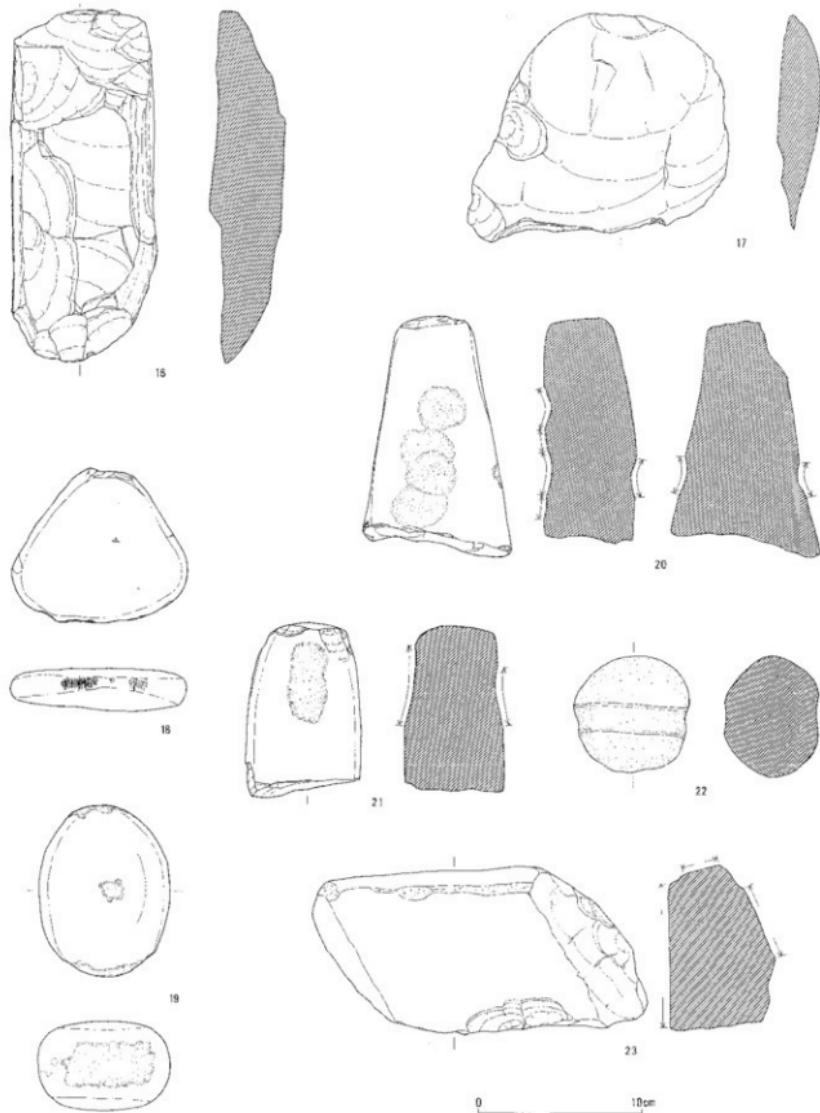
19～21は叩き石である。19は住居址17からの出土である。やや偏平な、楕円形の砂岩円錐を利用したものである。両面の中央部に窪みがあり、上下両端には敲打痕が認められ、自然面が潰れている。20は住居址18からの出土である。4方の側面には窪みがみられる。窪みは断面に矢印で示した部分である。図の正面以外の面では窪みは1カ所ずつである。横断面は方形を呈し、図の左右両側面は磨かれている。砥石としても利用されたものであろうか。21は、住居址21からの出土である。津山市人田十二社遺跡4号住居址（註2）、同西古田遺跡（註3）に類例がある「スタンプ状石器」と呼称されているものである。横断面は楕円形で、側面のやや平らな2面に窪み（断面の矢印部分）がみられる。棒状の謫が中途で折れたような形態であるが、図の下面以外の面は磨かれているようである。下面は平坦で、多数の小さな窪みがみられる。側面が叩き石として利用されているが、「スタンプ状石器」自体の詳細な用途ははっきりしていない。

22は石鍤である。住居址8からの出土である。やや潰れた球形で、中央部にベルト状に凹面がめぐっている。

23、24は砥石である。ともに住居址14からの出土である。砥面は断面に矢印で示した部分である。23は大型のものである。主要な砥面は図の表側、上側の2面であるが、裏面も一部が砥面として使用されている。上側の砥面は幅2cm程度の細長い面である。24は小型のものである。裏面には多数の穿孔痕と原石からの折り取り痕がある。図のスクリーントーン部分が穿孔痕で、矢印は穿孔方向を示す。原石に先の丸い棒状の工具で中心部を残して多数の穿孔を行い、最後に折り取っている状況が観察できる。中央部の折り取り面には細かい凹凸がみられるが、周縁部の各穿孔痕の間の部分にはこうした凹凸はみられず、半滑になっている。このことから、中心部を細く残すまでに、穿孔後に擦り切りなどの手法が用い



第122図 石器 (1) (1~9…S=1:2、10~13…S=2:3、14~15…S=1:3)

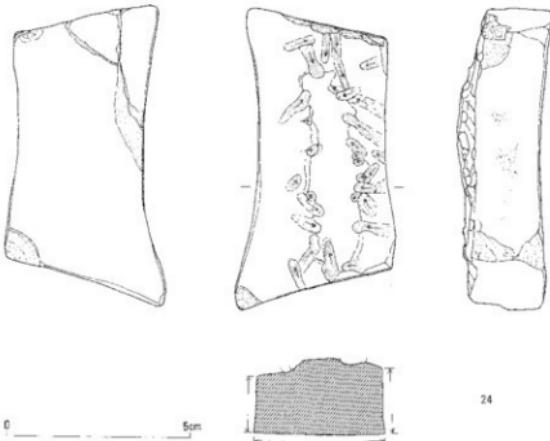


第123図 石器(2) (S 1:3)

られた可能性もある。

紙面は折り取った面  
以外の5面である。

23、24はいずれも、  
黄白色でキメの細か  
い石材が使用されて  
いる。



第124図 石器(3) (S = 3:4)

#### (8) その他の遺構と遺物

その他の遺構としては、近世墓と推定されるものが  
ある。土壙20~22、31、32、37がそれである。土壙32、  
37から近世の陶磁器が出土している。

遺構に伴わない遺物は、弥生土器片若干、縄文土器片1個体分がある。このうち第125図に縄文土器を示した。調査区北半中央部付近の南斜面の風倒木からの川土である。晩期の凸帯文土器である。口縁端部に刻み目を加え、口縁直下に貼り付け凸帯をめぐらせてそれに刻み目を施している。



第125図 遺構に伴わない遺物 (S = 2:3)

(註1) 宮本辰二郎「ベッド状遺構と屋内施設」『季刊考古学』第32号 雄山閣 1990

(註2) 河本 清、中山俊紀、安川豊史、行田裕美『大田十二社遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第10集』津山市教育委員会 1981

(註3) 行田裕美『西古田遺跡』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』津山市教育委員会 1985  
(註4) 石器の石材については、安川豊史氏のご教示による。

### 3 C地区の調査

丘陵頂上から北へ、急な斜面となって下ってきた尾根はC地区の付近で傾斜が落ち、狭い舌状の平坦部を形成している。C地区から下は再び急な傾斜となり、尾根先端は広戸川へ落ち込んでいる。平坦部では古墳、段状遺構各1基が確認された。調査面積は約300m<sup>2</sup>である。

#### (1) 1号墳（第127図、第128図）

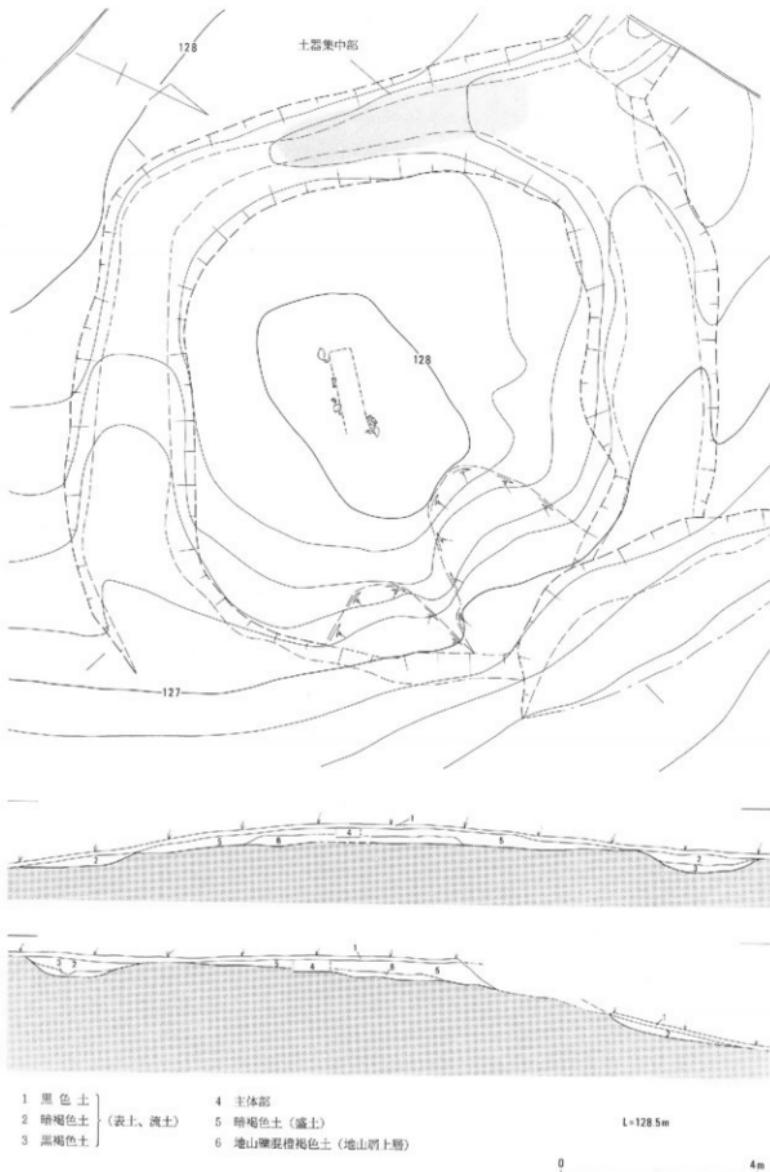
舌状の平坦部の突端、尾根筋からやや東側斜面に寄った緩傾斜部分に位置している。北西—南東方向で約9.5m、北東—南西方向で11m前後の方墳である。高さは山側で0.4m、谷側で1.3mである。斜面下方を除く3方に周溝が検出された。周溝西側コーナーの外側に接して溝状の遺構が検出されたが、1号墳に関連するものかどうかは明らかでない。墳丘下部の山側は周溝によって、谷側は削り出しによって整形されている。墳丘上部には盛上がり30cm～40cm程度遺存している。墳丘周縁部では地山を基盤層まで掘り下げ、中心部では地山層上層を芯状に削り残して（6層）、その上に単層の盛土（5層）を行っている。墳丘北東辺は一部に擾乱を受け、地形が乱れている。

主体部は墳丘中央からやや南東辺寄りに位質をずらして検出された。箱式石棺と考えられ、主軸は北西辺、南東辺にほぼ平行する。箱式石棺は原形をとどめないままで破壊されていたが、わずかに壁材が遺存していた。第128図の右下の板石が原位置に近いと考えられ、北西側長側壁壁材の北端付近のものと思われる。床面と思われる位置には径数cm程度の円謫が多数分布し、礫床をもっていたものと推定される。残存する壁材と謫の分布範囲から、棺の長さは1.8m前後、幅は40cm～50cm程度と推定される。

主体部からは遺物は出土しなかったが、北西側から、鉄鉗（第129図1）が出土した。擾乱によって



第128図 C地区遺構配座図 (S = 1 : 200)



第127図 1号墳平・断面図 ( $S = 1:100$ )

原位置から移動していると思われる。また、主体部付近の表土中から鉄鋸 2 個（第129図 4、5）が出土した。南西側周溝の中央部付近からは、3 層から土師器・須恵器甕（第130図 1）が一括して出土した。このうち土師器は土器集中部の中央部から南東部で、須恵器は北西半部でまとめて出土している。土師器の器種は高杯を中心で、少なくとも 9 個体がある。またこれらの土器に混じって甕（タガネ）（第129図 2）が出土した。甕は 3 層上部または 2 層の下部からの出土である。墳丘西側コーナー付近の周溝内からは、須恵器甕片（第130図 3～6）が出土した。また北西側周溝中央部付近からは、刀子（第129図 3）が出土した。刀子は 3 層上面からの出土である。

#### 1号墳出土遺物

##### 鉄器（第129図）

1 は鉄鋸である。全長38.5cmを測る。2本の鉄製の棒状体を交差させ、交差部に孔をあけて鉄心を通して、両端をかしめて連結させている。X線写真から、孔は径6.5mmの円形、鉄心は径5.5～6 mmの断面円

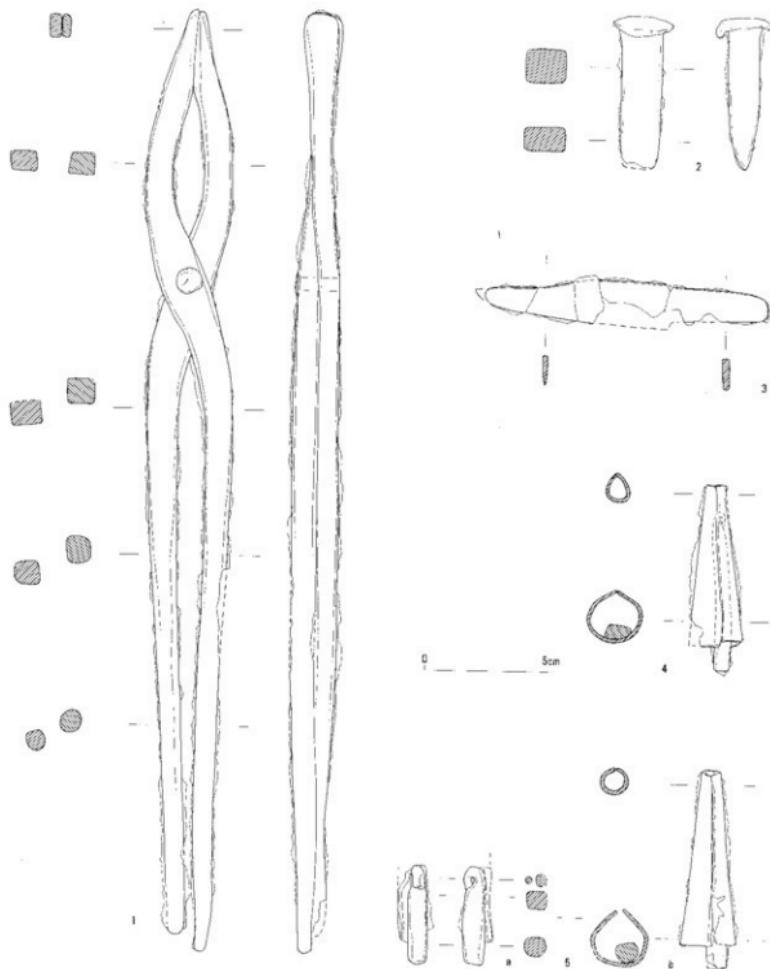
形である。握り部は、ほぼ真っすぐな棒状を呈する。握り部の後端部付近は断面円形を呈し、連結部近くではシャープな方形の断面となる。中央部付近では、内側に角を残すが、外側は丸みの断面になっている。連結部付近では両方の棒材ともやや偏平な断面である。挟み部は、棒材を弧状に曲げ、先端部内側 3 cm 程が真っすぐになっている。挟み部は、いっぱいに閉じた状態では先端のみが接触するが、間に何か厚さのある板状のものを挟んだ場合、この 3 cm の部分が面として接触するようである。

2 は甕である。全長6.3cmを測る。断面は長方形で、先端部には両側から刃が付けられている。上端部は使用により潰れている。

3 は刀子である。刃部長は 8 cm 前後である。銹化によって折



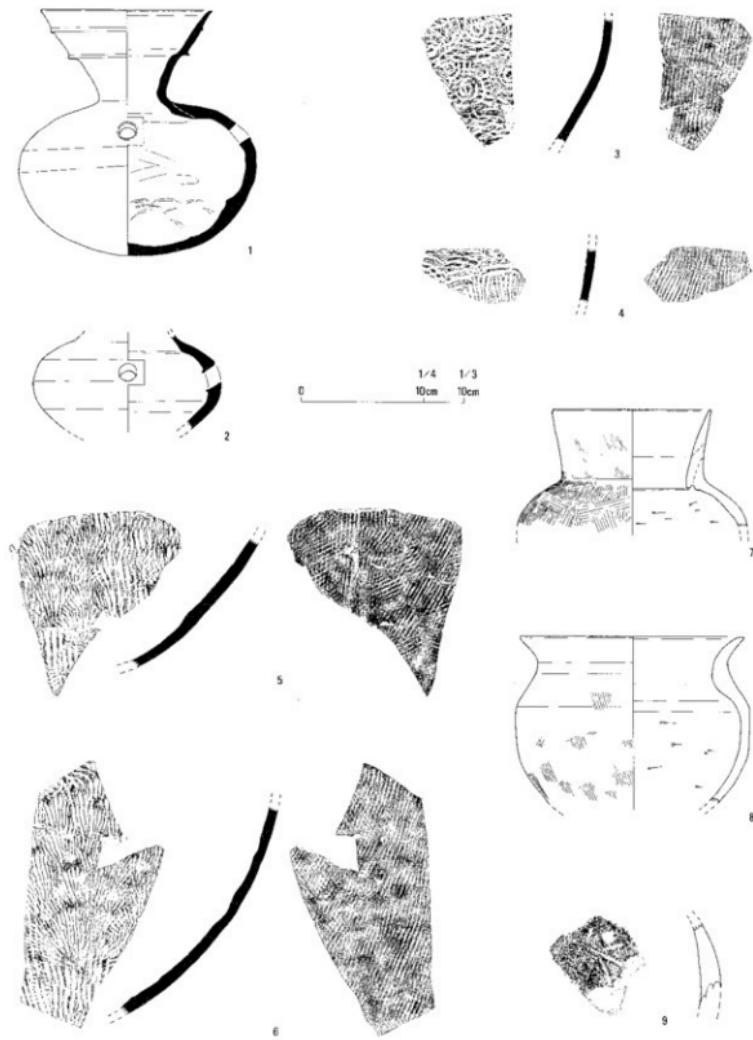
第128図 1号墳主体部平・断・立面図 (S = 1 : 20)



第129図 1号墳出土鉄器 (S = 1 : 2)

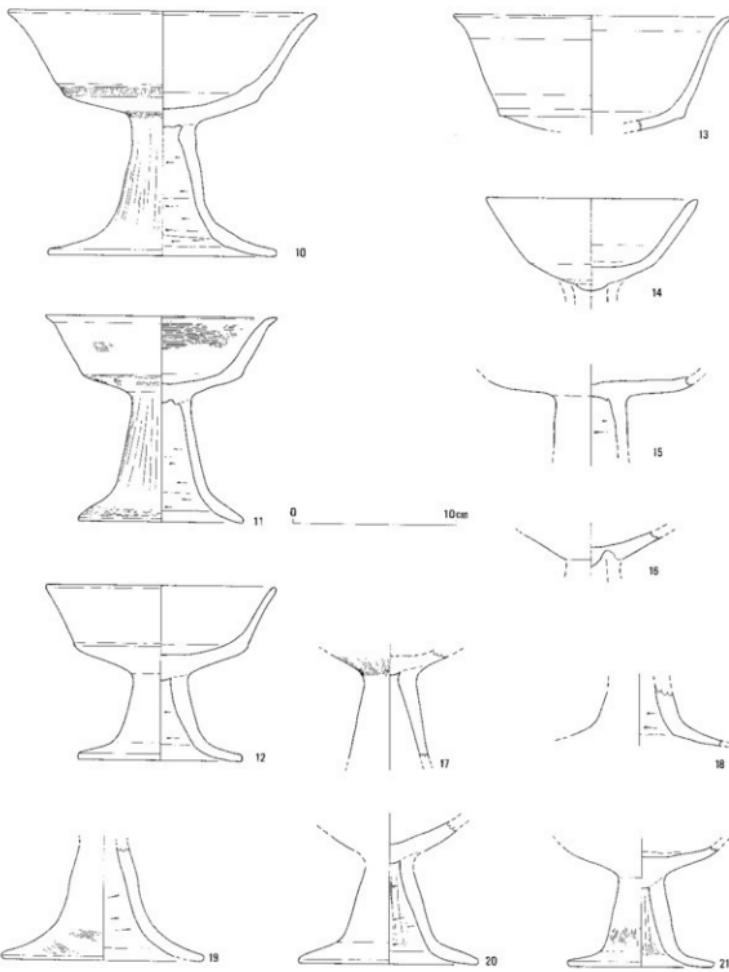
れ曲がっているが、本来刀背は直線になると思われる。闇の有無は明瞭でないが、刀背の基本端から4cm程のところにわずかな段が付くようであり、これが闇になる可能性がある。目釘穴の有無は明らかでない。刀身の先端は丸くなっているが、折損はしておらず刃になっており、使用による研ぎ減りと考えられる。

4、5は「鉄鍔」と考えられる。いずれも厚さ1mm程の鉄板を円錐状に丸め、中に同じく鉄製の舌が入っている。上端部は尖らず、筒状に上に抜けている。4は筒部の長さ6.6cm、全長7.6cm、5は筒状



第130図 1号墳出土土器 (1) (1, 2, 7~9 S = 1:3, 3~6 S = 1:4)

部の長さ7.1cm、全長8.1cmを測る。5 aは舌で、5 bの内部に入っているものである。全長は4.0cmである。断面は下部は楕円形、上部は方形である。舌の上端は断面円形の棒状に片側に細くし、輪状に折り返して細い部分の基部にしっかりと密着させ、吊り手としている。4の舌は長さ6.5cmで5 aよりも長い。X線写真から、上端は5 a同様の構造と思われる。いずれの筒状部の内部にも紐をかけるための加



第131図 1号墳出土土器 (2) ( $S = 1:3$ )

工は確認できず、舌の吊り下げ方法については明らかでない。

#### 土器 (第130図、第131図)

土器類は土師器を中心に、若干の須恵器を交えて、合計コンテナ半箱程度出土した。土師器はほとんどが南西側周溝の土器集中部からの出土である。図示した土師器は、15の高杯が周溝内南コーナー付近からの出土であるが、それ以外はいずれもこの部分からの出土である。

1、2は須恵器甌である。1は全体に丁寧でシャープな作りのものである。口頸部は細く、そこから直線的に外上方へのびる口頸部をもつ。頭部と口縁部との境界には段をつけてやや外側へ広げ、外面には段の部分と口縁部中位に稜をめぐらせている。稜は突出度も高く、非常にシャープな印象を受けるものである。これ以外に器体には装飾は施されない。体部は、肩の張った、いわゆるいちじく形の器形に近いが、底部は丸みが強い。円孔の穿孔の際に周囲に盛り上がった粘土は丁寧に削り取られている。底部外面は不定方向のナデ、体部の中位以上と口頸部の外面は横ナデで、いずれもキメの細かい、丁寧な仕上げをしている。内面はおおむねナデであるが、底部に当て貝痕が残る。2は北西側周溝内からの出土である。体部の最大径は中位にあり、肩の張らない器形のようである。内外面とも横ナデで仕上げる。

3、4は須恵器甌と考えられる破片である。すべて同一個体のものと思われる。いずれも外面は平行叩きの上からナデを施し、3、4にはカキメが施されている。内面は、4、6では2種類の当て具が用いられている。胴部上位には同心円の、下位には平行する溝を刻んだ当て具が用いられているようである。4では同心円文の後から平行當て貝痕が付けられている。

7は上師器直口盃である。口頸部は内外面とも横ナデ、胴部は外面はハケ調整、内面はヘラケズリである。口頸部は別作りのものを胴部に接合している。

8は上師器甌である。口縁部は「く」の字状に緩く外平する。全体に風化が激しいが、口縁部付近はナデ、胴部は外面はハケ調整、内面はヘラケズリのようである。

9は土師器甌または甌の胴部片と思われる。鳥の足形の箇記号が刻まれている。

10~21は上師器高杯である。11~13は、浅い杯部底部から外面に稜を形成して屈曲し、口縁部へ外反して立ち上がるるものである。12は稜をやや突出させている。14は椀状の杯部で、底部からやや屈曲して立ち上がるものの、稜はなさない。脚部はいずれも、立ち上がりの急な「ハ」の字形の筒部から、大きくなっただ状に聞く脚部をもつが、筒部と脚部の境界はやや不明瞭である。基本的に、杯部、脚部の内外面はナデで仕上げるが、一部に下地のハケメを残す。脚筒部外面は10、11はヘラミガキがみられ、20、21はナデである。脚筒部の内面は、21が絞り痕を残して未調整である以外はヘラケズリを施している。

## (2) その他の遺構と遺物

### 段状遺構1（第126図、第127図）

1号墳の北側コーナー付近に一部重複して位置する。斜面を削り出し、長さ6.9m、幅1.7mの平坦面を作り出している。遺物は弥生土器片若干が出土したが、正確な時期は明らかでない。

## IV まとめ

### 1 繩文土器の時期について

A地区において縄文土器片が100点あまり出土しており、それらの所属時期は早期・前期・晚期に比定できるが、中期・後期に比定できるものはなく、その間は空白である。以下、それぞれの土器について若干の説明を加える。

1・2は楕円押型文を施す厚手の土器である。楕円押型文を施すものとしては瀬戸内沿岸部の黄島式が著名であるが、黄島式の有文土器は概して器壁が薄く、本例とはやや様相を異にするものの、本例も黄島式の範疇で捉えられるものである。また、3・4については小片であるが、器壁の薄さや口縁部直下の押し引きの特徴から、前期の彦崎Z1式に並行する。5は形式名は不明であるが、前期に位置づけられる土器である。6は外面の刺突文・内面の条痕文の特徴から、羽島下層式に並行するものである。7・8及び11~17については縄文・爪形文の特徴から前期の磯ノ森式に並行するものである。9については羽島下層式・磯の森式に並行する時期のものと思われる。10については前期末に位置づけられるものと考えられる。18~21は晚期の浅鉢形の土器であり、19のII縁端部内面の断面錐鉢状の肥厚帯の特徴から谷尻式ないしは原下層式に並行するものと思われる。器面は内外面共に丁寧に磨かれている。22~24については所属時期は不明である。

以上、出土した縄文土器について概略を述べてきた。津山市域においてはこれまで縄文時代の遺跡・遺物についてはほとんど調査例がなかったためにその様相については必ずしも明らかではなかった。しかし近年、断片的ではあるが縄文時代の遺物の出土例が増加しつつある。縄文時代早期の遺物としては東藤坊遺跡（註1）、大闊遺跡（註2）において押型文が出土している。また、大田遺跡（仮称）では押型文土器が伴う堅穴住居跡が発掘されている（註3）。また、西吉田北遺跡から南へ約700mの場所に位置するクズレ塚古墳下層からは早期から前期にかけてのものと考えられる無文土器と突帯文土器が出土している（註4）。中期に属する土器については現在のところ明らかではない。後期・晚期のものとしては正凸庵遺跡から後期の磨り消し縄文土器や晚期の前池式に並行すると考えられる深鉢が出土している（註5）。さらに 大田茶屋遺跡においても土壤から晚期の谷尻式期の深鉢や浅鉢、沢田式期の深鉢が出土している（註6）。

岡山県の山間部においては、早期の押型文を出土する時期には多くの遺跡が知られているが、前期・中期になるとほとんど遺跡がなくなり、後期になって再び遺跡数が増大し、晚期には突帯文土器を出土する小遺跡が大半を占める（註7）。津山市域においても遺跡数はわずかであるものの、同様な傾向が認められる。そうしたなかで今回西吉田北遺跡において点数にしてわずかではあるものの、確実に前期に位置づけられる上器が出土したことは注目され、周間にさらに遺跡の存在する可能性が考えられる。

### 2 弥生土器の時期について

西吉田北遺跡から出土した弥生土器は、中期後葉から後期前葉、後期後葉の大きく2つの時期に分ける。このうち中期後葉から後期前葉にかけては継続して集落が営まれていたようである。以下、中期後葉から後期前葉にかけての時期を中心、弥生土器の時期について検討してみたい。

### (1) 中期後葉から後期前葉の土器について

美作地域でのこの時期の土器編年としては、中期後葉では西吉田遺跡報告書（註8）の中で4期に細分する案が、また、後期前半については小原遺跡報告書（註9）の中で2期に細分する案がそれぞれ示されている。しかし、中期後葉新段階新相の西吉田Ⅲ式と、後期前半古段階の小原Ⅰ期の土器との間にはかなりの開きがあり、中期から後期への移行期の土器の状況については明らかではないとされていた（註10）。西吉田北遺跡では、西吉田Ⅲ式期から、小原Ⅰ期にかけての土器が確認されている。その中には前記の両型式の中間的な様相をもつものがあり、そのギャップを埋めるものとなるようである。しかし、そうした中間的な様相をもつ土器は個体数が少なく、また一括りの高い場合でも前後の時期の土器と混在して出土している状況である。ここでは型式学的な手法により、それらの中から中間的な様相をもつものを抽出して仮に1つの型式（西吉田北Ⅱ式）とし、編年を試みてみたい。

#### 西吉田北Ⅱ式土器（第133図上段～中段）

西吉田Ⅲ式土器に対応すると考えられる型式である。

高杯形土器は、椀状の杯部から鈎状に口縁端部が張り出し、端面に鏽文をめぐらせるものと、やや内湾して斜めにのびる杯部下段から屈曲し、やや外傾して立ち上がる口縁部をもつものがある。後者は外面に凹線文をめぐらせ、やや内傾する平らな口縁端面をもつ。後者の類例は、鳥取県溝口町長山馬籠遺跡にみられ、中期後葉とされる（註11）。脚部はラッパ状に開き、外面に多条の凹線文をめぐらせており、脚部の無文帶に三角形透かし孔を穿つものもあるが、退化しており内面まで貫通しない。

壺形土器は、頸部が胴部から大きく外湾して朝顔形に上方へ開き、頸部には凹線文を、肩部には柳描波状文、柳描直線文をめぐらせるものと、胴部がそろばん玉状に張り出し、その上位を多条の凹線文、斜格子目文で飾るもの2種がある。後者の存在がこの時期の特徴である。口縁端面には凹線文の上から斜方向の連続刻み目文を密に施し、また円形浮文を施すものもみられる。

短頸の壺形土器、腹形土器は頸部内面にナデ仕上げの鋸い棱を形成する。内面はハケ調整、ナデを中心とするが、胴部下半にヘラケズリがみられるものもある。

器台形土器は口縁端部が大きく垂れ下がり、上面に水平面を形成する。水平面には柳描波状文をめぐらせ、端部外面は斜方向の連続刻み目文、やや大型の円形浮文で加飾する。脚部は外面に多条の凹線文をめぐらせ、下部に円形透かし孔を穿つ。脚端部はやや外方へ拡張する。

#### 西吉田北Ⅱ式土器（第133図中段）

西吉田Ⅲ式土器と小原Ⅰ期の土器の中間的な様相を示すものである。

高杯形土器は、直線的に斜めに延びた杯部から屈曲し、やや外傾して立ち上がる口縁部をもつ。端部は小さなT字形で、主に外方へやや拡張する。口縁部の外傾度、端部の拡張度ともⅢ式よりも小さい。また、直線的に斜めに延びた杯部から屈曲し、まっすぐ立ち上がる口縁部をもち、端面を丸くおさめるものもある。SK 6-2は、岡山市雄町遺跡（註12）に類例が求められ、高橋護氏の編年（註13）では後期初頭のVIIa期とされている。SH 2-2は凹線文が消失していることからやや新相を示すものであろうか。また、第81図3も沖山周辺に類例をみないが、これらに近いと考えられ、口縁部外面の凹線文は退化が進み、胎土、焼成も後期的である（註14）。脚部については明らかでない。

西吉田北Ⅰ式

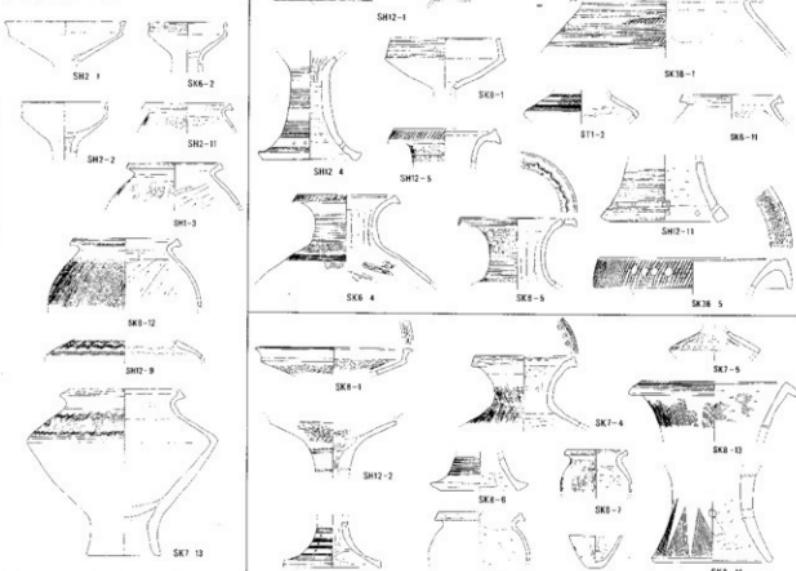
1



期

西吉田北Ⅱ式

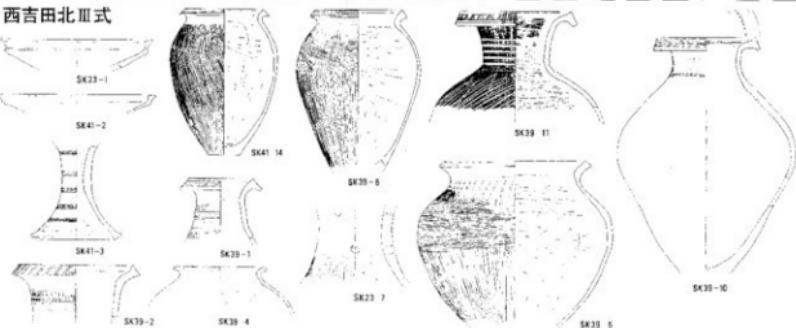
2



期

西吉田北Ⅲ式

3



期

第132図 西吉田北遺跡中期末～後期前半弥生土器編年図 (S = 1:8、SK39-10, 11…S = 1:12)

壺形土器は、そろばん玉状に頸部が張り出す器形のもので、肩部の凹線文が退行して最大径部上位にわずかに残るのみとなり、上位は横描波状文に置き換わっている。また頸部内面のナデ仕上げによる稜も退化傾向を示している。

壺形土器は頸部内面にナデ仕上げの鋭い棱をつけて外反するもので、頸部付近までヘラケズリを施したものである。

#### 西吉田北Ⅲ式土器（第133図中段～下段）

小原遺跡Ⅰ期の範疇でとらえられるものである。

高杯形土器は、直線的に斜めに延びた杯部から屈曲し、外傾して立ち上がる口縁部をもつ。II縁端部は主に外方に拡張するが、大きさは張り出さない。端面には凹線文がめぐるものが多い。胸部はラッパ状に開き、外面に数段の横描文を規則正しく施すを中心とし、また間隔の広い凹線文をめぐらせるものがある。

壺形土器は、頸部がそろばん玉状に張り出す器形では、凹線文の退化、文様の簡略化がさらに進み、頸部最大径の上位に連続刺突文をめぐらせているだけである。西吉田北遺跡ではSK7-5以外に良好な資料がみあたらないが、小原遺跡段状遺構I出土の例（小原Ⅰ期、第133図）などがこれにあたる。長頸のものでは、中期に多くみられた弧状に外湾した朝顔形の頸部は減少し、直線的な筒状にのびる頸部が上端で屈曲し、外方へ開く口縁部をもつ形態が主になる。長頸のもの、短頸のものとも、頸部上端から頸部の下位に刺突文をめぐらせるもののがみられる。口縁端面には凹線文の上から斜方向の刻み目文を施すものがあるが、断面が楕円状の間隔の広いものとなっている。

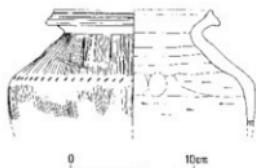
器台形土器は、外湾した胴部上端から口縁端部が屈曲し、短く斜めに垂れ下がる。胸部は立ち上がりが急で、裾部に鋸歯文をめぐらせ、中位に円形透かし孔を穿っている。

壺形土器や器台形土器のII縁部などにみられる刻み目文、円形浮文はⅠ式以後は衰退し、代わって鋸歯文、竹管状工具による円形刺突文が中心になっている。

壺形土器は、頸部付近までヘラケズリを施す。内面のヘラケズリの上端が稜をなすものもあるが、II縁部のナデ仕上げの鋭い棱は退化し、丸みをもって外反するものが一般的となる。

なお、第94図1の壺形土器口縁部については、広島県北部の塩町式の範疇に入るものと考えられ、後期初頭に位置付けられる（註15）。

編年軸の上ではⅠ式→Ⅱ式→Ⅲ式という流れになる。しかし、上器の型式変化の上では時間軸と編年軸は必ずしも平行せず、相互に影響し合いながら漸移的に進むこともありうる。Ⅰ型式をⅠ時期として前後の時期の間に線を引くことは現実にそぐわない場合があると考えられる。津山市金井別所遺跡住居址2、段状遺構1（註16）や、ビシャコ谷遺跡第5号長方形住居状遺構（註17）で、占い様相をもつもの、新しい様相をもつものが一括遺物として検出されている状況からもこのことはいえるであろう。西吉田北遺跡においても、Ⅱ式の上器はほとんどすべて前後の型式の土器と混在し、またⅠ式とⅢ式の土器が混在している場合もある。その中にはただちに混入とは考えにくいものもあり、Ⅱ式のⅠ型式をⅠ時期と区分することは難



第133図 小原遺跡段状遺構I出土土器  
(S=1:4)

しい状況にある。以下、他の遺構と重複がなく、一括遺物、または多量の遺物のある遺構を中心とした出土状況から、西吉田北Ⅰ～Ⅲの各型式の時間的な関係を考えてみたい。

住居址11、15は削平により、遺構堆土は床面付近の一部しか残存しておらず、出土遺物は住居廃棄直後の短い時期のものと思われる。内容はほぼ完全にⅠ式で占められる。また、段状遺構11ピット2出土の上器は一括遺物と考えられるが、やはりⅠ式のみで占められる。他にも住居址20など、純粹にⅠ式しか出土しない遺構が存在する。住居址5、段状遺構13などもⅠ式よりもややさかのぼる可能性はあるものの、純粹に中期後葉のみの土器で占められるものである。いずれも遺物量はさほど多くはないものの、Ⅰ式のみを出土する遺構が存在することは確かなようである。

土壤7から出土した遺物は、一括して廃棄された状況を示すが、Ⅱ式の壺形土器（第83図13）とⅢ式の土器が混在している状況がうかがえる。また、住居址12は、上部が大きく削平され、遺物は床面に近い位置からの出土である。この中で、第31図1、4などⅠ式に含まれるもの、2、3などⅡ式に含まれるもののがいずれも大破片で出土した。また、9のⅡ式の壺形土器を伴っていることは注意される。この他、住居址2、土壤6など、Ⅱ式土器をもつ遺構ではⅠ式、Ⅲ式がそれぞれ大破片でかなりの数ずつ混在していることは示唆的である。住居址1からはⅡ式と考えられる壺形土器が出土したが、遺物量はごく少なく状況は明らかでない。

土壤39の一括出土の上器は、12の底部にやや疑問が残るもの（註18）、Ⅲ式のみで構成され、Ⅱ式以前の土器は他に全く混じらない。また、多量の土器が出土した土壤41でも、ほぼ完全にⅢ式で占められている。土壤23は、削平により底部付近しか残っていないと考えられるが、遺物量はやや少ないものの、すべてⅢ式で占められる。

こうした状況を考えると、西吉田北Ⅰ式、Ⅲ式が純粹な形で存在する時期の中間に、Ⅱ式とⅠ式、Ⅲ式が同時に存在している状況があるようである。ただ、同一遺構出土の上器で、Ⅰ式とⅡ式だけで構成されるものはなく、Ⅱ式を出土する遺構では必ずⅢ式も出土するようである。

Ⅰ式が純粹な形で存在する時期を1期、Ⅱ式にⅠ式、Ⅲ式が混在する時期を2期、Ⅲ式が純粹な形で存在する時期を3期として第132図に示した。1期は住居址11、15、20、段状遺構11ピット2の、2期は住居址1、2、12、土壤6、7の、3期は土壤23、39、41の出土土器に代表される。なお、段状遺構1、土壤8、38の遺物については、Ⅱ式を欠いてⅠ式とⅢ式が混在し、遺物量も多くないものの、便宜上2期の中で図示した。

西吉田北Ⅰ式土器は、從来の編年では中期末の西吉田Ⅲ式上器に対応すると考えられる。後期前半は古段階（小原Ⅰ期）と新段階（小原Ⅱ期）に分けられると考えられてきたが、編年軸の上では、西吉田北Ⅱ式土器としたものは後期の特徴をもちながら、明らかに小原Ⅰ期の土器に先行する様相をみせることから、古段階は古相と新相にさらに区分することができそうである。以上の関係を表1に示した。

県南部の編年（註19）との併行関係では、西吉田北Ⅰ期は鬼川市0式期（高橋編年VI-b期）

		西吉田、小原報告書	本報告書
中 葉			
後 古	金井別所 西吉田Ⅱ式		
葉 新	ビシャコ谷 西吉田Ⅲ式、押入西	西吉田北Ⅰ期、 西吉田北Ⅱ期	
後 古		西吉田北Ⅱ期	
前 古	小原Ⅰ期	西吉田北Ⅲ期	
半 新	小原Ⅱ期		

表1 従来の編年との対比

に、2期は高橋編年Ⅷa期に、3期は鬼川市I式期（高橋編年Ⅷb期）にそれぞれ求めることができよう。

以上をまとめると、中期末の西吉田北1期の土器群は、2期の段階で、急激に後期的なものを受け入れながら変化し、時間軸の上では緩やかに交替していくようである。そして西吉田北2期の段階で色濃く残っていた中期的色彩は、3期の段階に至って非常に希薄なものになる。このことは県南部の土器の動向ともかかわってくるものと考えられる。（註20）。

以上、限定された資料からの考察でかなり強引な感もあるが、まとめとしたい。ただ今回仮に設定した西吉田北II式は資料数も少なく、また器種も一部に限られるため不明な部分が多く、今後の研究さらに整理、検討される必要性を多く残していることを書き添えておきたい。

## （2）後期後葉の土器

この時期の土器は、住居址14、24から出土している。器種は楕形土器と、壺形土器または甕形土器がある。楕形土器は高台が付くものと付かないものがある。住居址24出土の高台付きのものは、杯部が深い半球形で、高台の形態が明らかなものはいずれも幅が外溝して水平方向に開く。こうした形態のものは鳥取市秋里遺跡に類例が求められる（註21）。この例は、藤田憲司氏の編年（註22）ではIV期の中でも古い時期で鍵尾式に後続する一群とされている。また、高橋義氏の編年（註23）のIXb～IXc期の中にも高台部の形態に類似のものがみられる。住居址14出土の壺形土器または甕形土器口縁部も、高橋編年のIX期の範疇に含まれるとみられるものである。

## 3 各遺構の時期と集落の変遷について

### （1）遺構の時期について

西吉田北遺跡では、弥生時代、古墳時代の遺構が検出されている。以下、各時代の遺構の時期について述べる。

弥生時代の遺構については、2の上器編年で述べた1期～3期の時期区分に従い、小片も含めた出土土器を検討した結果、第134図のように遺構の時期を推定して区分した。上段の1期～2期としたものの内、黒く示したのは1期、白抜きで示した遺構が2期またはその可能性が高いと考えられるものである。中段の2期～3期としたものでは、白抜きは同様に2期、黒く示したのが3期と考えられる遺構である。ただ、出土遺物が少量の遺構の場合、前述のようにI～IIIの各型式の土器が混在する時期があると考える以上、その時期は大まかな傾向として把握するにとどめざるを得ない。

1期としたもの内、住居址4、5、9、は、I式の特徴であるそろばん玉状に副部が張り出す壺形土器で肩部に凹線文、斜格子目文を施すものがみられず、やや時期が遡る可能性はあるものの、中期後葉の範囲の近い時期に収まるものとみられる。また、住居址17、23では上器片は形態、胎土、焼成とも中期的なものが大部分を占めるが、かなりIII式の土器が交じっている。II式の上器は存在しないものの、2期として図示した。土壤8では、III式を中心にしながらもかなりの中期土器を含み、土壤38では大破片を含めてI式土器を中心とするが、III式以降の土器片も若干交えている。いずれも2期として図示した。他のまとまった遺物がない遺構は、出土遺物の内、新しいものの時期をもってその遺構の時期とした。

次に、古墳時代の遺構の時期であるが、4世紀代から7世紀ころまでの遺構が認められる。